

筑後国府跡 国分寺跡

—平成16年度発掘調査報告・概要報告—





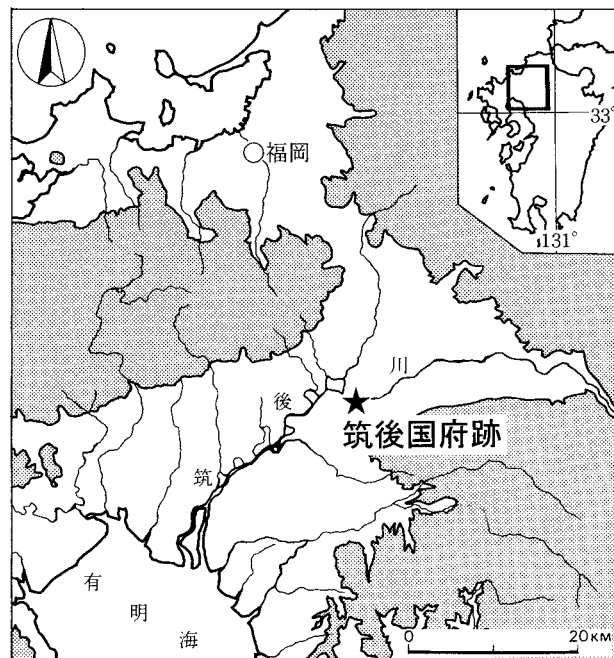
▲筑後国府跡第188次調査全景（東上空から）



▲筑後国府跡第188次調査出土遺物（花文緑釉陶器皿・白磁鳥形つまみ）

筑後国府跡 国分寺跡

—平成 16 年度発掘調査報告・概要報告—



2005. 3

久留米市教育委員会

序

筑後平野の中心に位置する久留米市は、耳納山地の緑、筑後川の水に象徴されるように、豊かな自然に恵まれています。また、九州のクロスポイントとして交通の要衝にもあたり、筑後地方の中核都市として発展を続けています。本年度は、近隣の田主丸町・北野町・三潆町・城島町と広域合併を行い、新・久留米市として、新たな一步を踏み出したところでもあります。久留米市には、恵まれた環境のもと、人々は多くの文化を創造し、各地に貴重な文化財が数多く存在しています。

特に、本書で報告します筑後国府跡・国分寺跡は、古代、筑後地方の行政・経済・文化の中心として発展し、現在にいたる久留米市の発展の礎となりました。

本書は、久留米市教育委員会が国・県の補助を受け、平成15・16度を実施した、筑後国府跡・国分寺跡の発掘調査報告です。

筑後国府跡は、1961年に九州大学考古学教室によって、全国に先駆けた発掘調査が行われて以来、本市教育委員会が継続して調査を実施してきました。長年の調査の結果は、官衙研究に新たな情報を発信し続け、全国的にも注目されている重要な遺跡です。今回報告される中では、礫敷き舗装された古代西海道を検出し、Ⅱ期国庁に併行する国司館の南部分を調査するなど、注目すべき調査が行われました。

筑後国分寺跡は、1952年に福岡学芸大学（現福岡教育大学）久留米分校によって発掘調査が実施され、福岡県教育委員会の調査を経て、久留米市教育委員会が継続して調査を行っております。本年度は中門推定地を調査するなど、重要な成果を得ることができました。

今回の発掘調査とその成果を掲載した本報告書の発行によって、久留米の歴史解明、更に文化財愛護思想の理解や普及に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました各地権者や地元の皆様、筑後国府跡発掘調査指導員の諸先生方をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年 3月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が国・県費の補助を受けて、平成15・16年度に実施した筑後国府跡・筑後国分寺跡の発掘調査報告・概要報告である。
2. 調査は教育文化部文化財保護課の小澤太郎・神保公久・松村一良・水原道範が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は各調査担当者の他、今村美津子・鬼塚成利・香月清子・梶島ミドリ・小林美佐代・田中樹子・楢原初美・廣木誠・藤木幸子・渡辺しげ子・渡邊やつ子が行った。また、本書に掲載した図面類の作成は、各調査担当者と非常勤職員の江口里織（平成15年12月より臨時職員）・香椎佳子・畠中和子・米澤美詠子、臨時職員の原田志保・丸山裕見子が行った。
4. 空中写真を除く遺構写真のカメラは、マミヤ RB67、記録写真のフィルムは、白黒フィルム（T-MAX 100）・カラーリバーサル（エクタクロー EPP）を全て6×7判で、各調査担当者が撮影した。また、遺物写真のカメラは、トヨビューー45GⅡを使用し、白黒フィルムはT-MAX100（6×9判）・カラーリバーサルフィルムはエクタクロー EPP（6×9判）を用いて、古賀元子の協力を得て、園井正隆が撮影した。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成し、表記のない方位は座標北、Nは磁北を示す。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、SB－掘立柱建物、SD－溝、SF－道路遺構、SI－竪穴建物・竪穴住居、SK－土坑、SP・P－ピット・柱穴を示す。
7. 調査にあたり、筑後国府跡発掘調査指導員会の各位にご指導・ご助言を頂いた。
渡辺正氣（元九州考古学会会長）・小田富士雄（福岡大学名誉教授）・西谷 正（九州大学名誉教授）
佐田 茂（佐賀大学）・霧久嗣郎（久留米市文化財専門委員）・長 洋一（前西南学院大学）
田中正日子（第一経済大学）・坂上康俊（九州大学）・新原正典（福岡県教育庁）
高橋 章（九州歴史資料館）・岸本 圭（福岡県北筑後教育事務所）
この他、調査・報告に際して下記の方々には多くのご指導を頂いた。（敬称略、五十音順）
上村英士（筑後市教育員会）、大橋泰夫（財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター）、
小鹿野 亮（筑紫野市教育委員会）、小林勇作（筑後市教育委員会）、山村信榮（太宰府市教育委員会）
8. 本書に収録した遺物及び調査に関わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されており、活用される予定である。
9. 遺構番号については、平成8年度以降は調査回数ごとに付している。それ以前の調査については従来の通し番号を使用する。また、隣接する調査地点などで過去の調査成果から同一の遺構と考えられるものについては、過去の調査回数に遺構番号を付す。
（例）第199次調査SB1→199SB1
10. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存または復元値を示す。
色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。
登録番号は、久留米市教育委員会文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
（例）200401 00001
 調査番号 遺物番号
陶磁器の分類は太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集2000年に拠った。
11. 本書の文責は、本文目次と文末に記した。全体の編集は神保が担当した。

本 文 目 次

筑後国府跡（略称TKH）

I. 調査の概要	（神保） 1
II. 位置と環境	（神保） 3
III. 第188次調査（調査番号：200301）	（神保） 5
IV. 第192次調査（調査番号：200316）	（水原） 33
V. 第194次調査（調査番号：200321）	（水原） 48
VI. 第195次調査（調査番号：200404）	（水原） 51
VII. 第196次調査（調査番号：200402）	（小澤） 56
VIII. 第197次調査（調査番号：200408）	（神保） 57
IX. 第199次調査（調査番号：200414）	（神保） 58
X. 第200次調査（調査番号：200419）	（熊代） 59

筑後国分寺跡（略称TKB）

XI. 第42次調査（調査番号：200403）	（水原） 61
XII. 第43次調査（調査番号：200411）	（水原） 71
報告書抄録	73

挿 図 目 次

《筑後国府跡》

第1図 筑後国府跡発掘調査地域図（1／5,000）	折込
第2図 第188次調査風景（北西から）	1
第3図 第192次調査風景（南西から）	2
第4図 第199次調査説明会風景（東から）	2
第5図 筑後国府跡発掘調査指導員会風景	2
第6図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）	3
第7図 筑後国府跡の広がる合川町（南上空から）	4
III. 第188次調査	
第8図 調査区全景（東から）	5
第9図 現地説明会風景（北東から）	5
第10図 第188次調査遺構配置図（1/200）・模式図（1/300）	6
第11図 第188次調査区全景（南上空から）	7
第12図 調査区西壁土層断面図（1/40）	8
第13図 調査区中央部トレンチ西壁土層断面図（1/20）	9
第14図 調査区西壁土層堆積状況（南東から）	10
第15図 調査区中央部トレンチ西壁土層堆積状況（南東から）	10
第16図 トレンチ西壁北端部土層堆積状況（東から）	10
第17図 帯状硬化面と「波板状痕跡」全景（西から）	11
第18図 帯状硬化面と「波板状痕跡」断面①（北から）	11
第19図 帯状硬化面と「波板状痕跡」断面②（北から）	11
第20図 帯状硬化面と「波板状痕跡」平面・断面図（1/20・1/80）	12
第21図 「波板状痕跡」①（西から）	12
第22図 「波板状痕跡」②（南から）	13
第23図 刺突状痕跡断面図（1/20）	13
第24図 刺突状痕跡断面状況①（北から）	13
第25図 刺突状痕跡断面状況②（西から）	13
第26図 路側帯施工単位模式図（1/100）	14
第27図 路側帯下部全景（東から）	14
第28図 路側帯南端下部（東から）	14
第29図 礎敷き遺構全景（北東から）	15
第30図 礎敷き遺構東端付近（東から）	15
第31図 第188次調査出土遺物実測図①（1/4）	16
第32図 第188次調査出土遺物実測図②（1/4）	17
第33図 第188次調査出土遺物実測図③（1/4）	18
第34図 第188次調査出土遺物実測図④（1/4）	19
第35図 第188次調査出土遺物（写真①）	20
第36図 第188次調査出土遺物（写真②）	21
第37図 第188次調査出土遺物（写真③）	22
第38図 第188次調査出土遺物（写真④）	23
第39図 第188次調査出土遺物（写真⑤）	24
第40図 第188次調査地周辺の主要遺構（1/1,000）	30
第41図 朝妻・ヘボノ木地区道路遺構配置図（1/2,000）	32
IV. 第192次調査	
第42図 第192次調査区全景（西から）	33
第43図 第192次調査遺構配置図（1/100）	34

第44図 北・中央調査区全景（東から）……………35

第45図 南調査区全景（東から）……………35

第46図 調査風景（南から）……………35

第47図 S I 1（東から）……………36

第48図 S B 10（北東から）……………36

第49図 北調査区165 S F 23路面状況（北西から） ……36

第50図 中央調査区165 S F 23基礎状況（南東から） ……36

第51図 165 S F 23、S D 4・5 土層断面図（1/40） ……37

第52図 S D 6・7 全景（北東から） ……37

第53図 S D 6・7 土層図（1/40） ……38

第54図 S B 11、S D 8、S K 12（東から） ……38

第55図 S K 2 全景（南東から）……………38

第56図 S K 2・12実測図（1/40） ……38

第57図 S K 33～50全景（北から）……………39

第58図 第192次調査出土遺物実測図①（1/4） ……41

第59図 第192次調査出土遺物実測図②（1/4） ……42

第60図 第192次調査出土遺物（写真①） ……42

第61図 第192次調査出土遺物（写真②） ……43

第62図 第192次調査出土遺物（写真③） ……44

第63図 第192次調査出土遺物（写真④） ……45

第64図 165 S F 23と旧湧水点方面を望む（北東から） ……47

V. 第194次調査

第65図 調査区設定状況（北から）……………48

第66図 第194次調査区全景（南東から） ……48

第67図 第194次調査遺構配置図（1/100）……………49

第68図 S I 3 全景（東から）……………49

《筑後国分寺跡》

XI. 第42次調査

第90図 筑後国分寺跡発掘調査区位置図（1/2,500） ……61

第91図 第42次調査遺構配置図（1/100） ……62

第92図 北トレンチ全景（東から） ……63

第93図 南トレンチ全景（南西から） ……63

第94図 調査風景（南西から） ……63

第95図 S D 1 遺物出土状況（北から） ……63

第96図 S K 2・3 土層堆積状況図（1/40） ……64

第97図 S K 2 完掘状況（南東から） ……64

第98図 S K 2・3 土層断面状況（南西から） ……64

第99図 S K 3 底面遺物出土状況（南西から） ……64

表 目 次

第 1 表 第188次調査出土遺物観察表① ……25

第 2 表 第188次調査出土遺物観察表② ……26

第 3 表 第188次調査出土遺物観察表③ ……27

第 4 表 第188次調査出土遺物観察表④ ……28

表紙写真

（表）筑後国府跡・国司館地区（東上空から―第199次調査）

（裏）左上…筑後国府跡第188次全景（西上空から）左下… 第188次路側帯全景（東から）右上…礫敷き面（西から）右下…礫敷き遺構全景（東から）

第69図 S D 1、S K 4 全景（西から）……………50

VI. 第195次調査

第70図 調査風景（南西から）……………51

第71図 S D 1 土層断面図（1/40） ……51

第72図 第195次調査遺構配置図（1/100） ……52

第73図 第195次調査区全景（北東から） ……53

第74図 第195次調査区全景（南西から） ……53

第75図 S D 1 土層断面状況（北東から）……………54

第76図 S D 1 全景（北西から）……………54

第77図 S K 2・3 実測図（1/40） ……54

第78図 S K 2（北東から）……………54

第79図 S K 3（北東から）……………54

第80図 第195次調査S D 1 出土遺物実測図（1/4） ……55

第81図 第195次調査S D 1 出土遺物（写真） ……55

VII. 第196次調査

第82図 調査区全景（北上空から）……………56

第83図 S I 1 掘り下げ風景（南から）……………56

VIII. 第197次調査

第84図 第197次調査区全景（南東から） ……57

第85図 第197次調査測量図（1/250）……………57

IX. 第199次調査

第86図 第199次調査西区全景（南上空から） ……58

第87図 S B 1 全景（東上空から）……………58

X. 第200次調査

第88図 第200次調査区全景（北西から） ……59

第89図 S K 3 全景（西から）……………59

第100図 S K 6 完掘状況（西から） ……65

第101図 第42次調査出土遺物実測図①（1/4） ……66

第102図 第42次調査出土遺物実測図②（1/4） ……67

第103図 第42次調査出土遺物（写真①） ……67

第104図 第42次調査出土遺物（写真②） ……68

第105図 従来の伽藍配置復元案 ……69

第106図 第18次調査出土文字瓦実測図（1/4） ……70

第107図 第18次調査文字瓦（写真） ……70

XII. 第43次調査

第108図 調査風景（北から）……………71

第109図 第43次調査遺構配置図（1/100） ……72

第110図 第43次調査区全景（北から） ……72

第 5 表 第188次調査出土遺物観察表⑤ ……29

第 6 表 第192次調査出土遺物観察表① ……45

第 7 表 第192次調査出土遺物観察表② ……46

跡府國後筑

—第188次調査—

—第192次調査—

—第194次調査—

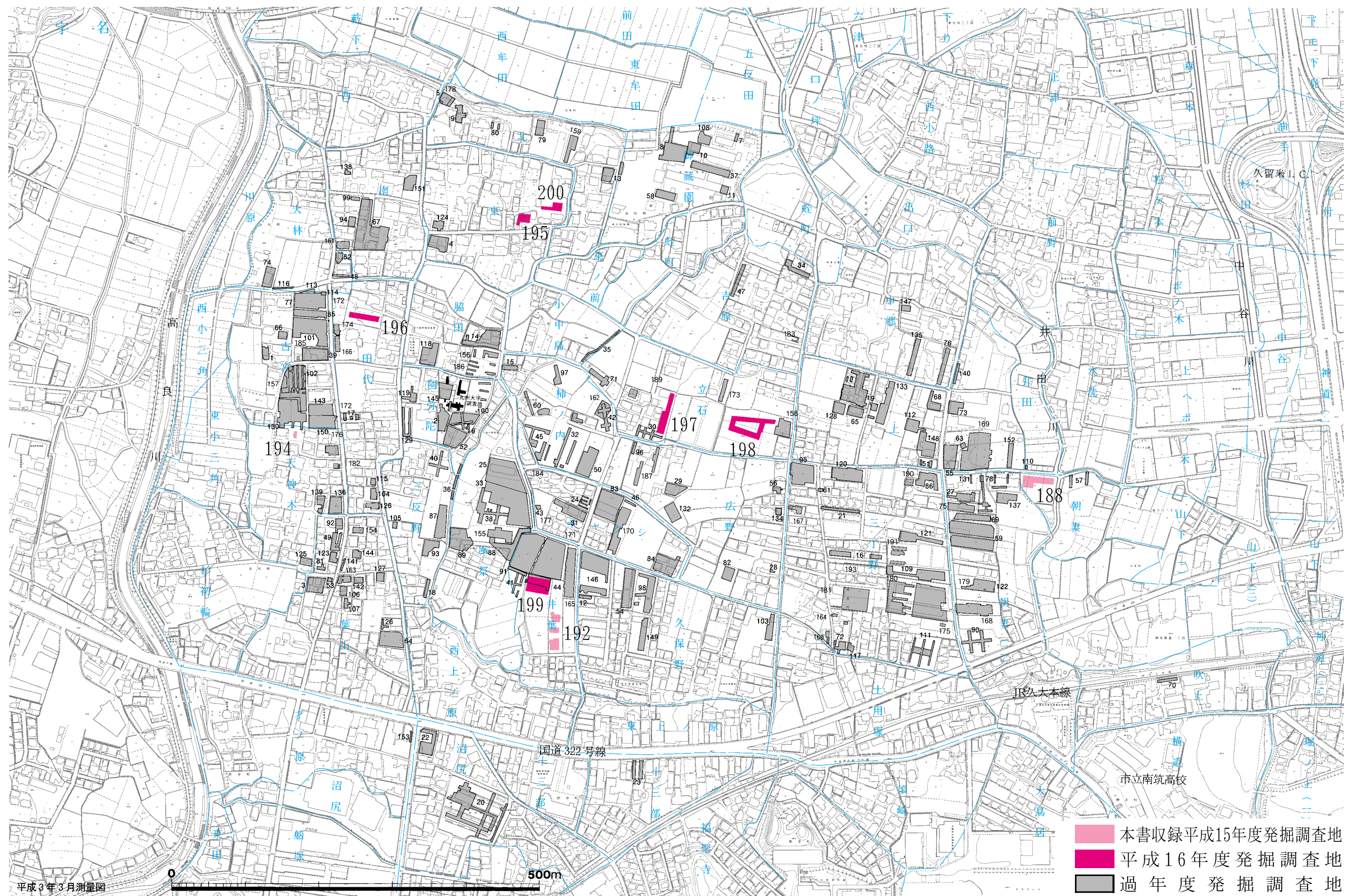
—第195次調査—

—第196次調査—

—第197次調査—

—第199次調査—

—第200次調査—



第1図 筑後国府跡発掘調査地域図(1/5,000)

I. 調査の概要

a. 調査の体制

平成16年度国庫補助事業の筑後国府跡・国分寺跡の調査に係わる調査体制は下記のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長：石川 集充	
調査総括：教育文化部	部 長：石原 廣士	次 長：久保田 明
文化財保護課	課 長：関 知彦	課長補佐：堤 諭吉
	主 査：立石 雅文	
	事務主査：松村 一良	庶務担当：権藤 節子
事前審査・調整担当	事務主査：大石 昇	近澤 康治
	調査担当：水原 道範	神保 公久
	小澤 太郎	熊代 昌之
	整理担当：香椎 佳子	畠中 和子 米澤美詠子

発掘調査臨時職員（15年度も含む）

穴見由理香・井手輝子・稲生健・今村美津子・江崎由美子・大坪進・岡富士子・鬼塚成利・香月清子・香月麻希・梶島ミドリ・川浪シゲ子・久保重子・小林美佐代・財木美智子・佐伯孝子・志鶴文則・島宏治・高尾春代・高橋有嘉子・田代俊子・田中樹子・田中レイコ・堤一紘・堤淳子・出口みどり・中野悦子・檜原初美・西田美恵子・半田純香・廣木誠・深山智富美・藤木幸子・丸山幸・森田スエノ・森山美千代・柳鈴子・山田治代・行武ツトミ・良永美佐子・良永洋子・吉村智子・渡辺しげ子・渡邊やつ子

発掘調査整理臨時職員

江口里織・長山和子・原田志保・丸山裕見子・森山知英子

b. 筑後国府跡の調査概要

平成16年度に行った筑後国府跡の発掘調査は、補助事業6件（本調査2件・確認調査4件）、民間受託1件、市事業1件の合計8件について実施した。以下、平成16年度に調査を実施した6地点の概要と、平成15年度に実施し、今回本報告となる第188次・192次・194次についての概要を述べる。

第188次調査は、筑後国府内を東西に走る推定古代西海道の東端部分を調査した。古代西海道は、九州を統括する大宰府から南下し、筑後川を渡河した後、筑後国府跡の東に位置するへボノ木遺跡に至る。へボノ木遺跡の南西部で西へ向きを変えた西海道は、その後、「朝妻の清水」に端を発する井田川を渡河し筑後国府へ至るが、本調査区はその渡河地点にあたる。調査では、西海道と考えられる道路状遺構やその南へ広がる礫敷き遺構を確認した。この礫敷き遺構には溝や高まりなどを意図的に創出した部分があり、井田川から引き込んだ水で周囲を浸すなどして、筑後国府の表玄関として荘厳な視的効果をねらっ



第2図 第188次調査風景（北西から）

た可能性も考えられる。

第192次調査は、共同住宅建設に伴う事前調査で、推定国司館の南区画から南方約50m部分で調査を実施した。調査では、国司館東築地に平行する南北道路の延長部分や、国司館の更に南に区画の広がりを見込ませる南北溝を検出した。

第194次調査は、筑後国府Ⅰ期政庁の南面築地南隣接地で行われ、前身官衙期と思われる掘立柱建物やⅠ期政庁の南築地外溝と思われる東西溝を検出している。

第195次調査は、筑後国府域の北西端部分で行われた専用住宅建設に先立つ事前調査である。調査では、古代の遺構はほとんど確認できず、近世の溝やピットを検出した。遺構は極めて少なく、いずれも残りが悪い。

第196次調査は、筑後国府Ⅰ期政庁の約50m東部分で行った確認調査である。調査では、弥生時代終末期の竪穴建物を9軒検出した。古代の遺構は希薄で、調査区南西部で検出した南北溝にその可能性がある。

第197次調査は、国司館地区の北東約100mに残存する通称「長者の藪」と呼ばれる立石地区の土塁痕跡の現況測量調査を市単費事業として行ったものである。

第198次調査は、宅地分譲・共同住宅建設に先立つ、民間受託事業として行ったものである。調査では、8世紀～14世紀代の遺構を検出し、竪穴建物や掘立柱建物、土坑・溝・土壇墓など多様な遺構を検出している（久文報第206集参照）。

第199次調査は、国史跡に指定されている国司館地区の南隣接地において実施した、重要遺跡確認調査である。調査では、国司館の南限溝と国司館への出入り口、出入り口前面では四面庇建物を検出した。従来推定してきた国司館域が更に南へ広がる可能性が出てきた。

第200次調査は、共同住宅建設に先立つ確認調査で、主に中・近世の遺構を検出した。



第3図 第192次調査風景（南西から）



第4図 第199次調査説明会風景（東から）

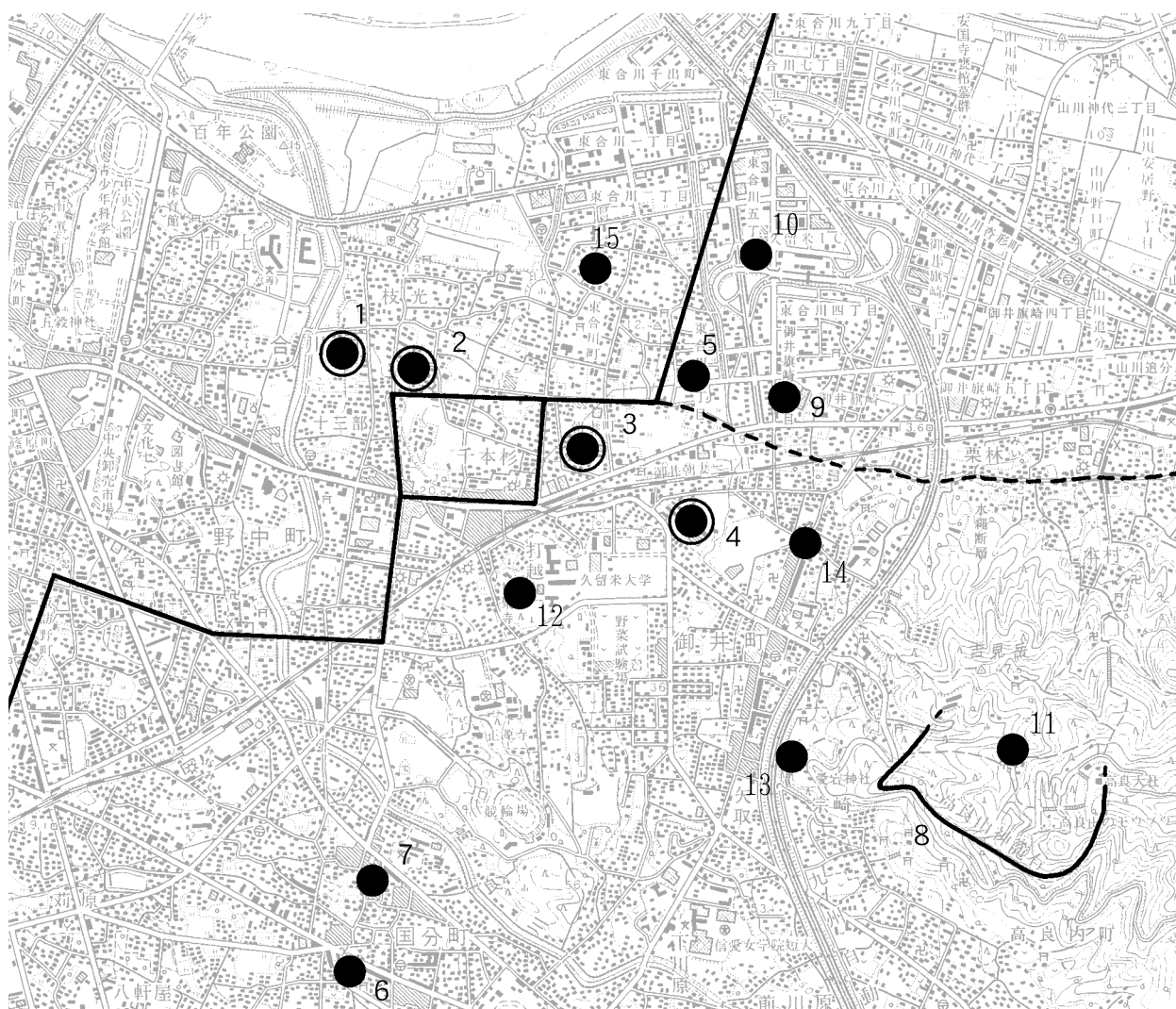


第5図 筑後国府跡発掘調査指導員会風景

Ⅱ．位置と環境

立地と自然環境

筑後国府跡は、久留米市街地の東方約1.6km付近の東西1km・南北0.7km程度の範囲に展開し、筑後平野南端に連なる耳納連山西端に聳える高良山から北西に派生する低位段丘に立地する。久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑後平野の中央部分に発達し、九州における交通の要衝に位置する。筑紫平野には阿蘇外輪山に源を発した筑後川が流れ、有明海に注ぐ。筑後国府跡から筑後川までの距離は現在0.6km程度である。遺跡の立地する台地の南端には、水縄断層系追分断層が東西に伸びており、この活断層によって形成された断層崖下には湧水がいくつも見られる。これらの湧水は小河川となり、遺跡の立地する台地を東・中央・西の3つに分割している。遺跡の立地する台地の西側は高良山南麓に源を発した高良川が、東側には中谷川が流れ、国府域の四至を画する。



第6図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. 筑後国府Ⅰ期政庁 2. 筑後国府Ⅱ期政庁 3. 筑後国府Ⅲ期政庁 4. 筑後国府Ⅳ期政庁
 5. ヘボノ木遺跡 6. 筑後国分僧寺跡 7. 筑後国分尼寺跡 8. 高良山神籠石 9. 神道遺跡
 10. 下見遺跡 11. 高隆寺跡 12. 福聚寺古墳群 13. 祇園山古墳 14. 二本木遺跡 15. 西小路遺跡

筑後国府の概要

東アジアの社会情勢が不安定だった7世紀中頃、枝光台地西端の古宮・南地区を中心に大溝や土塁・河川等によって防御された軍事的色彩の強い「前身官衙」が営まれる。引き続き筑後国が成立した7世紀末から8世紀中頃にかけて、古宮地区には築地塀で囲繞された正殿・前殿・脇殿などからなる政庁的な官衙が営まれる（Ⅰ期国庁）。その後、九州において律令体制が安定した8世紀中頃、古宮地区から東へ約200mの阿弥陀地区に、築地塀で囲繞され9世紀前半には礎石建物が造営される南北75m、東西67.5mの国庁が営まれる（Ⅱ期国庁）。このⅡ期国庁内部は不明瞭な点が多いが、西脇殿や国庁南前面の朝集殿的な建物群、国庁を囲繞する築地塀、大量の古瓦などが検出されている。この時期、国庁に付属する官衙群は枝光台地一帯に広がり、各官衙はそれぞれの単位毎に計画方位をもって造営されている。Ⅱ期国庁の南東約200mには、浅い谷を挟んで国司館跡も確認されている。Ⅱ期国庁は10世紀前半に火災により焼失し、再び移転する。Ⅱ期国庁から東へ約600mの朝妻地区に、幅約4mの大溝で区画された1辺約140mの区画が営まれ、内部からは大規模な掘立柱建物が検出されている（Ⅲ期国庁）。付属する官衙群も併せて移動したと見られ、国庁の東側に多数の官衙群が確認されている。更に11世紀末には南東約400mへ再び移転し（Ⅳ期国庁）、『高良記』に見える「今ノ符」と思われるこの国庁は、12世紀後半頃まで存続していたようである。『筑後国検交替使実録帳』には、大治5（1130）年～仁治2（1241）年までの国府院や駅館の荒廃した様子が描かれ、更に南北朝争乱期には南朝方の懷良親王が筑後国府に陣を置いた記事があり、実質的な機能は別として、筑後国衙が15世紀まで何らかの形で存続していたものと推定される。13世紀以降の国衙関連遺跡は見つかっていないが、今後の調査で明らかになっていくものと思われる。（神保）



第7図 筑後国府跡が広がる合川町（南上空から）

Ⅲ. 第188次調査

1. 調査に至る経過

第188次調査は、久留米市朝妻町191-1、192-1において実施した、共同住宅建設に先立つ事前の遺構確認調査である。調査は、平成15年3月28日に地権者の■■■■氏より埋蔵文化財包蔵の事前審査依頼書が提出されたことに始まる。調査対象地は、筑後国府域を東西に走る古代西海道に隣接している。周辺で行われた第55・57・78・110・169次調査において、西海道のルートが想定されていたが、依頼地はそのルート上にあたっていた。筑後国府域は、依頼地の南約250mに位置する「朝妻の清水」に源を発する井田川を東限とするが、依頼地はこの井田川を渡河し、国府へ入る言わば玄関口にあたる。このような状況から、平成15年4月7日に遺構確認調査を行った。その結果、道路遺構に伴う硬化面が確認され、その遺構状況を把握する為にも発掘調査が必要である旨を地権者の■■■■氏に伝えた。その後の協議により、共同住宅建設地内の遺構確認調査を面的に行うことで合意し、調査の運びとなった。調査期間は平成15年4月17日から同年6月9日までである。



第8図 調査区全景（東から）

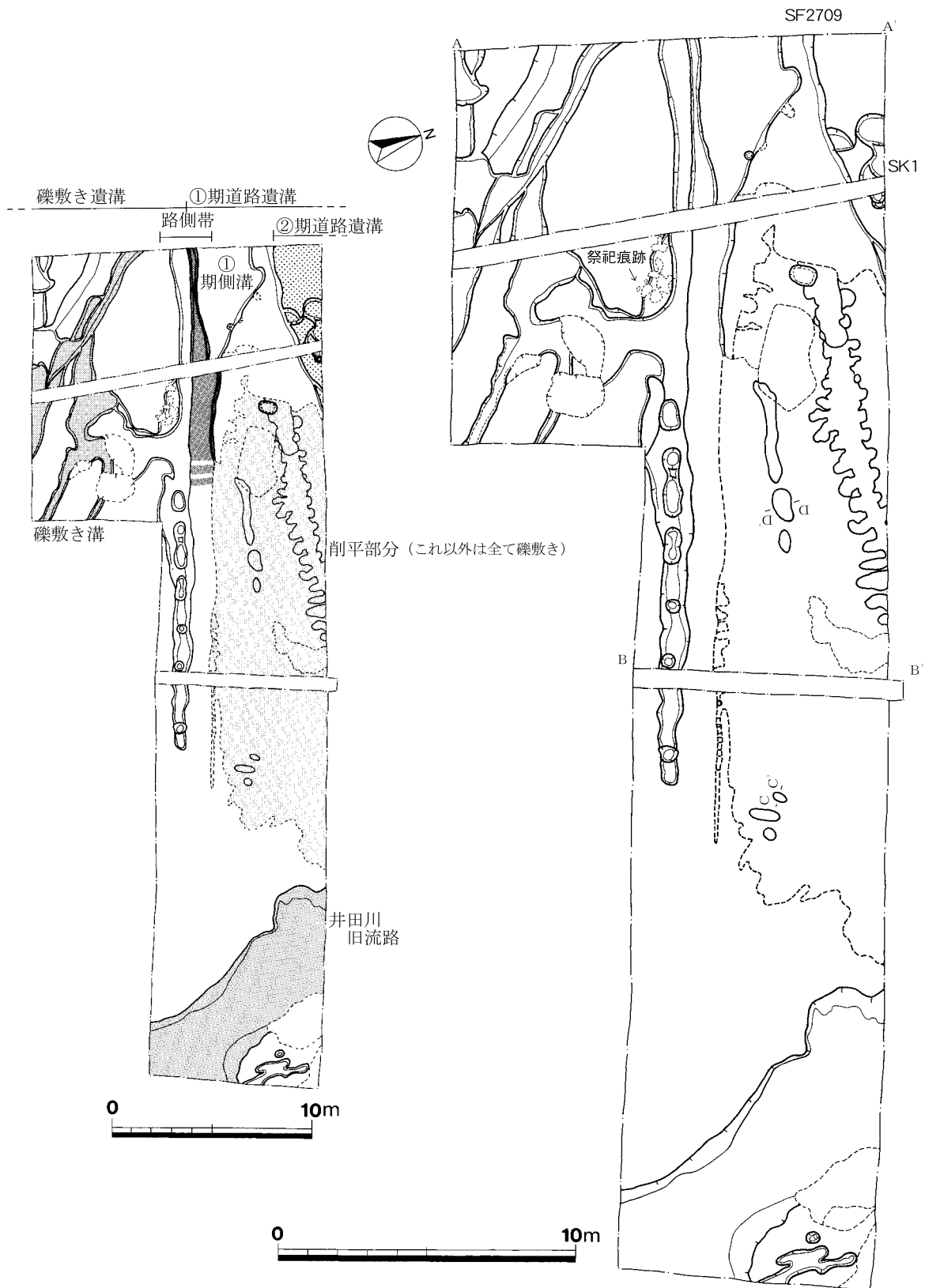
2. 調査の方法と経過

本調査は共同住宅建設に先立つ事前調査であるが、盛土により遺構の保存が図られる為、分譲地内における西海道の存在が推定できる個所を対象として遺構確認調査を実施した。当初は対象地の北西隅に東西約14.5m、南北約15mの調査区を設けた。調査の結果、西海道と思われる硬化面とその南へ広がる礫敷き面が良好に確認できた為、調査費用を市費に切り替え、調査区北壁に沿って東西28m、南北8mのトレンチを拡張した。最終的な調査面積は460㎡である。現地での調査は平成15年4月17日に重機により表土を掘削することから始め、機材を搬入、同17日に作業員により、西海道埋没後に人為的に整地された整地層の掘下げを開始した。整地層を除去すると、西海道を覆う黒色土が堆積しており、この黒色土を除去すると道路遺構の硬化面が検出される。調査はこの硬化面を検出していく作業を行い、写真撮影・個別遺構実測を行いながら、平板測量により遺構配置図作成（1/50）を行った。また、平成15年5月31日には市民を対象とした現地説明会を開催し、約90人の参加を得ることができた。

全ての作業が終了した後全体写真撮影を行い、平成15年6月9日に重機により埋め戻しを完了し、全ての作業を終了した。遺構写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7により撮影した。



第9図 現地説明会風景（北東から）



第10図 第188次調査遺構配置図 (1/200) ・ 模式図 (1/300)

3. 検出遺構と出土遺物

調査区の東隣りには井田川が北流している為、調査区内の地形は西から東側へ傾斜している。遺構検出軒の標高は、西部分で約11.30m、東側約11.00mである。調査地は耕作土・床土が約60cm、整地層が約30cm、黒色土が約10cm堆積し、その下面で硬化面や礫敷き面が検出される。黒色土と硬化面の間には砂層が存在する個所もあった。調査区西壁より11m付近からは、道路本体部分の硬化面は削平を受けており、調査区南壁沿いに礫敷きの硬化面が広がっている。調査区の東端付近には旧井田川の河道と思われる部分も検出されている。検出遺構は、道路遺構・礫敷き遺構・土坑・ピットなどであるが、大半が西海道と思われる道路遺構に付随するものであり、以下、遺構種別ごとに概要を述べるが、道路遺構では、各パーツについても報告する。出土遺物については章末の遺物観察表（第1～5表）を参照されたい。

道路遺構

S F 2 7 0 9（第11～16図）

調査区を東西に縦断する古代西海道と考えられる道路遺構である。道路遺構に伴って、砂粒や小礫・遺物類を伴う面的に広がる硬化面や、道路幅内で硬化面が道路遺構主軸に沿って帯状に確認される帯状硬化面、道路遺構主軸に直交する形で確認される「波板状痕跡」等と呼称される連続土坑状遺構、部分的な突き固めの痕跡と考えられる刺突状痕跡、S F 2709の南に広がる礫敷きの路側帯などを検出した。

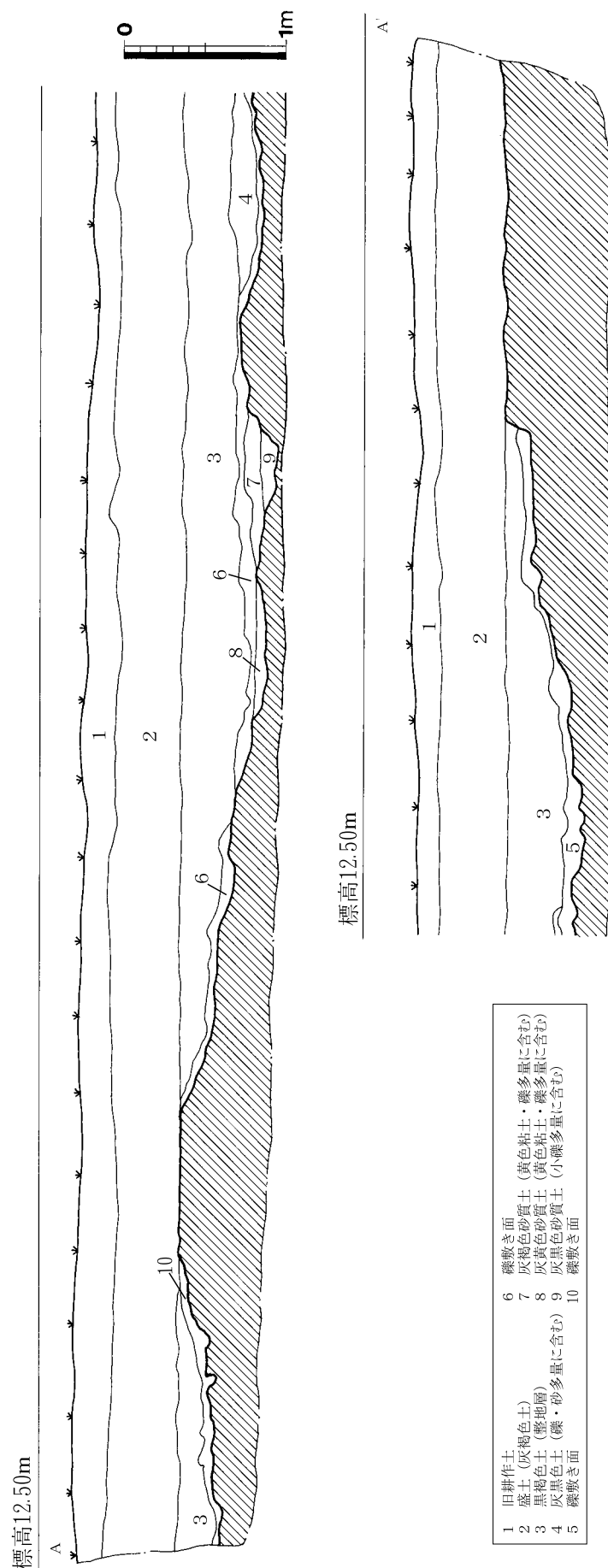
西海道と考えられるS F 2709は調査区内を東西に縦断する形で約43m検出されたが、北側は現道の下に伸びる為、道路幅は不明である。調査区の東側約20mで行われた第57次調査では、約14mの路面幅が推定



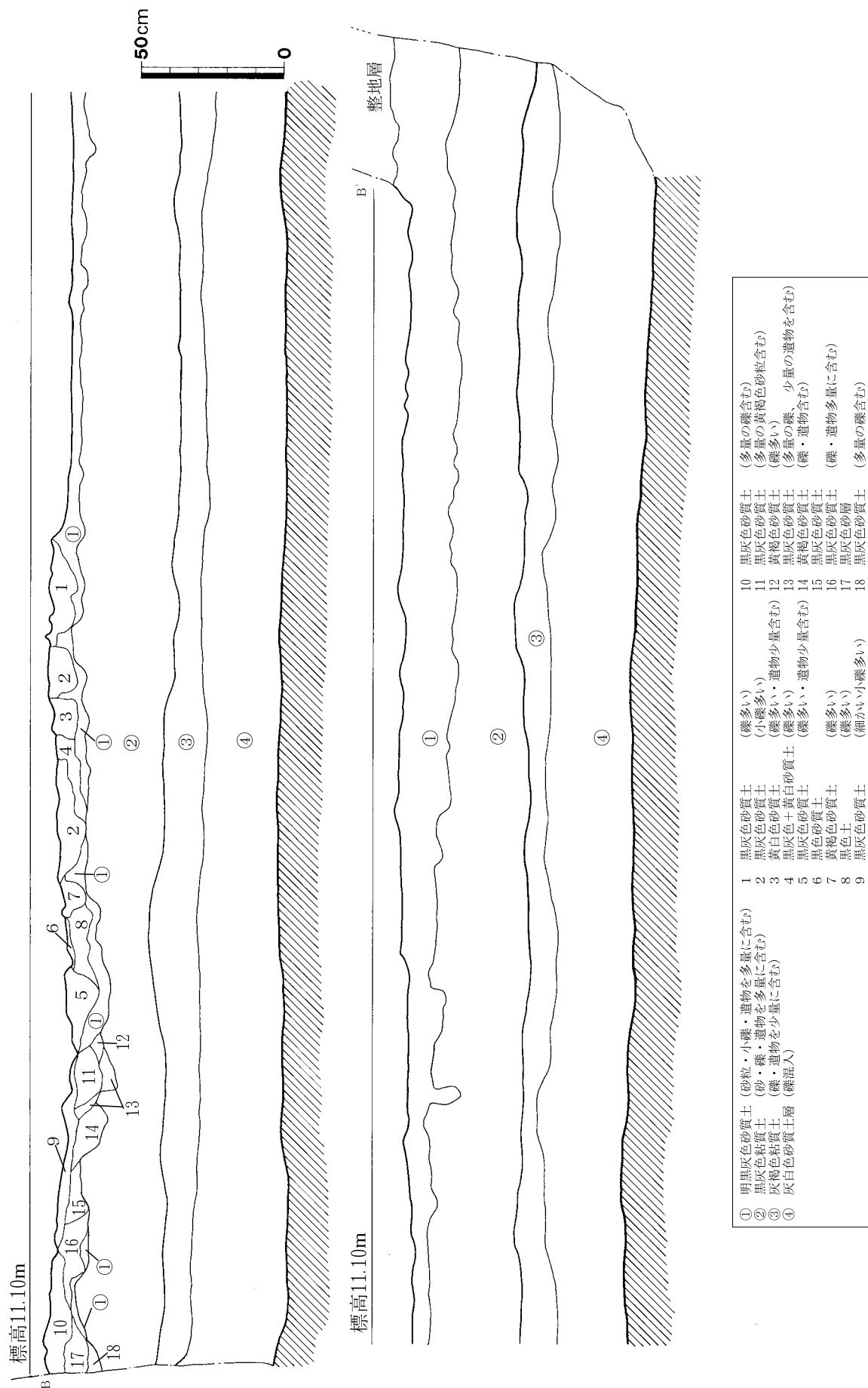
第11図 第188次調査区全景（南上空から）

されている。調査区西側隣接地で行われた第78・169次調査で検出された道路遺構は、道路部分の地山を切り通し状に約0.7～0.8m程度カットした上・下2面の路面が確認されている。本調査区でもS F 2709は大きく2時期が確認されている。②期の道路遺構は、調査区北西隅で確認されており、①期路面上に約20cmの盛土を施したものである。この盛土には大量の遺物や礫が混入していることから、後述する①期路面を削平し、路面幅を縮小して敷設したものと考えられる。施工時期は確定できなかった。

調査の中心は①期の道路遺構であるが、地山のより傾斜が強くなる西壁付近に設定したトレンチの断面観察の結果、地山を幅約9m・深さ0.4m程度をカットした切り通し状を呈している。カットした地山面は、小礫をバラス状に敷き詰めた硬化面が確認されており、その上層に黒色土・整地層が堆積している。しかし、西壁より約2m付近から東側は、逆に井田川によって開析された低地を盛土し、整地した後に道路を敷設している。詳細を観察する為に調査区中央付近に設定したトレンチの断面観察によると、青灰色砂質の地山の上に約30cmの灰白色砂質土層（④層）（礫混じり）が堆積し、その上層に灰褐色粘質土層（③層）が10～20cm程度堆積している。③層には遺物や礫が少量含まれ、道路敷設前の自然堆積土と判断される。その上層に20～30cmの黒灰色粘質土層（②層）が見られるが、遺物や砂・礫を含み、道路遺構の基礎を形成している。その上層は既に削平



第12図 調査区西壁土層断面図 (1/40)



第13図 調査区中央部トレンチ西壁土層断面図 (1/20)

を受けており、当初の厚みは不明であるが、5～20cm程度の明黒灰色砂質土層（①層）が確認できる。この①層は黄褐色砂粒や小礫・遺物を多く含み、礫敷きの硬化面や調査区中央部北壁沿いで検出した帯状硬化面、「波板状痕跡」と呼ばれる連続土坑列、「刺突状痕跡」は、この①層上面で確認されたことになる。しかし、①層は既に削平を受けていることから、それぞれの痕跡が①層上面に施工されていたものか、①層中位に施工されていたものかは判断できない。また、①層の上面には礫敷きの硬化面の他に、砂層の堆積が確認できる部分もあった。

①期道路遺構に伴う側溝は、南側溝のみ西壁から約10m付近まで確認できたが、明瞭な形では検出できていない。側溝と思われる部分は、地山を幅0.2～0.9m、深さ約0.1m程度掘り窪めた後、道路遺構上面と同じく礫敷き面となっている。これは、高所である西側から下ってきた道路遺構が、井田川付近の低所に差し掛かると、道路遺構が盛土により高められる為に明瞭な側溝を必要としなくなり、道路遺構の南に広がる礫敷きの路側帯や礫敷き遺構と同じく礫敷きとなったものと考えられる。調査区の東部分では、井田川の旧河道を確認しているが、その底面は路側帯の礫敷き面と0.1m程度しか変わらない。よって、古代より神聖視されてきた「朝妻の清水」から湧出した井田川の水は、調査区西側から流れてくる水と共に、路側帯や礫敷き遺構付近を浸すことも多かったものと思われる。後述する礫敷き遺構は、作為的に高ま



第14図 調査区西壁土層堆積状況（南東から）



第15図 調査区中央部トレンチ西壁土層堆積状況（南東から）



第16図 トレンチ西壁北端部土層堆積状況（東から）

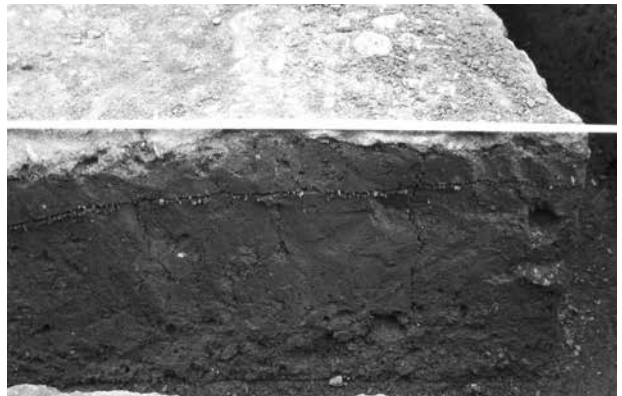
り部分と溝部分が創出されており、井田川の水で浸された山水的な空間を意識的に創出し、筑後国府の玄関口として、視覚的な荘厳性を意図した可能性も考えられる。

带状硬化面（第17～20図）

調査区の西側北壁沿いで検出した。全国各地の道路遺構の調査では、通常道路幅内で硬化面が道路遺構主軸に沿って带状に確認される。今回の調査でも、道路遺構の主軸と同一の東西方向に伸びており、中央部分が0.05～0.1m程度窪む。注目されるのは後述する「波板状痕跡」と呼ばれる連続土坑列と重複して確認された点である。この重複は「波板状痕跡」が確認された内の長さ約10m分で確認できるが、带状硬化面の埋土を除去してしまい、埋土での前後関係が不明となってしまった。しかし、埋土下部の硬化面については断面観察により重複関係が判明した（第20図）。断面観察によると、前述した道路遺構敷設の為に明黒灰色砂質土層が基部にあり、この上面に「波板状痕跡」が検出される。埋土は灰褐色砂質土で、多量の砂礫や土師器細片を含んでいる。「波板状痕跡」の上面には硬化した2～10cmの暗黒灰色の極めて精緻な粘質の強い砂質層が認められる。トレンチ西端の約1.2mについては、小礫や砂粒・土師器を多く含んだ非常に硬化した層が確認される。平面確認では、带状硬化面は直線的にならず、北へ緩やかにカーブするが、この曲線に沿って、「波板状痕跡」も配置されているように見受けられる。以上のことから、今回検出した带状硬化面と「波板状痕跡」は何らかの有機的な関係を有しているものと考えられる。また、带状硬化面の西端部分は、西側に広がる①期道路遺構の礫敷き硬化面と一体化し重複関係は容易に判別できなかったが、带状硬化面の延長部付近で、若干ではあるが礫敷き硬化面が窪んでいるように見受けられた。



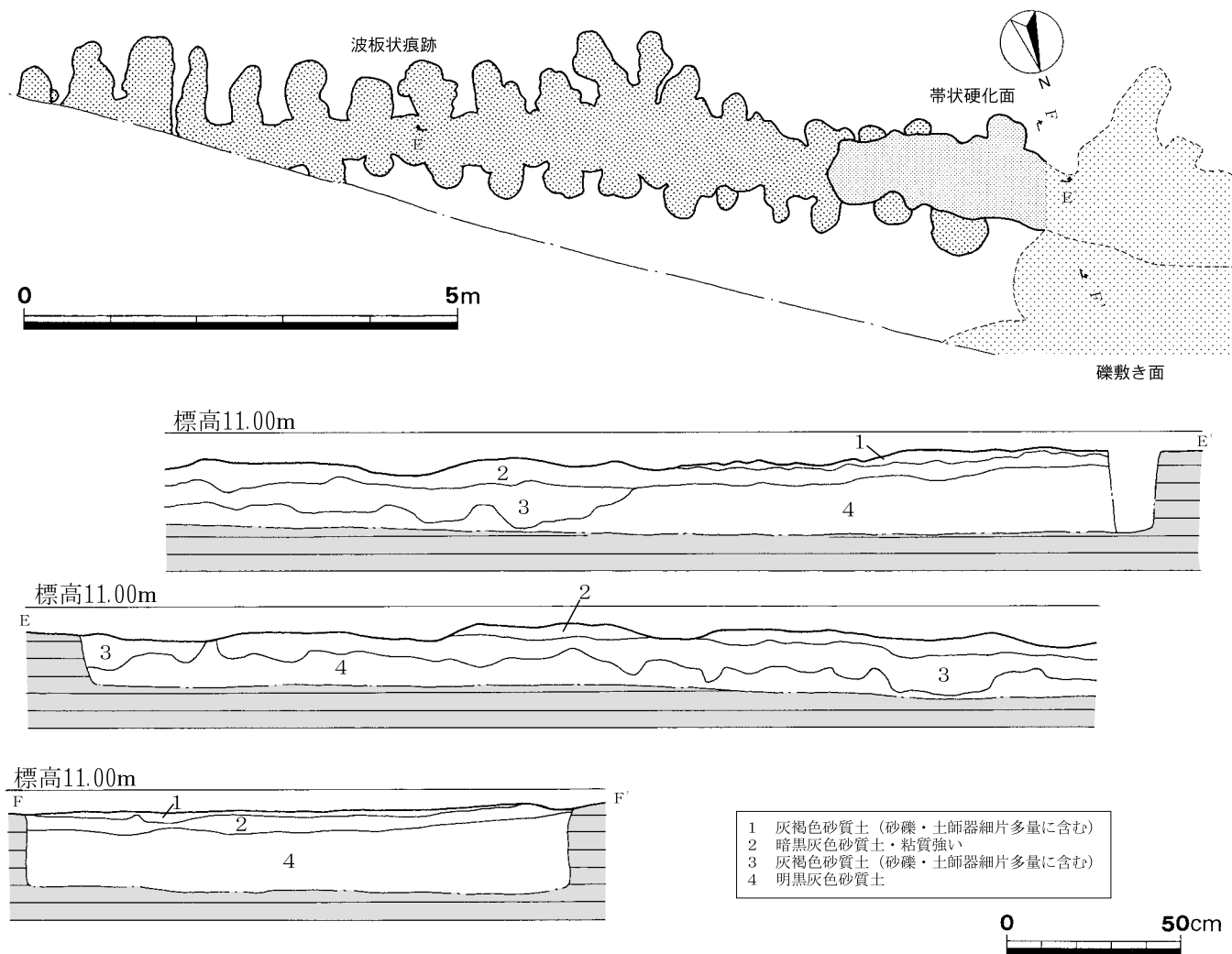
第17図 带状硬化面と「波板状痕跡」全景（西から）



第18図 带状硬化面と「波板状痕跡」断面①（北から）



第19図 带状硬化面と「波板状痕跡」断面②（北から）



第20図 帯状硬化面と「波板状痕跡」平面・断面図 (1/20・1/80)

「波板状痕跡」(第20～22図)

調査区北壁沿いで、先述した帯状硬化面と重複して検出した。通常、道路遺構主軸に直交する形で、長楕円形の土坑が連続して確認されるが、今回の調査でも、短軸幅0.25～0.65m、長軸長1.15～1.9m程度の長楕円形の土坑が検出された。帯状硬化面と重複する為、正確な数は確認できなかったが、19基程度が調査区内に存在するものと思われる。深さは3～10cmで、東から5基までの土坑の床面には多量の小礫や遺物が貼りついた状況を呈する。しかし、帯状硬化面との重複が顕著な西側部分では、このような状況は確認できなかった。また、土坑の埋土には硬化面は確認できていない。更に、「波板状痕跡」



第21図 「波板状痕跡」① (西から)

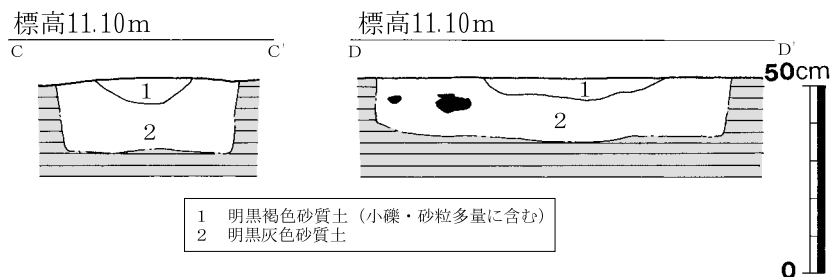
の東側延長部約に設定した前述の調査区中央部トレンチとの1.8mのあいだには、礫敷きの硬化面が確認されている。この硬化面は「波板状痕跡」よりレベルが上位に位置し、重複は確認できないが、視覚的には礫敷き硬化面の下層に「波板状痕跡」が存在するように見える。

刺突状痕跡（第23～25図）

調査区の中央部、前述した「波板状痕跡」の南側や調査区中央部トレンチの東側で検出した。道路遺構の路面幅内での検出と思われるが、路面は既に削平されている為、道路遺構を形成する明黒灰色土中のどのレベルに遺存していたものかは判断できない。

今回は5箇所確認したが、視覚的には判別が非常に難しく、本来は更に存在した可能性もある。形状は、0.3～0.5m程度の楕円形のものや、「波板状痕跡」のように長軸長が1.2m程度の長楕円形を呈するものも確認できる。前述した「波板状痕跡」

のように連続して検出されないことから、今回は刺突状痕跡として報告する。断面観察の結果、底面は掘り鉢状を呈し、埋土は小礫や砂粒を多量に含むやや明るい黒褐色砂質土で締めりがある。部分的な突き固めの痕跡と考えられる。



第23図 刺突状痕跡断面図（1/20）



第24図 刺突状痕跡断面状況①（北から）



第25図 刺突状痕跡断面状況②（西から）

路側帯（第26～28図）

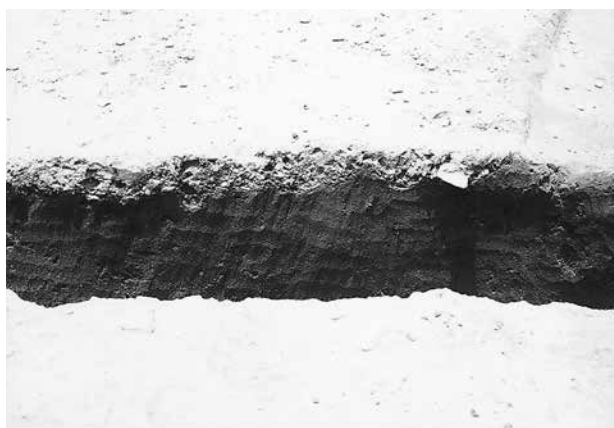
①期道路遺構の南側、調査区南壁沿いで検出した。道路遺構の南側には、調査区内全域にわたって礫敷き面が存在する。調査区西端のベルト付近南側は後述する礫敷き遺構として報告し、その東側の道路遺構南側の部分を路側帯として報告する。盛土により創出された①期道路遺構は、前述のように既に削平を受けており、路面等と路側帯との連続的な関係は不明である。しかし、調査区中央部に設けたトレンチの断面観察の結果、①期道路遺構と路側帯の築造過程をある程度復元できる。①期道路遺構は、井田川により

開析された低地を盛土整地することにより敷設されるが、調査地周辺には、黒灰色粘質土（②層）・明黒灰色砂質土（①層）が広がっているものと思われる。側溝に挟まれる間を路面と仮定するならば、路面下部には途切れることなく①層が5～20cm盛土整地される。路側帯部分にも①層は存在するが部分的であり、凹凸を成している。この上面には凹凸を充填するように、黒色系砂質土が確認できる。この黒色系砂質土は小礫が多く認められ、硬化した部分が存在している。更に地表面に近い部分には、小礫・砂を多量に含む土で充填して礫敷き面を作出し、路側帯を完成させている。調査指導をお願い



第26図 路側帯施工単位模式図 (1/100)

いた小鹿野氏の観察によると、路側帯部分は、幅0.3m程度の帯状の施工単位が認められ（第26図）、礫径・密度・土壌により判別可能であるということであった。氏は、この施工方法を現代のインターロッキング工法（礫敷き＝ブロック、黒色系砂質土＝砂、下層凹凸面＝地業）と類似する可能性を指摘されており、今後の更なる検証の必要性を説いている。^(註1) 以上のように、路面と路側帯の関係は掴むことができなかったが、道路遺構と路側帯の基礎部分の観察では同時期に築造された可能性が極めて高いと言えよう。



第27図 路側帯下部全景（東から）



第28図 路側帯南端下部（東から）

礫敷き遺構（第29・30図）

①期道路遺構の南側、調査区南西部で検出した。前述したように道路遺構の南側には、調査区内全域にわたって礫敷き面が存在するが、調査区西端のベルト付近南側を礫敷き遺構として報告する。前述した路側帯と同じく上面には礫敷き硬化面が広がるが、路側帯と異なり平坦でなく、意図的に高まり部分や溝を創出している。道路遺構との関係は断面観察等を行っていない為に不明であるが、上面観察では礫敷き面

が連続しており、路側帯と同じく道路遺構と同時施工の可能性が高い。礫敷き遺構の中央には、調査区西壁から幅0.45～0.6m、深さ約0.1mの溝が認められ、調査区西側のベルト付近から東側にかけて南北約3.0m、東西4.0m程度の淀みを形成する。この淀みから東側は二又に分かれ、北側が幅約0.3m、南側が幅約0.4mの溝となる。溝・淀み部分の底面は、水の地面への浸透を防ぐように小礫や砂粒、遺物の細片で形成されており、第122・168次調査で検出されている鏈水遺構を彷彿とさせる。溝の両岸は溝より約0.2m程度小高い高まり部分が存在する。この高まり部分の表面も小礫・砂粒によって硬化面が形成されており、調査区西壁のトレンチにおける断面観察の結果、地山を削り出し、表面に礫敷き面を形成していることが判明している。また、溝北側の高まり部分が東側に突出する場所には、火を焚いたと思われる個所があり、底部を穿孔した土師器など多くの遺物が集中していた。何らかの祭祀が行われた可能性も考えられる。礫敷き遺構の溝には、調査区西側から流れてくる雨水などが流れたものと思われるが、雨天時などには増水した井田川の水と共に、道路遺構より一段低い路側帯や礫敷き遺構付近を浸すことも多かったものと思われる。この時、作為的に高まり部分と溝部分が創出された礫敷き遺構付近には水で浸された山水的な空間が広がり、筑後国府へのエントランスとして、視覚的な効果を発揮したものと考えられる。

出土遺物

第188次調査では、道路遺構や礫敷き遺構、その上面を覆う黒色土、整地層から多くの遺物が出土し、パンコンテナー約30箱に及ぶ。出土遺物は土師器・須恵器を中心に、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・古瓦・鉄器・石製品など多様である。

整地層～その下に堆積する黒色土には多くの遺物が包含されており、黒色土層の堆積により、SF2709は廃絶したと考えることができる。上面の整地層には糸切り底の皿・小皿が主体となっている。調査地周辺でもこの整地層は確認されており、12世紀代に周辺では大規模な整地が行われたものと思われる。

一方、黒色土層出土の小皿を観察すると、糸切り底のものも見られるが、大半がへら切り底であり、概ね11世紀末～12世紀初頭の時期が考えられる。白磁の年代からも矛盾するものではない。

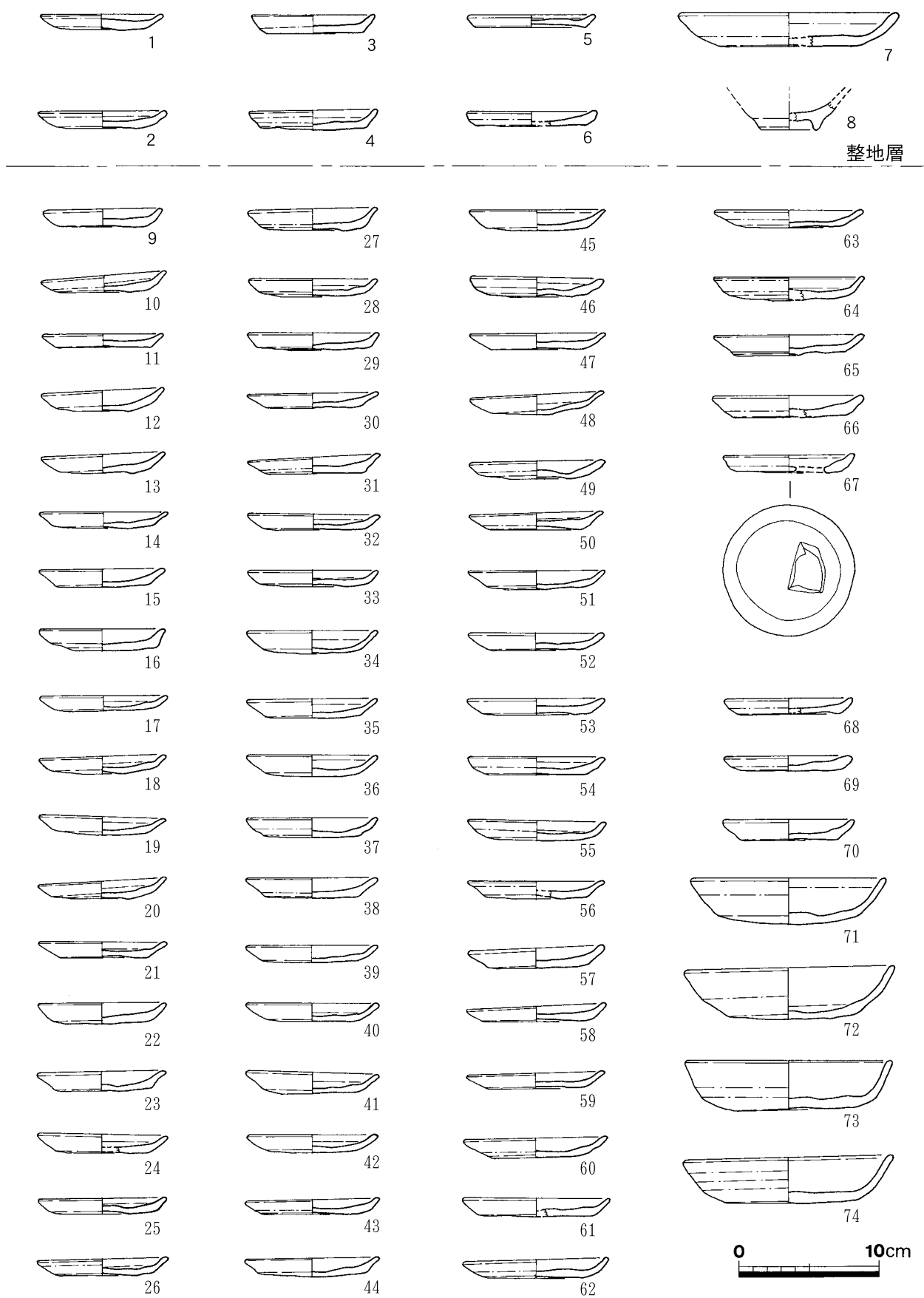
道路遺構の築造年代を示す遺構・遺物は検出していない。硬化面には小礫・砂粒と共に、多くの遺物がバラス状に使用されているが、その中には8世紀代の土師器・須恵器などの遺物が散見できた。古瓦にも正格子叩き瓦が使用されており、8世紀代まで築造年代が溯る可能性が考えられる。ここでは、個々の遺物についての説明は加えない為、詳細は第1～5表を参照されたい。



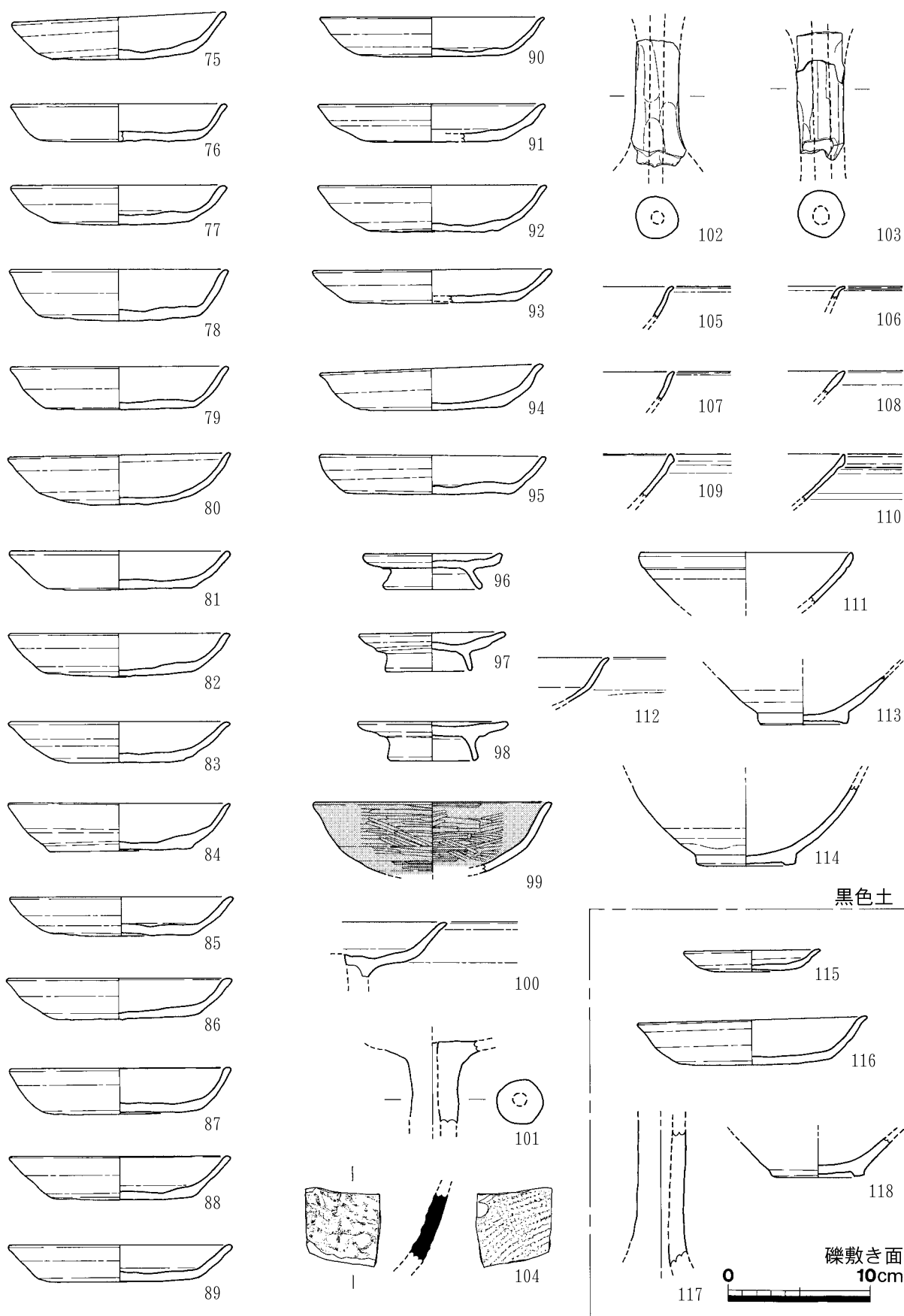
第29図 礫敷き遺構全景（北東から）



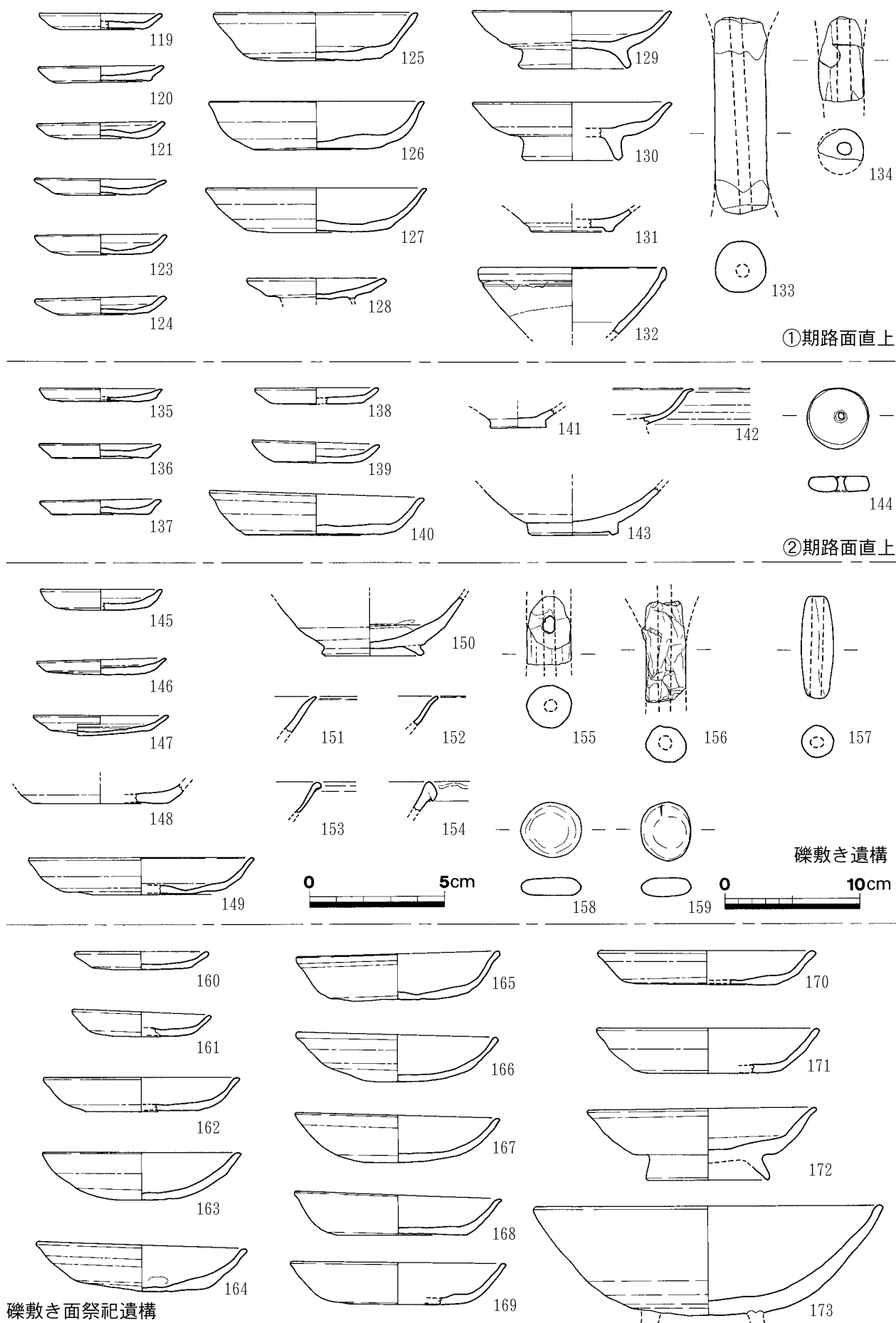
第30図 礫敷き遺構東端付近（東から）



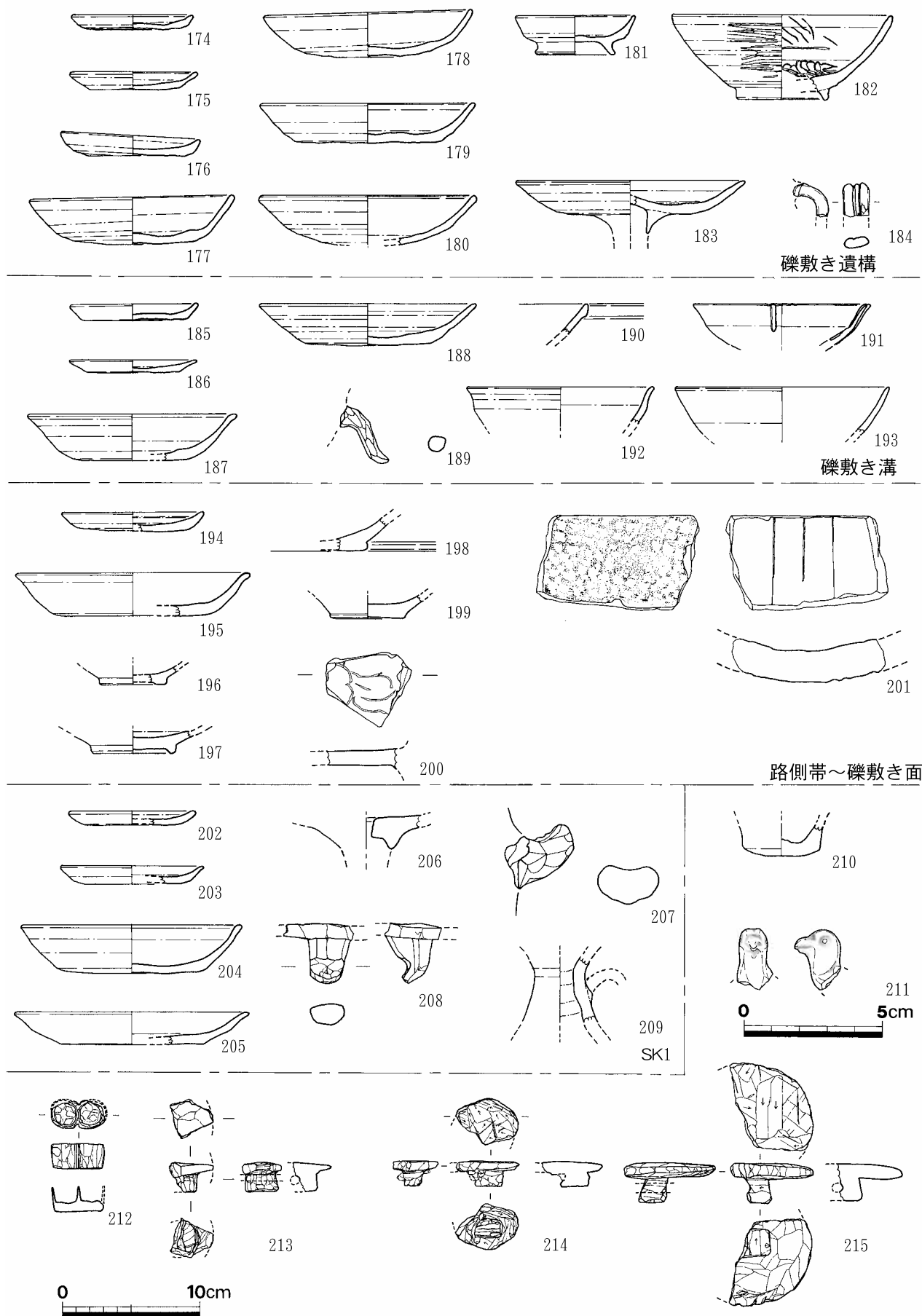
第31図 第188次調査出土遺物実測図① (1/4)



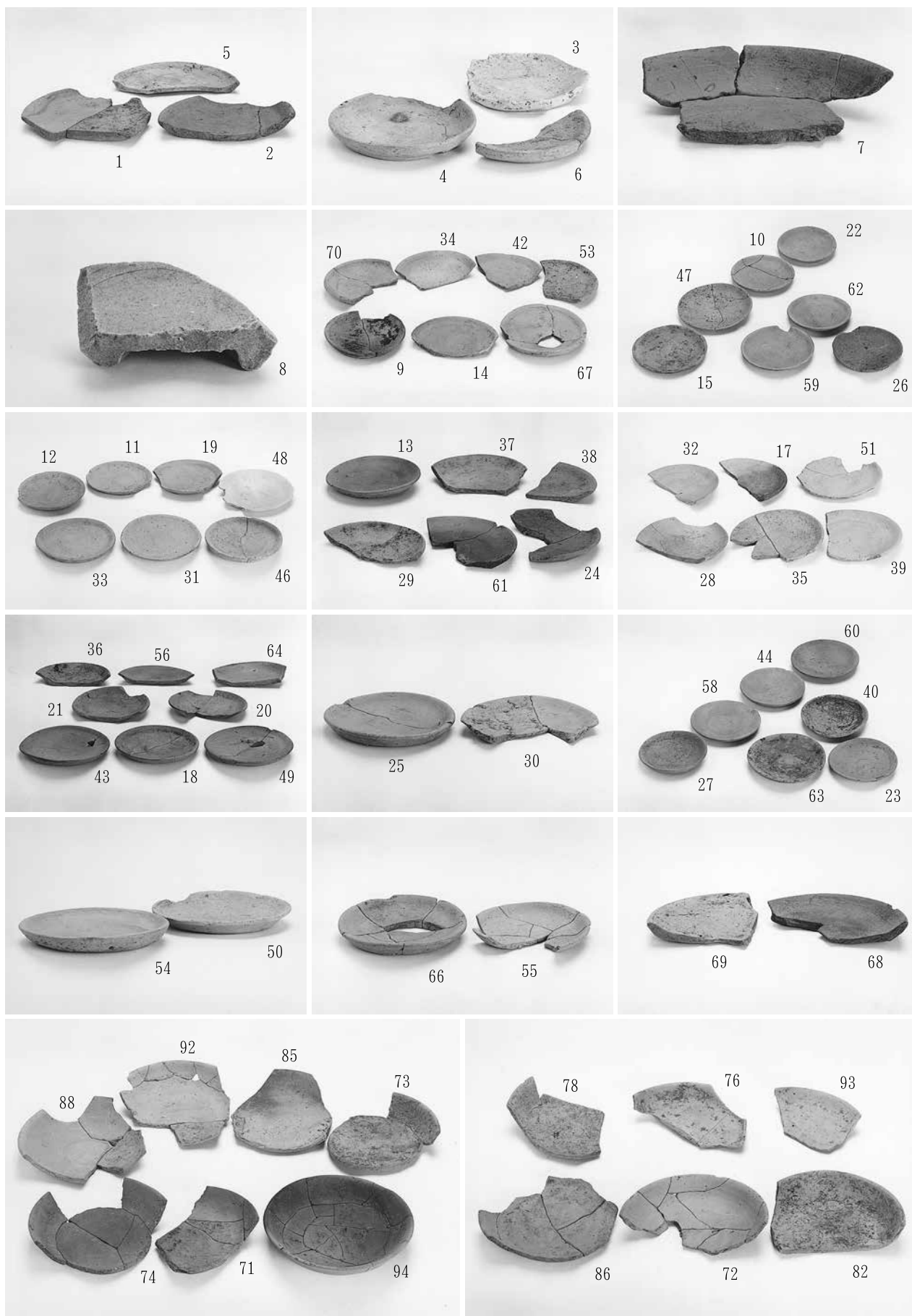
第32図 第188次調査出土遺物実測図② (1/4)



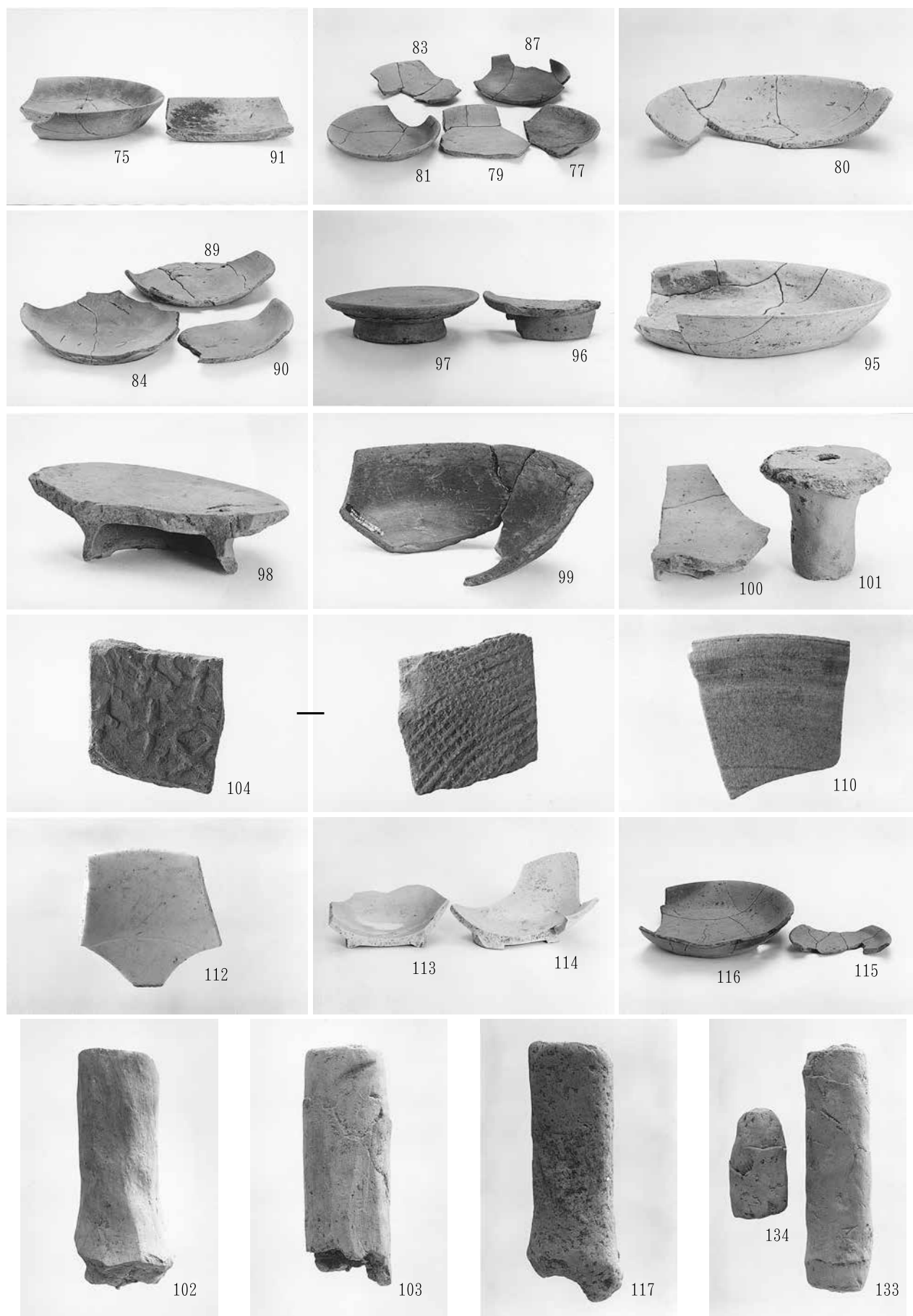
第33図 第188次調査出土遺物実測図③ (1/4)



第34図 第188次調査出土遺物実測図④ (1/4)



第35図 第188次調査出土遺物（写真①）



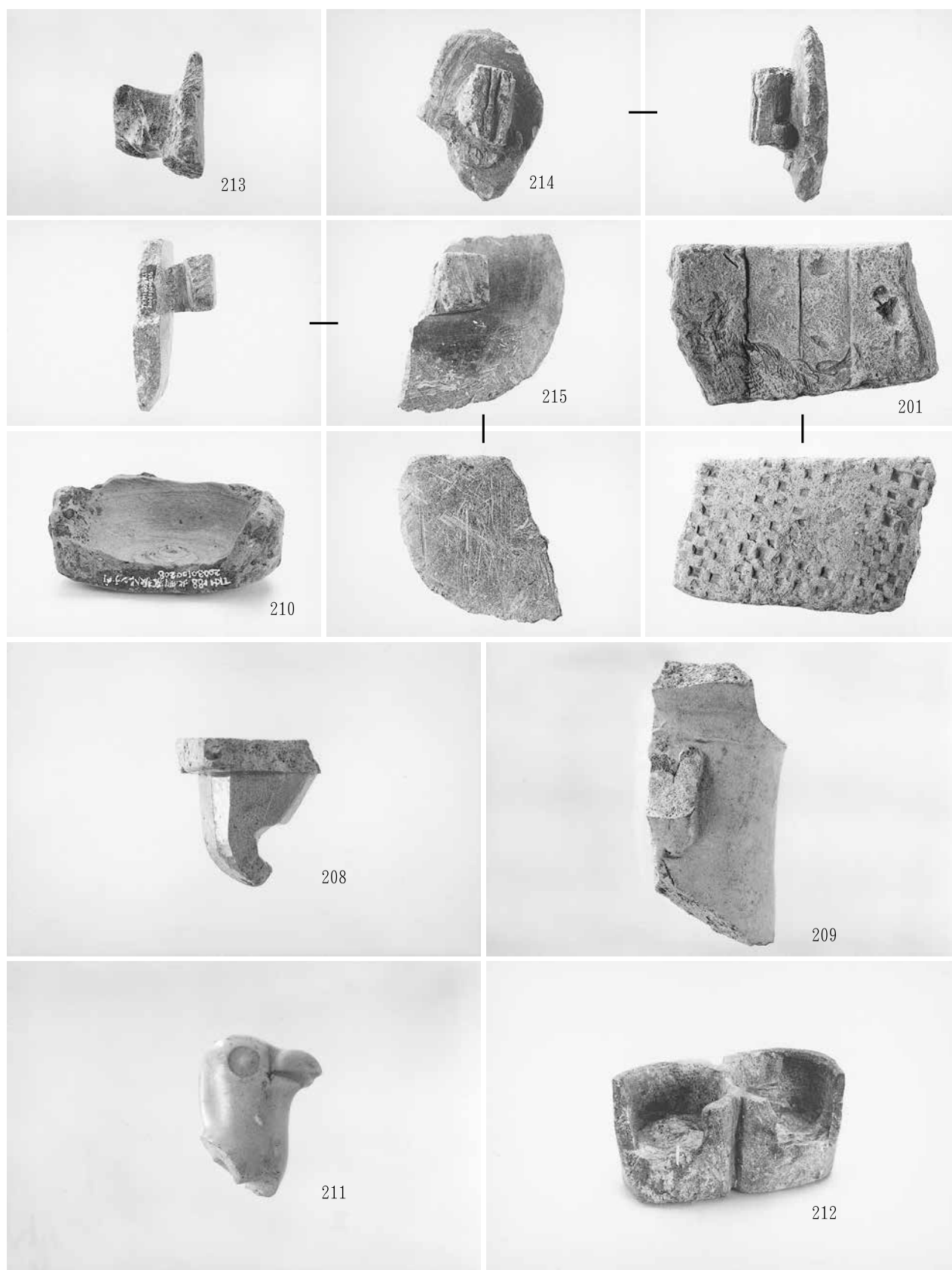
第36図 第188次調査出土遺物（写真②）



第37図 第188次調査出土遺物（写真③）



第38図 第188次調査出土遺物 (写真④)



第39図 第188次調査出土遺物（写真⑤）

第1表 第188次調査出土遺物観察表①

遺物No	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整 ・ 装 飾		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面 (凸面)	内 面 (凹面)			
1 第31図	整地層	土師器	小皿	(8.8)	6.6	1.15	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00005
2 第31図	整地層	土師器	小皿	(9.2)	(6.7)	1.25	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00007
3 第31図	整地層	土師器	小皿	(8.8)	6.9	1.35	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒 をわずかに含む		200301 00003
4 第31図	整地層	土師器	小皿	9.2	7.7	1.5	にぶい橙 浅黄橙	にぶい橙 浅黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む		200301 00002
5 第31図	整地層	土師器	小皿	(9.2)	(8.2)	0.9	にぶい黄橙 灰白	にぶい黄橙 灰白	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00006
6 第31図	整地層	土師器	小皿	(9.4)	(7.8)	1.1	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00004
7 第31図	整地層	土師器	皿	(15.8)	(10.3)	2.45	橙	橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00001
8 第31図	整地層	白磁	瓶	—	(4.2)	(2.0)	明オリブ 灰	灰白	施釉	回転ナデ	精良		200301 00008
9 第31図	黒色土層	土師器	小皿	8.5	6.4	1.4	灰黄褐 褐灰	灰黄褐 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00030
10 第31図	黒色土層	土師器	小皿	8.9	7.0	1.55	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00080
11 第31図	黒色土層	土師器	小皿	8.65	6.9	0.95	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00027
12 第31図	黒色土層	土師器	小皿	8.8	6.8	1.7	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00026
13 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.95	6.6	1.55	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00046
14 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.2)	7.0	1.15	にぶい橙 灰褐	にぶい褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00031
15 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.0	6.9	1.7	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00078
16 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.0	7.7	1.55	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00090
17 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.2	7.1	1.15	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00094
18 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.1	7.5	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00050
19 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.1	6.6	1.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00028
20 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.15	7.5	1.55	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00053
21 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.15	6.3	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00052
22 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.2	7.2	1.55	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00081
23 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.2	7.0	1.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00077
24 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.35	6.9	1.4	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00039
25 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.2	7.8	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒1～2mmの 砂粒をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00107
26 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.45	7.0	1.35	にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00084
27 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.25	7.2	1.65	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	2～3mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00071
28 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.5	7.7	1.35	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00091
29 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.4)	(8.4)	1.25	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00037
30 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.4	7.0	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00108
31 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.5	7.3	1.5	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00024
32 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.5	7.1	1.25	褐灰 にぶい黄橙	褐灰 にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00095
33 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.35	7.9	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00023
34 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.4)	(7.2)	1.65	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00034
35 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.4	7.0	1.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00092
36 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.4)	(6.6)	1.55	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00054
37 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.4)	(7.0)	1.45	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00047
38 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.4)	(6.6)	1.45	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む		200301 00048
39 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.45	6.8	1.25	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00093
40 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.55	6.7	1.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00076
41 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.6	6.8	1.65	灰黄 黄灰	灰黄 黄灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00087
42 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.4)	(6.8)	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00035
43 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.6	7.8	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00049

第2表 第188次調査出土遺物観察表②

遺物No	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整 ・ 装 飾		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面 (凸面)	内 面 (凹面)			
44 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.6	7.9	1.45	にぶい橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00073
45 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.7	7.4	1.55	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00089
46 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.6	8.8	1.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙 黄灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00025
47 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.7	6.8	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00079
48 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.6	6.5	1.7	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00029
49 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.8	8.8	1.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00051
50 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.65	7.0	1.35	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00015
51 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.8)	7.5	1.35	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00096
52 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.7	7.0	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	金雲母, 1mm以下の 砂粒をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00085
53 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.8)	(8.0)	1.15	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00036
54 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.8	7.5	1.35	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00014
55 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.9	7.2	1.55	にぶい黄橙 灰白	にぶい黄橙 灰白	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒 赤色 砂粒をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00112
56 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.8)	(7.7)	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00055
57 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.8	7.3	1.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒, 1mm以下の 砂粒をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00088
58 第31図	黒色土層	土師器	小皿	10.0	7.9	1.35	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00072
59 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.9	7.2	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を 含む	底部 板状圧痕	200301 00082
60 第31図	黒色土層	土師器	小皿	10.3	7.3	1.6	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00074
61 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(10.6)	(8.4)	1.35	褐灰	褐灰 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00038
62 第31図	黒色土層	土師器	小皿	10.4	8.0	1.55	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00083
63 第31図	黒色土層	土師器	小皿	10.6	7.9	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒 をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00075
64 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(10.8)	(8.4)	1.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00056
65 第31図	黒色土層	土師器	小皿	10.8	8.0	1.55	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00086
66 第31図	黒色土層	土師器	小皿	10.8	8.0	1.5	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒, 赤色 砂粒をわずかに含む		200301 00111
67 第31図	黒色土層	土師器	小皿	9.4	7.4	1.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕 外面からの穿孔	200301 00032
68 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.2)	(6.4)	1.15	灰黄褐	褐灰	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00010
69 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.2)	(7.0)	1.1	橙	橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む		200301 00009
70 第31図	黒色土層	土師器	小皿	(9.4)	7.2	1.4	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00033
71 第31図	黒色土層	土師器	坏	(14.0)	(10.0)	3.3	にぶい褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00058
72 第31図	黒色土層	土師器	坏	15.1	9.6	3.85	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00065
73 第31図	黒色土層	土師器	坏	(14.8)	8.7	3.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00063
74 第31図	黒色土層	土師器	坏	15.1	9.4	3.45	にぶい黄橙 灰黄褐	褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00057
75 第32図	黒色土層	土師器	坏	15.	9.2	3.4	灰黄褐	にぶい黄橙 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00012
76 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.2)	(11.4)	2.7	橙 にぶい黄橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00069
77 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.2)	(9.8)	2.8	灰黄	灰黄	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00020
78 第32図	黒色土層	土師器	坏	(15.4)	(11.6)	3.65	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00067
79 第32図	黒色土層	土師器	坏	(15.4)	(10.6)	3.05	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00019
80 第32図	黒色土層	土師器	坏	15.6	(8.7)	3.7	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を 含む		200301 00113
81 第32図	黒色土層	土師器	坏	15.5	10.2	2.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00018
82 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.6)	11.0	3.1	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00066
83 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.6)	(9.8)	2.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00021
84 第32図	黒色土層	土師器	坏	(15.6)	10.1	3.45	褐灰 にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00043
85 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.7)	10.2	2.75	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00063
86 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.9)	11.1	3.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00064

第3表 第188次調査出土遺物観察表③

遺物No	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整 ・ 装 飾		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面 (凸面)	内 面 (凹面)			
87 第32図	黒色土層	土師器	坏	(15.4)	11.2	3.25	黄灰	黄灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00022
88 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.6)	10.1	3.05	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00060
89 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.8)	11.4	2.6	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00044
90 第32図	黒色土層	土師器	皿	(15.8)	(10.5)	2.8	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00045
91 第32図	黒色土層	土師器	皿	(16.0)	(9.6)	2.65	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00013
92 第32図	黒色土層	土師器	坏	(16.1)	9.2	3.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒を含む	底部 板状圧痕	200301 00061
93 第32図	黒色土層	土師器	皿	(16.8)	(12.4)	2.35	にぶい黄橙 灰黄	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒2～3mm の砂粒を含む	底部 板状圧痕	200301 00070
94 第32図	黒色土層	土師器	皿	15.7	10.5	3.3	灰黄褐 褐灰	灰黄褐 褐灰	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む		200301 00059
95 第32図	黒色土層	土師器	皿	15.9	12.1	2.9	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む		200301 00011
96 第32図	黒色土層	土師器	托	(9.8)	(7.0)	2.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良		200301 00098
97 第32図	黒色土層	土師器	托	10.4	6.2	2.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良		200301 00097
98 第32図	黒色土層	土師器	托	(10.6)	(6.4)	2.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良		200301 00040
99 第32図	黒色土層	黒色土器 B類	碗	(16.8)	—	(5.1)	黒褐 灰黄褐	黄灰	ヘラケズリ ミガキ	ミガキ	1～2mmの砂粒を わずかに含む		200301 00068
100 第32図	黒色土層	土師器	器台	—	—	(3.85)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子をわず かに含む		200301 00099
101 第32図	黒色土層	土師器	器台	—	—	(5.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	精良		200301 00100
102 第32図	黒色土層	土師器	器台	—	—	(9.0)	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ		精良		200301 00114
103 第32図	黒色土層	土師器	器台	—	—	(9.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ケズリ ナデ		精良		200301 00109
104 第32図	黒色土層	須恵器	甕	—	—	(5.0)	灰	灰黄褐	タタキ	タタキ	精良		200301 00017
105 第32図	黒色土層	灰釉陶器	碗	—	—	(2.3)	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	精良		200301 00104
106 第32図	黒色土層	白磁	皿	—	—	(0.9)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00105
107 第32図	黒色土層	白磁	碗	—	—	(2.1)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅴ類	200301 00103
108 第32図	黒色土層	白磁	碗	—	—	(1.7)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅴ類またはⅦ類	200301 00102
109 第32図	黒色土層	白磁	碗	—	—	(3.1)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00106
110 第32図	黒色土層	白磁	碗	—	—	(3.2)	淡黄	淡黄	施釉	施釉	精良	Ⅱ類	200301 00110
111 第32図	黒色土層	白磁	碗	(15.2)	—	(3.7)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00101
112 第32図	黒色土層	白磁	皿	—	—	(3.2)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅺ類	200301 00016
113 第32図	黒色土層	白磁	碗	—	(6.4)	(3.5)	灰白	灰白	回転ヘラケ ズリ	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00041
114 第32図	黒色土層	白磁	碗	—	(7.0)	(5.7)	灰白	灰白	回転ヘラケ ズリ 施釉	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00042
115 第32図	礫敷き面	土師器	小皿	9.6	6.9	1.5	にぶい褐	にぶい褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00177
116 第32図	礫敷き面	土師器	皿	16.2	11.0	3.4	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒をわず かに含む	底部 板状圧痕	200301 00176
117 第32図	礫敷き面	土師器	器台	—	—	(10.3)	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ		1～2mmの砂粒を わずかに含む		200301 00179
118 第32図	礫敷き面	青磁	碗	—	6.6	(2.8)	灰オリーブ	灰オリーブ	回転ヘラケ ズリ 施釉	施釉	1～2mmの砂粒を わずかに含む	見込みに胎土目 越州窯青磁Ⅰ類	200301 00178
119 第33図	①期路面 直上	土師器	小皿	(9.2)	(6.7)	1.2	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00158
120 第33図	①期路面 直上	土師器	小皿	9.4	7.4	1.3	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00155
121 第33図	①期路面 直上	土師器	小皿	9.6	7.9	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00157
122 第33図	①期路面 直上	土師器	小皿	9.8	7.0	1.2	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00154
123 第33図	①期路面 直上	土師器	小皿	9.8	7.5	1.5	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm大の砂粒をわ ずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00156
124 第33図	①期路面 直上	土師器	小皿	9.8	7.0	1.4	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00153
125 第33図	①期路面 直上	土師器	坏	(15.2)	9.6	3.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子・1～ 2mmの砂粒を含む		200301 00150
126 第33図	①期路面 直上	土師器	坏	(16.0)	9.6	3.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00151
127 第33図	①期路面 直上	土師器	坏	(16.4)	(10.9)	3.3	にぶい橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00152
128 第33図	①期路面 直上	土師器	托	10.4	—	(1.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	1mm大の砂粒をわ ずかに含む		200301 00161
129 第33図	①期路面 直上	土師器	碗	(14.8)	8.4	4.3	にぶい橙	灰褐	回転ナデ ナデ・ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む		200301 00159

第4表 第188次調査出土遺物観察表④

遺物No	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整 ・ 装 飾		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面 (凸面)	内 面 (凹面)			
130 第33図	①期路面 直上	土師器	碗	(14.8)	(7.5)	4.3	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を多 く含む		200301 00160
131 第33図	①期路面 直上	青磁	碗	—	(6.2)	(1.7)	灰黄	灰黄	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	精良	見込みに胎土目 越州窯青磁Ⅰ類	200301 00165
132 第33図	①期路面 直上	白磁	碗	(14.0)	—	(5.0)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00164
133 第33図	①期路面 直上	土師器	器台	—	—	(14.8)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ		精良		200301 00162
134 第33図	①期路面 直上	土師器	器台	—	—	(6.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		精良		200301 00163
135 第33図	②期路面 直上	土師器	小皿	(9.8)	(8.2)	1.0	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子・1～2mmの 砂粒をわずかに含む		200301 00171
136 第33図	②期路面 直上	土師器	小皿	9.1	7.2	1.1	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む	底部 板状圧痕	200301 00167
137 第33図	②期路面 直上	土師器	小皿	9.0	7.4	1.2	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00168
138 第33図	②期路面 直上	土師器	小皿	(9.8)	(6.9)	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む	底部 板状圧痕	200301 00170
139 第33図	②期路面 直上	土師器	小皿	9.5	6.4	1.7	灰黄褐	褐灰 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む		200301 00169
140 第33図	②期路面 直上	土師器	皿	15.9	10.4	3.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～3mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00166
141 第33図	②期路面 直上	緑釉陶器	碗	—	(4.2)	(1.4)	灰白	淡黄	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	精良		200301 00174
142 第33図	②期路面 直上	白磁	皿	—	—	(2.7)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅺ類	200301 00173
143 第33図	②期路面 直上	白磁	碗	—	6.7	(3.6)	灰白	灰白	施釉	施釉	1～2mmの砂粒を わずかに含む	Ⅳ類	200301 00172
144 第33図	②期路面 直上	土製品	紡錘車	4.6	4.6	1.2	にぶい黄橙		ナデ	ナデ	1～3mmの砂粒を 含む		200301 00175
145 第33図	礫敷き遺構	土師器	小皿	(9.1)	(6.7)	1.6	にぶい橙 灰	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含 む		200301 00118
146 第33図	礫敷き遺構	土師器	小皿	9.6	8.1	1.3	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む		200301 00116
147 第33図	礫敷き遺構	土師器	小皿	(10.0)	7.6	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	砂粒(石英・長石) を含む	底部 板状圧痕	200301 00117
148 第33図	礫敷き遺構	土師器	皿	—	(10.2)	(1.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	赤色砂粒子を含む		200301 00115
149 第33図	礫敷き遺構	土師器	皿	(16.8)	(11.4)	2.8	にぶい褐	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む	底部 板状圧痕	200301 00119
150 第33図	礫敷き遺構	灰釉陶器	碗	—	(7.6)	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	精良		200301 00121
151 第33図	礫敷き遺構	白磁	碗	—	—	(2.8)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅴ類	200301 00122
152 第33図	礫敷き遺構	白磁	碗	—	—	(2.3)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅴ類	200301 00123
153 第33図	礫敷き遺構	白磁	碗	—	—	(2.3)	乳白	乳白	施釉	施釉	精良	Ⅰ類	200301 00124
154 第33図	礫敷き遺構	白磁	碗	—	—	(2.3)	乳白	乳白	施釉	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00124
155 第33図	礫敷き遺構	土師器	器台	—	—	(5.1)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ		精良		200301 00130
156 第33図	礫敷き遺構	土師器	器台	—	—	(7.5)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ		精良		200301 00129
157 第33図	礫敷き遺構	土製品	土錘	3.8	1.2	—	にぶい黄橙	—	ナデ		精良		200301 00128
158 第33図	礫敷き遺構	石製品	基石	2.2	2.1	0.7	黒灰	—					200301 00126
159 第33図	礫敷き遺構	石製品	基石	2.2	1.9	0.7	灰	—					200301 00127
160 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	小皿	(10.0)	7.5	1.3	灰黄褐 褐灰	褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm程度の砂粒を わずかに含む		200301 00202
161 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	小皿	10.3	7.8	2.0	灰黄褐 褐灰	褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00203
162 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	皿	10.3	7.8	2.0	灰黄褐 褐灰	褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00203
163 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	14.8	9.2	3.6	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～3mmの砂粒を 多く含む		200301 00195
164 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	(15.7)	9.0	(3.7)	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00192
165 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	15.1	10.2	3.7	灰黄褐 褐灰	灰黄褐 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1～2mmの砂粒を わずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00193
166 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	15.0	10.0	3.7	灰白	灰白	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	1～3mmの砂粒を 多く含む		200301 00194
167 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	15.2	8.9	3.7	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	1～5mmの砂粒・ 礫を多く含む		200301 00196
168 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	15.4	10.3	3.2	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00191
169 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	(14.6)	(8.3)	(2.5)	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の細砂粒 をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00200
170 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	皿	(16.2)	11.3	2.6	灰黄褐 褐灰	灰黄褐 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の細砂粒 をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00197
171 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	坏	(16.6)	(10.8)	(3.3)	黄灰	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色粒子・1mm以下 の細砂粒を含む		200301 00198
172 第33図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	碗	17.0	9.2	5.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	1mm以下の細砂粒 をわずかに含む		200301 00201

第5表 第188次調査出土遺物観察表⑤

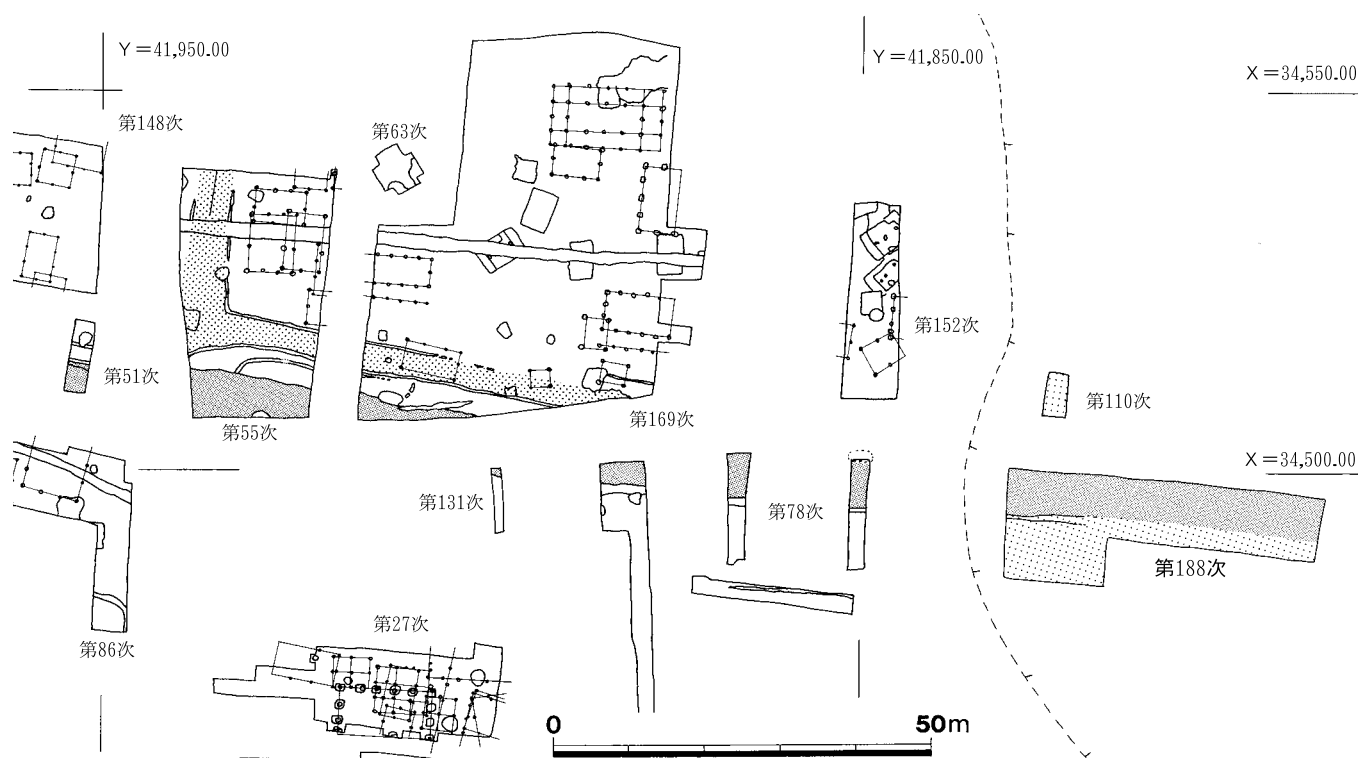
遺物No	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整・装 飾		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面 (凸面)	内 面 (凹面)			
173 第34図	礫敷き面 祭祀遺構	土師器	碗	(25.6)	—	(8.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む		200301 00190
174 第34図	礫敷き遺構	土師器	小皿	8.8	7.1	1.1	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 にぶい黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00145
175 第34図	礫敷き遺構	土師器	小皿	9.3	6.5	1.3	にぶい黄橙 灰	にぶい黄橙 灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00143
176 第34図	礫敷き遺構	土師器	小皿	10.1	8.1	1.4	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00144
177 第34図	礫敷き遺構	土師器	坏	14.9	9.1	3.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む	底部 板状圧痕	200301 00140
178 第34図	礫敷き遺構	土師器	坏	15.2	9.6	3.2	にぶい黄橙 にぶい黄褐	にぶい黄橙 にぶい黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む	底部 板状圧痕	200301 00139
179 第34図	礫敷き遺構	土師器	坏	(15.6)	(10.8)	2.9	にぶい黄橙 にぶい黄褐	にぶい黄橙 にぶい黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む	底部 板状圧痕	200301 00141
180 第34図	礫敷き遺構	土師器	坏	(15.8)	—	(3.5)	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	砂粒(石英・雲母)を含む		200301 00142
181 第34図	礫敷き遺構	土師器	碗	(8.7)	5.8	2.9	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を多 く含む		200301 00138
182 第34図	礫敷き遺構	土師器	碗	(16.0)	(6.7)	6.1	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	回転ナデ ミガキ	回転ナデ ミガキ	砂粒(石英・雲母)を含む		200301 00146
183 第34図	礫敷き遺構	土師器	器台	(16.7)	—	(3.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む		200301 00137
184 第34図	礫敷き遺構	青磁	水注	(2.5)	1.8	0.8	灰オリーブ	灰オリーブ	施釉	施釉	精良	把手	200301 00147
185 第34図	礫敷き溝	土師器	小皿	9.3	7.6	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00182
186 第34図	礫敷き溝	土師器	小皿	(9.3)	(6.9)	0.9	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子・砂粒(石英・雲母)をわずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00183
187 第34図	礫敷き溝	土師器	坏	(15.2)	(8.5)	3.4	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む		200301 00184
188 第34図	礫敷き溝	土師器	皿	(15.7)	(9.2)	3.1	にぶい黄橙	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む		200301 00181
189 第34図	礫敷き溝	土師器	把手	(4.1)	—	—	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙 黒褐	ナデ	—	精良		200301 00185
190 第34図	礫敷き溝	白磁	碗	—	—	(2.2)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅳ類	200301 00189
191 第34図	礫敷き溝	白磁	皿	(12.8)	—	(2.9)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅺ類	200301 00187
192 第34図	礫敷き溝	灰釉陶器	碗	(13.6)	—	(2.7)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良		200301 00188
193 第34図	礫敷き面	白磁	碗	(15.6)	—	(3.4)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良	Ⅴ類	200301 00186
194 第34図	礫敷き面	土師器	小皿	10.3	8.0	1.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子を含む	底部 板状圧痕	200301 00148
195 第34図	礫敷き面	土師器	皿	(17.0)	(11.8)	3.1	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		200301 00204
196 第34図	礫敷き面	白磁	碗	—	(6.9)	(1.3)	灰白	灰白	回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	精良	Ⅰ類	200301 00206
197 第34図	礫敷き面	白磁	碗	—	6.0	(1.6)	灰白	灰白	回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	精良	Ⅺ類?	200301 00205
198 第34図	礫敷き面	青磁	碗	—	—	(2.4)	灰オリーブ	灰白	回転ヘラケ ズリ 施釉	施釉	精良	見込みに胎土目 越州窯青磁Ⅱ類	200301 00207
199 第34図	礫敷き面	緑釉陶器	碗	—	5.3	(1.7)	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	糸切り 施釉	施釉	精良		200301 00212
200 第34図	礫敷き面	緑釉陶器	皿(?)	—	—	(0.8)	淡黄	淡黄	施釉	施釉	精良	花文線刻	200301 00213
201 第34図	礫敷き面	瓦	平瓦	(2.3)	(11.8)	(6.9)	浅黄橙	にぶい黄橙	正格子タタキ	布目	1mm以下の細砂粒をわずかに含む		200301 00149
202 第34図	SK 1	土師器	小皿	(9.2)	(7.0)	1.0	褐灰	褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	1mm以下の細砂粒をわずかに含む	内面に煤付着	200301 00133
203 第34図	SK 1	土師器	小皿	(10.4)	(8.4)	1.3	にぶい黄橙 灰	にぶい黄橙 灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む		200301 00180
204 第34図	SK 1	土師器	坏	(16.0)	(11.0)	3.5	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	底部 板状圧痕	200301 00131
205 第34図	SK 1	土師器	皿	(17.0)	(10.6)	2.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色砂粒子をわ ずかに含む	底部 板状圧痕	200301 00132
206 第34図	SK 1	土師器	器台	—	—	(2.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ	精良		200301 00134
207 第34図	SK 1	土師器	把手	(4.6)	—	—	にぶい黄橙	—	ナデ		精良		200301 00135
208 第34図	SK 1	緑釉陶器	脚	(2.2)	(2.5)	1.6	灰オリーブ	灰オリーブ	ケズリ	ナデ	精良	皿または 香炉の脚	200301 00214
209 第34図	SK 1	白磁	水注	(4.8)	—	—	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	精良		200301 00136
210 第34図	波板状遺構 トレンチ	土師器	坏	—	(5.6)	(2.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	精良		200301 00208
211 第34図	黒色土層	白磁	つまみ	(2.3)	(1.7)	(1.0)	灰白	灰白	ナデ	ナデ	精良(白色・黒色 粒子を含む)		200301 00210
212 第34図	整地層	石製品	滑石製ミニ チュア製品	(1.7)	(3.4)	1.4	灰 灰白	灰 灰白	ケズリ	ケズリ	滑石		200301 00209
213 第34図	整地層	石製品	石鍋補 修栓	(2.9)	(3.2)	(2.2)	灰 黄灰	灰 黄灰	ケズリ	ケズリ	滑石		200301 00215
214 第34図	黒色土層	石製品	石鍋補 修栓	(3.4)	(4.6)	1.8	灰 暗灰	灰 暗灰	ケズリ	ケズリ	滑石		200301 00211
215 第34図	SK 1	石製品	石鍋補 修栓	(6.4)	(6.0)	2.9	灰 灰白	灰 灰白	ケズリ	ケズリ	滑石		200301 00216

4. 小結

今回の調査は、筑後国府内を東西に走る推定古代西海道（S F 2709）と、その南側に広がる礫敷き遺構を調査したものである。西海道を統括する大宰府より南下してきた西海道は、筑後国府北方付近で筑後川を渡河し、筑後国府跡と井田川を挟んで東岸に対峙するへボノ木遺跡に至り、へボノ木遺跡南西部で西方に方向を変える。その後、井田川を渡河して筑後国府に至るが、調査地はその渡河地点、筑後国府へのエントランスにあたる場所である。調査地周辺では、筑後国府跡第51・55・57・78・110・131・169次調査、へボノ木遺跡第17・39・62次調査において道路遺構が確認されており、東西方向に伸びるルートが復元されている。これらの調査所見によると、井田川の東西では道路遺構の構造・時期に大きな相異が見られる。概略としては、西側では切り通し状にカットされた2時期（7世紀末～8世紀初頭築造・10世紀半ば頃築造）の道路遺構が確認されているのに対し、東側のへボノ木遺跡第62次調査では地山上に硬化面を形成した10世紀中頃築造の1面が確認されているのみである。これらの状況は、地形や後世の削平状況などで左右されていると考えられるが、今回は過去の調査所見の検討と、井田川の流れて開析された低地における道路遺構の状況を把握する目的で調査を行ったものである。以下、今回の調査で得られた所見をまとめてみたい。

道路遺構（S F 2709）について

S F 2709は、調査区北壁に沿って約43m検出した。南端は調査区内で確定できるが、北端は現道路下になる為に幅は不明である。なお、井田川を挟んで東側約20mで実施された筑後国府跡第57次調査では、約14mの幅が推定されている。調査区西側が高所にあたり、東側にかけて徐々にレベルが低くなる。この為、調査区西壁付近は第78・169次調査と同様に切り通し状を呈する。しかし、井田川の開析による低地に差し掛かると、逆に2層の盛土によって整地され、上面には小礫・砂粒・遺物等をバラス状に敷き詰めるこ



第40図 第188次調査地周辺の主要遺構（1/1,000）

とによって硬化面が形成されている。この硬化面下の盛土整地された明黒灰色砂質土層は、調査区北壁付近で約0.2mを測る。S F 2709上面はほとんどが削平を受けている為に硬化面との関係は掴めなかったものの、明黒灰色砂質土層には帯状硬化面・「波板状痕跡」・「刺突状痕跡」が確認された。帯状硬化面は「波板状痕跡」の上面に確認され、主軸の方向性から一連のものと考えることができる。これらのS F 2709に関する諸痕跡については、S F 2709敷設当初の所産であるか、使用期間中における補修や改修の所産であるのが問題となろうが、S F 2709が削平されていることや道路遺構の認識不足から、今回の調査では把握することができなかった。

S F 2709の築造年代を推定する手がかりとして、下層を形成している盛土整地（黒灰色粘質土層・明黒灰色砂質土層）からの出土遺物を上げることができる。調査区中央部に設定したトレンチからは、縄文・弥生土器と共に、概ね9世紀中頃～後半の遺物が出土しており、一つの目安となろう。②期と位置付けたものについては、その造営には①期道路遺構を削平し、やや北よりに縮小した規模で盛土整地したと解釈しているが、検出部分が少ないことなどから検討の余地が残る。築造年代についても確認できなかった。

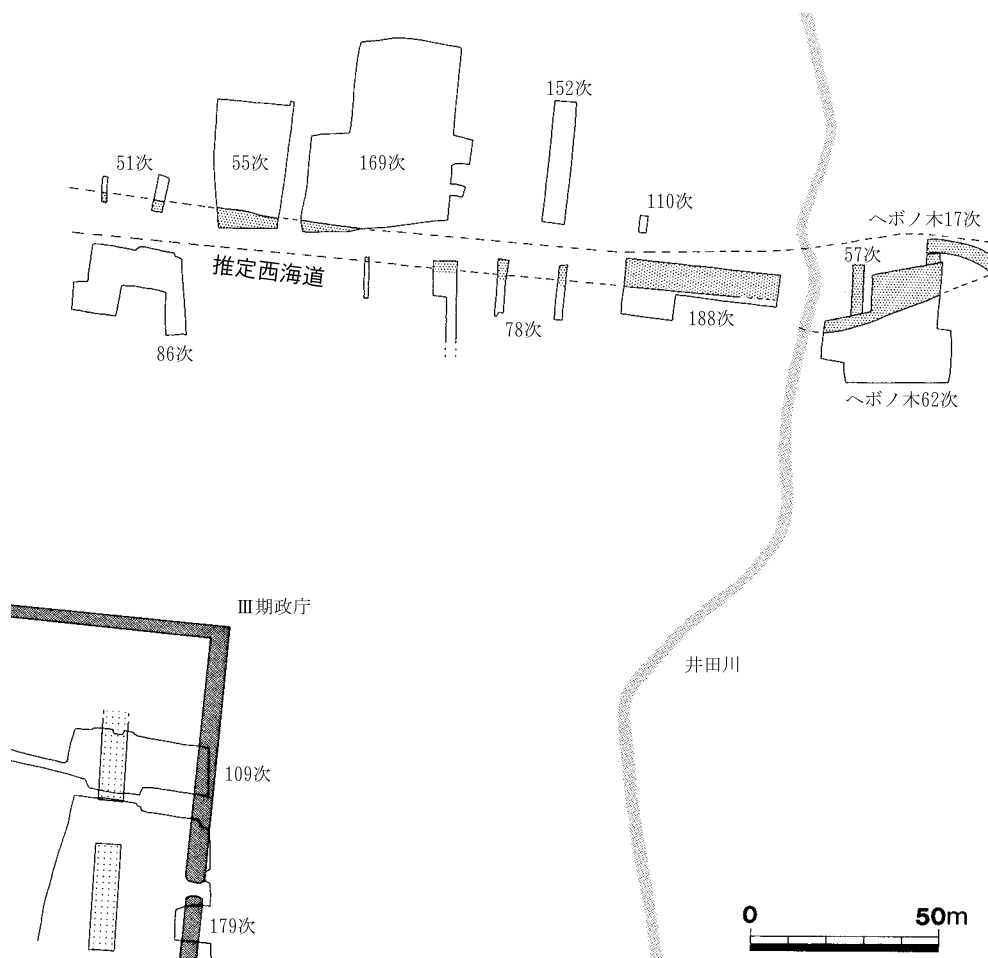
廃絶年代は、S F 2709上に堆積する黒色土・整地層に包含される遺物から推測することができる。前述したように、黒色土・整地層には多くの遺物が包含されており、上面の整地層には糸切り底の皿・小皿が主体となる。黒色土出土の小皿は、糸切り底のものも見られるが、大半がヘラ切り底であり、概ね11世紀末～12世紀初頭の時期が考えられる。これは、調査地西側の筑後国府跡第78次調査や東側のヘボノ木遺跡第62次調査から得られた所見と矛盾するものではない。ところで、調査地より南西約120mには10世紀中頃に築造された筑後国府跡Ⅲ期政庁跡が存在する。このⅢ期政庁は、11世紀後半に移転したことが考古学・文献史学両面から確認されており、周辺の官衙も合わせて移転したのと考えられている。周辺の調査所見でも、この官衙群の移転に伴って西海道も路線が変更された可能性が指摘されており、今回の調査地でも追認したことになる。

礫敷き遺構について

S F 2709の南側には、路側帯と溝や意識的に高まり部分を創出した礫敷き遺構が存在する。路側帯はS F 2709南側溝の延長上に位置するが、前述したように、下部構造から推定する限り、S F 2709と一帯のものとして同時期に施工されている。断面の構造は、明黒灰色上面に凹凸を設けた跡、その凹凸を黒色系砂質土で充填させ、上面に近い部分には小礫・砂を多量に含む土で充填して礫敷き面を完成させる。路側帯の幅については調査区外に伸びる為に不明である。

路側帯以外の礫敷き遺構は、調査区西側の調査区拡張部分で検出されている。前述したように、地山整形や意図的な創出により、溝・高まり部分を形成する。意識的に高まり部分を周回させ、淀み部分を設けた溝は、排水を意図した溝としては機能的ではなく、庭園内の溝ように「見せる」効果を期待したように思える。表面観察ではS F 2709と一連のものと考えられるが、機能的にはS F 2709に附帯する必要があるものではない。ここで、調査地周辺の地形と筑後国府内での位置を見てみたいが、調査地と、北側の現道を挟んでその北側には、井田川によって開析された低地が広がる。筑後国府跡第110次調査は、当時推定されていた西海道のルートから、北側へ外れた現道北側の低地部分を調査しており、調査面積が狭いながらも礫敷きの硬化面を検出している。この礫敷き硬化面は、9世紀後半代の遺物を包含する盛土で整地された上面に設けられていることが確認されており、第188次調査で確認された状況と類似している。この礫敷き硬化面が西海道と理解され、井田川で開析された低地付近では、西海道の幅は徐々に広くなると解

積されてきた。しかし、その西側延長線上に位置し、第110次調査のわずか約20mで行った第152次調査では、S F 2709に関連するような遺構は全く検出されず、西海道の井田川付近における構造に不明な点が存在した。ここで、今回の調査区で検出したS F 2709の南側に目を転じると、礫敷きの硬化面が広がっている。確認はしていないものの、この礫敷き面は、恐らく井田川に解析された低地であり、



第41図 朝妻・へボノ木地区道路遺構配置図 (1/2,000)

西側の台地部分に入江状に入り込む調査対象地全域に広がるものと思われる。この状況が、S F 2709南側のみに存在したのではなく、その北側にも広がっていると考えられるならば、第110次調査で検出した礫敷き硬化面はS F 2709本体と考えるよりも、その北側に広がる礫敷き面を検出したと考えることができる。以上のように考えると、S F 2709が通過する低地付近には一面に礫敷きが施され、その中央部を築堤状に幅6～10m程度のS F 2709が敷設された状況が復元できる。礫敷きの範囲は不明であるが、現在の地形から推定するならば、南北80m、東西50m程度の範囲が考えられよう。しかし、井田川東岸の筑後国府跡第57次調査では、S F 2709の幅が約14m程度と推定されており、どのように接続するのか今後の検討を要する。更に調査地付近は、前述したように、大宰府から南下してきた西海道が、筑後国府へ入るエントランス部分にあたり、礫敷き面を広範囲に形成することにより、往来する人々への視覚的な効果を期待したことも想像できる。

おわりに

今回は、道路遺構としては非常に良好な遺存状況を保ち、道路遺構を構成する様々な痕跡が詰まった推定古代西海道（S F 2709）の調査を行ったが、調査担当者の道路遺構に対する認識不足から、不十分な調査となってしまった。よって、報告も十分なものとは言い難いが、幸いにも調査対象地の遺構は保存措置が講じられており、詳細については今後の周辺地における調査に期待するところが大きい。最後に、調査に際し現地でご指導いただいた小鹿野亮氏（筑紫野市教育委員会）に記して謝意を表します。（神保）

（註1）小鹿野亮「古代道における路体施工の複合性―道路に残された痕跡の分別理解―」『九州考古学』

第78号九州考古学会2003

IV. 第192次調査

1. 調査に至る経過

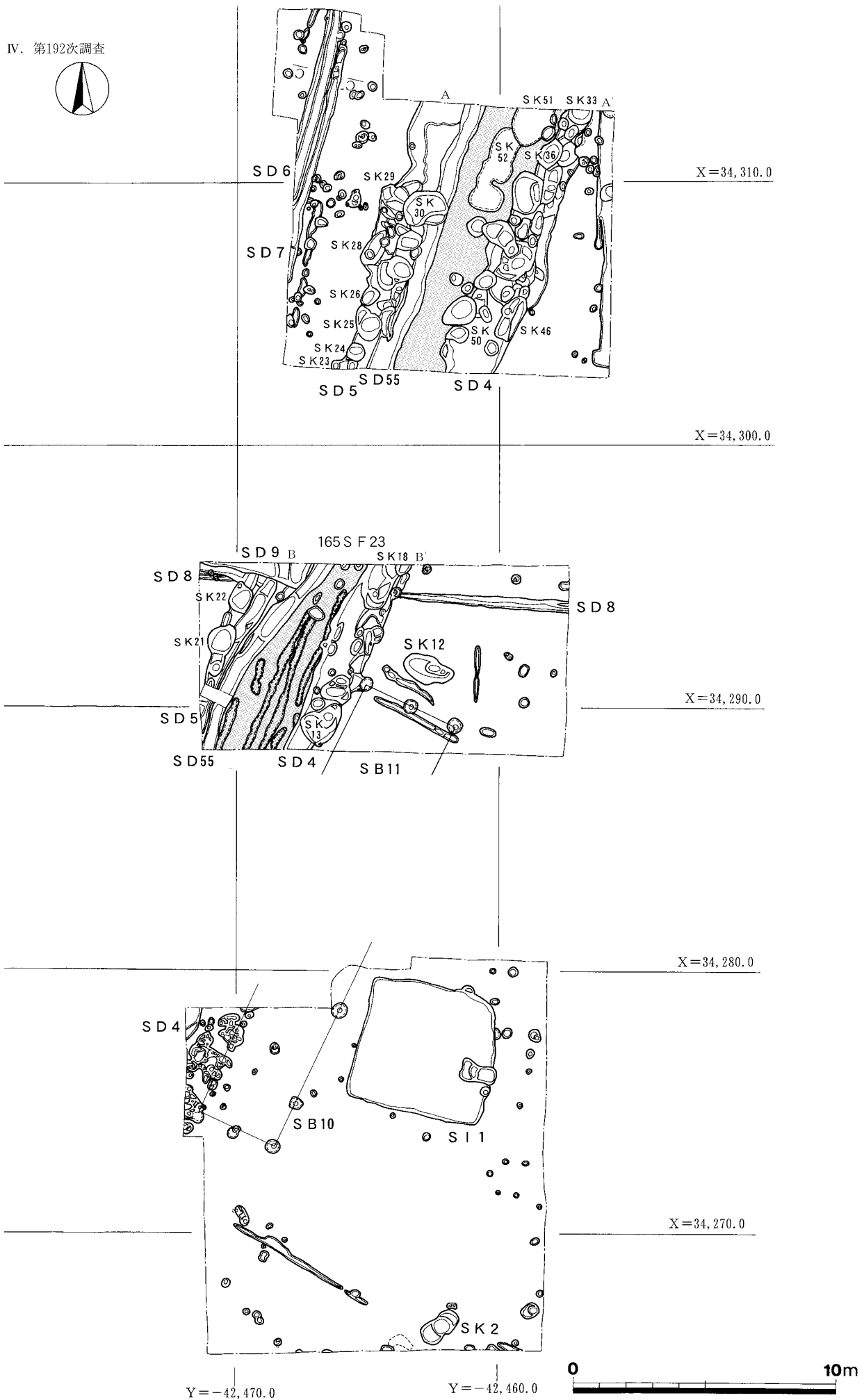
本調査は、平成15年7月9日に、地権者の[REDACTED]氏より、久留米市合川町字井葉206-8、207-1について、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の事前審査の依頼書が提出されたことに始まる。これを受けて、久留米市教育委員会文化財保護課では、付近は筑後国府のⅡ期政庁に伴う国司館が存在した場所として既に国の史跡指定を受けている重要な地点であり、対象地はその南側隣接地に当たることや、第165次調査において対象地方面へ向かって延びている道路遺構や溝を検出し、その南側延長部の存在が当然予想されることから、7月22日に試掘調査を実施したところ、道路遺構の延長部と考えられる遺構が存在することが判明。その旨を回答し、以後は協議を進めた。その結果、今回建設される建物3棟は木造2階建てながら、対象地は周辺より土地が低い水田であることからその分は大きく盛土され、そのため建物の基礎には杭打ちが必要となることから、侵入路や駐車場となる部分を除いた建物建設部分のみを対象として原因者の費用負担による発掘調査を行うことで協議が成立した。それを受けて、8月8日に法57条2項による届出、9月10日には調査の依頼が提出され、10月6日には地権者と久留米市長江藤守國との間で筑後国府跡第192次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、10月15日から発掘調査を開始する運びとなった。

2. 調査の方法と経過

上記した通り、建物3棟の建設部分について、北・中央・南調査区を設定。まず平成15年10月15日～17日に重機による表土剥ぎを行う。16日には機材の搬入を行い、南調査区から遺構検出作業を開始。



第42図 第192次調査区全景（西から）



第43図 第192次調査遺構配置図 (1/100)



第44図 北・中央調査区全景（東から）



第45図 南調査区全景（東から）

南調査区は遺構も少なく、掘下げも順調に進んだが、中央・北調査区では道路状遺構や側溝の検出・掘下げに時間を要した。11月7日には測量を行い、21日からは実測作業を開始。26日には遺構清掃作業を行い、翌27日には気球による全景写真を撮影。以後は実測作業を続け、12月4日に実測作業を終了、機材を撤収。8日に重機による埋め戻し作業を行い、現地調査を終了した。

対象面積は1427㎡。その内、北調査区142㎡、中央調査区104㎡、南調査区192㎡の合計439㎡分を調査している。

遺構の記録作業は、主として図面はトラバースを組んで縮尺1/20の図面を作成した他、遺構の状況に応じて縮尺1/10の個別実測図を作成し、さらに遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて補足した。写真記録はカラーリバーサル・モノクロ6×7、モノクロ35mmを撮影している。

整理作業は11月1日～12月31日の期間に実施した。



第46図 調査風景（南から）

3. 検出遺構と出土遺物

a. 検出遺構

調査地における層序は、現地表から20cmの厚さで耕作土・床土があり、10cmの遺物を包含する褐色土を経て、黄色土（地山）の遺構検出面に達する。検出された主な遺構は、竪穴住居1軒、掘立柱建物2棟、道路状遺構1、溝5条、土坑44基などである。

竪穴住居

S I 1（第47図） 南調査区北東部で検出。平面形が一边約5mの方形を呈し、深さは20cm前後。床面には硬化面が認められる。東壁中央やや南寄りにカマドが設けられているが、完全に破壊され、僅かに焼土と炭化物・白色粘土が少量認められる程度で、祭祀行為と見られる遺物などは出土していない。埋土は暗褐色土中に多量の黒色土と少量の黄色ブロック土が混入した一括埋土である。

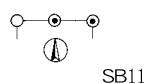
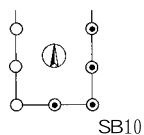


第47図 S I 1 (東から)



第48図 S B 10 (北東から)

掘立柱建物



S B 10 (第48図) 南調査区北西部で検出。遺構は北側調査区外へ延びているが、桁行2間分(5.7m)×梁間2間(3.2m)の規模を持つ南北棟建物である。柱穴は平面形が一辺50cm前後の隅丸方形、又は長軸60cm、短軸30cm前後の長方形を呈し、深さは30～50cm。東側桁行の柱間寸法は北側から3.9m+1.8m。梁間の柱間寸法は1.6m等間。計画方位はN-25°-E。

S B 11 中央調査区で2間(3.8m)分の柱穴を検出。遺構の分布状況からこの建物は南西側調査区外へ延びると判断されることから、この柱穴は南北棟建物の北側梁間と考えられる。柱穴は直径40cm前後の円形、もしくは隅丸方形。深さは40～60cm。柱間寸法は1.9m等間。計画方位はN-25°-W。



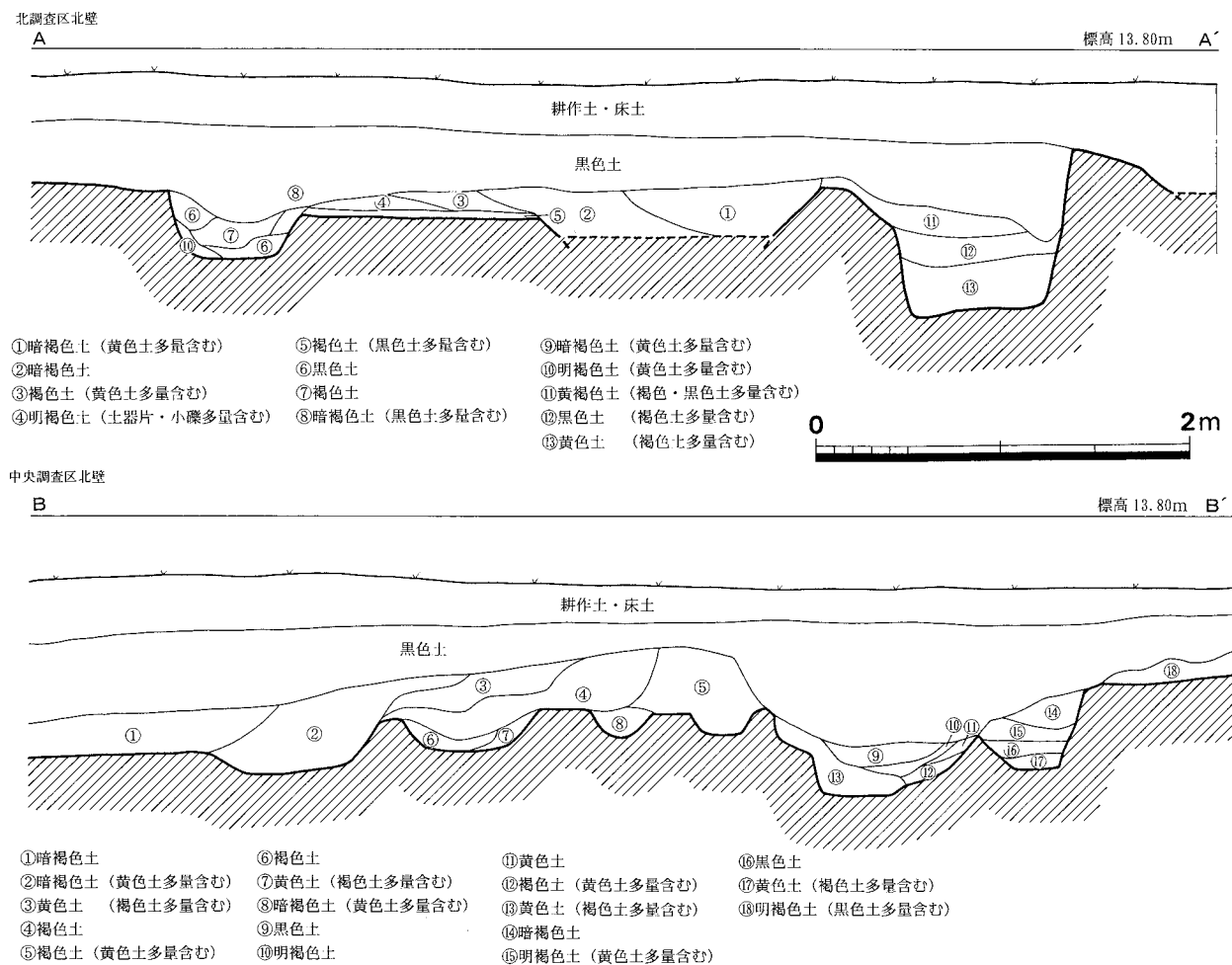
第49図 北調査区165 S F 23路面状況(北西から)



第50図 中央調査区165 S F 23基礎状況(南東から)

道路状遺構

165 S F 23 (第49～51図) 北調査区北東端部から中央調査区南西端部にかけて斜行して走行する道路状遺構。北側隣接地で平成11年度に実施した第165次調査の際に検出された道路状遺構165 S F 23の南側延長部と考えられる遺構で、今回は26.5m分を検出したものである。後出する連続土坑群によって切り込まれるため正確な幅は明確でないが、残存幅は1.2～2.7mを測る。地山の上に黄色土に褐色土が多量混入し



第51図 165 S F 23、S D 4・5 土層断面図（1/40）

た土を約3cm敷き、さらにその上に明褐色土中に黄色土や土器細片・砂礫を混ぜ、約3cmの厚さでバラス状に敷詰めた後、それを突き固め路面としている。また、路面西側最端部には直径10cm前後の扁平な円礫が置かれていた。中央調査区検出部分のみは、路面下の地山面に幅20～30cm、深さ5cm前後の溝が道路と同じ方向に沿って数条掘り込まれていたが、路面の基礎地形に関連するものと考えられる。



溝

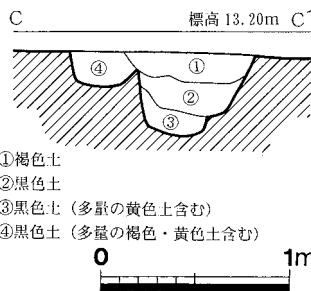
S D 4・5（第51図） S F 23の両側溝と考えられる溝である。東側溝 S D 4 は幅80～170cm、深さ20～40cm。連続土坑群よりも先行する。西側溝 S D 5 も、後出する連続土坑群や S D 55 に掘り込まれているため明確ではないが、幅80cm以上、深さ20cm前後を測る。

S D 55 S D 5 と土坑群よりも後出する溝。幅80cm前後、深さは30cm。埋土は黒色土中に黄色・褐色土が多量混入した一括埋土である。

第52図 S D 6・7 全景（北東から）

走行する溝。遺構は調査区外へ延びており、約7m分を検出。この溝は、当初幅30cm前後、深さ45cmで、

S D 6（第52・53図） 北トレンチ北西部を南北



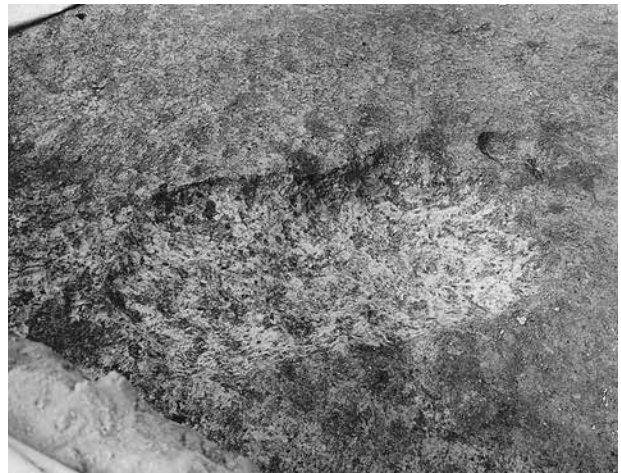
第53図 SD 6・7土層図(1/40)

断面がU字状を呈したと推定される溝から、幅60cm、深さは35cm、断面は逆台形を呈する溝へと一度改修されている。埋土は褐色土と黒色土による一括埋土である。SD 7よりも後出する。

SD 7 (第52・53図) SD 6の東側で検出した南北溝。南側は調査区外へ延びており、約6m分を検出。西側は後出するSD 6によって切り込まれるため失われているが、溝幅は40cm前後と推定される。深さは20cm。埋土は褐色土と黄色ブロック土を多量含んだ黒色土による一括埋土である。



第54図 SB11、SD 8、SK12 (東から)

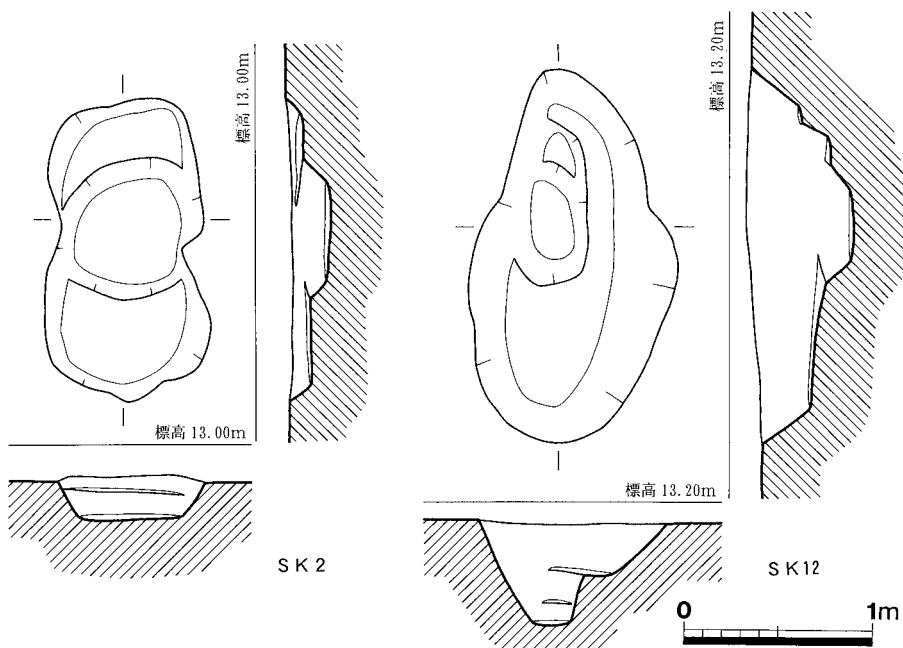


第55図 SK 2全景 (南東から)

SD 8 (第54図) 中央調査区北部を東西走行する溝。両端部は調査区外へ延びているが約14m分が検出された。幅50cm、深さは20cm前後。溝底レベルは東側から西側へ向かって深くなっている。SD 4・5・9、連続土坑群よりも後出する近世の溝である。

SD 9 中央調査区北西端部で検出。遺構の大半は調査区外にあるため詳細は不明であるが、約4m分

を検出。幅80cm以上、深さは5～20cmを測る。SD 5と連続土坑群よりも後出するが、SD 8よりも先行する溝である。



第56図 SK 2・12実測図 (1/40)

土坑

SK 2 (第55・56図)

南トレンチ南端部で検出。平面形は楕円形を呈し、長軸長1.5m、短軸長75～90cm、深さは中央部が一段深くなり10～20cmを測る。埋土は黒色土中に黄色ブロッ

ク土が少量混入した一括埋土で、遺物は全く出土していない。



第57図 S K33～50全景（北から）

S K12（第54・56図）

中央調査区で検出した土坑。平面形は楕円形を呈し、長軸長2.0m、短軸長1.1mを測る。北東部が2段低くなっており、深さは30～55cm。埋土は黒色土に黄色ブロック土が少量混入した一括埋土で、土師器・須恵器・黒色土器A類が少量出土し、9世紀後半代～10世紀前半代の遺構と考えられる。

S K13～54 S F23の両側溝S D4・5に沿って掘り込まれた連続土坑群である。S K13～50はS D4・5、S K51～54は165 S F23に後出するが、S D55よりも先行する。それぞれ重複が著しいため個別の詳細は不明であるが、平面形は楕円形もしくは楕円形を呈し、長軸は1.0～2.5m前後、短軸が1m前後、深さ40～90cm前後の規模を持つ土坑が多く、主軸方位も一定していない。遺物は全く出土しないものもあるが、土師器や黒色土器の細片が40点程度出土するものも多く、最も多い方に属する土坑でも細片資料が120点余り出土する程度で、10世紀後半代～11世紀初頭頃に掘られたと考えられる。

b. 出土遺物

第192次調査ではコンテナ16箱分の遺物が出土した。その内容は、土師器、須恵器、黒色土器A・B類、丸瓦、平瓦、輸入陶磁器、緑釉陶器、鉄製品、石製品（砥石・石鍋）、管玉、縄文石器（磨製石斧・すり石・石錘）、近世国産陶磁器である。これらの遺物はS F23、S D4・5の覆土中から出土したものが最も多く、S F23路面やS D4・5・55埋土中からの出土量がそれに続いている。図示した遺物の詳細については、一覧表を参照されたい。

S I 1出土遺物（第58図1～5） 土師器（坏・甕）細片442点、須恵器（坏蓋・甕）32点、焼土塊46点、砥石2点が出土。3の土師器坏の内底部には焼成前に刻まれた記号がある。4・5は須恵器坏蓋転用硯。内面には明瞭な擦痕が見られ、5には墨痕が残る。

165 S F23出土遺物（第58図6～12） 土師器（坏・碗・小皿・甕）2602点、須恵器（坏・甕）238点、黒色土器A類碗80点、同B類碗66点、青磁6点、白磁1点、緑釉陶器1点、丸瓦6点、平瓦14点、瓦細片25点、鉄製品4点、焼土塊21点などが出土。6は玉縁口縁の白磁。7～9は越州窯系青磁。10は牛角状の把手が付いた黒色土器A類の碗の把手。端部に切り込みを入れ陽物を象っている。中央で2つに折れ、北調査区検出路面上の30cmほど離れた場所から上下別々となった状態で出土した。11は断面が方形の鉄製品。12は黒色土器B類の碗。内外面共に丁寧なミガキが施されている。

S D4出土遺物（第58図13～29） 土師器（坏・碗・小皿・托・甕・鉢・カマド）2550点、須恵器（坏蓋・甕・壺・透入圈脚硯）細片197点、黒色土器A類碗50点、同B類（碗・不明製品）59点、丸瓦10点、平瓦24点、瓦細片28点、鉄製品（刀子・不明製品）2点、土製品（フイゴ羽口・埴塙）、石製品（石鍋・砥石）などが出土。13～15は土師器の小皿。16は土師器の托。17・18は土師器の碗。19は埴塙。内面には鉄分が付着する。21・22は黒色土器A類、20・23は同B類。20は托を模した高台が付く碗である。21の底

部は焼成後に直径約2cmの穴が穿たれている。24は7面面取りされた角柱状の用途不明製品である。25は丸瓦。凸面は縄目叩き文をスリ消し、凹面には六角形と縦・横方向の直線を組み合わせた浅い溝が残る。26・27は凸面の斜格子文に円文が混じった叩き文が残る平瓦。28は鉄製刀子。29は円盤の中心を軸が通り、紡錘車に似た形状を示す不明鉄製品。

S D 5 出土遺物 (第58図30～33) 土師器(坏・碗・小皿・托・甕・高坏) 2266点、須恵器(坏蓋・甕・風字硯) 細片117点、黒色土器A類碗70点、同B類碗53点、青磁片6点、白磁片2点、鉄鏃1点、平瓦14点、丸瓦11点、瓦細片23点、土錘1点、焼土塊35点、埴埴1点、管玉1点などが出土。30は約半分が残存する碧玉製管玉。31は土師器の坏。底部はヘラ切り後未調整。32は土師器の托。33は雁又状の鉄族。

S D 55 出土遺物 (第58図34・35) 土師器(坏・碗・大碗・皿・小皿) 細片611点、須恵器甕破片49点、黒色土器A類碗31点、同B類碗13点、青磁細片4点、白磁細片1点、緑釉陶器片1点、平瓦6点、丸瓦5点、瓦細片1点、焼土塊4点、土錘1点が出土。34は須恵器の甕の胴部片。外面は格子文叩き、内面には直線叩き文の上に、車輪叩き文が施される。35は緑釉陶器の細片資料である。

S D 6 出土遺物 (第59図36～38) 改修後の溝埋土から土師器(坏・碗・皿・脚台付皿・鉢) 183点、須恵器(坏・坏蓋・甕) 7点、焼土塊2点が出土。改修前の溝埋土からは土師器細片9点が出土したのみである。36～39に図示した土器は、全て改修後の溝埋土中から出土した土師器である。36は托。37は脚台付皿の脚部。外面に墨痕があり、内底部中央には焼成後に直径1cmの穴が穿たれている。38は同じく脚台付皿の皿部片。37とは別個体である。外面に「三井」の墨書がある。

S D 7 出土遺物 (第59図39・40) 土師器(坏・坏蓋・碗・鉢・甕) 83点、須恵器(坏・甕) 細片4点が出土。39は土師器の嘴状の口縁を有する坏蓋。41は削り出し高台を持つ土師器の碗。

S B 10 出土遺物 (第59図41・42) 土師器(坏・碗・皿・甕) 17点、須恵器甕胴部片1点が出土。41は坏。42は土師器の皿。41・42共に底部と体部の境は、ヘラケズリによって面取りがなされている。

S K 13 出土遺物 (第59図43・44) 土師器(碗・小皿・甕・鉢) 13点、須恵器甕胴部片1点、縄目叩き文平瓦片1点が出土。

S K 18 出土遺物 (第59図45) 土師器坏1点、同細片7点、須恵器細片1点が出土。

S K 21 出土遺物 (第59図46) 土師器皿1点、同細片4点が出土。

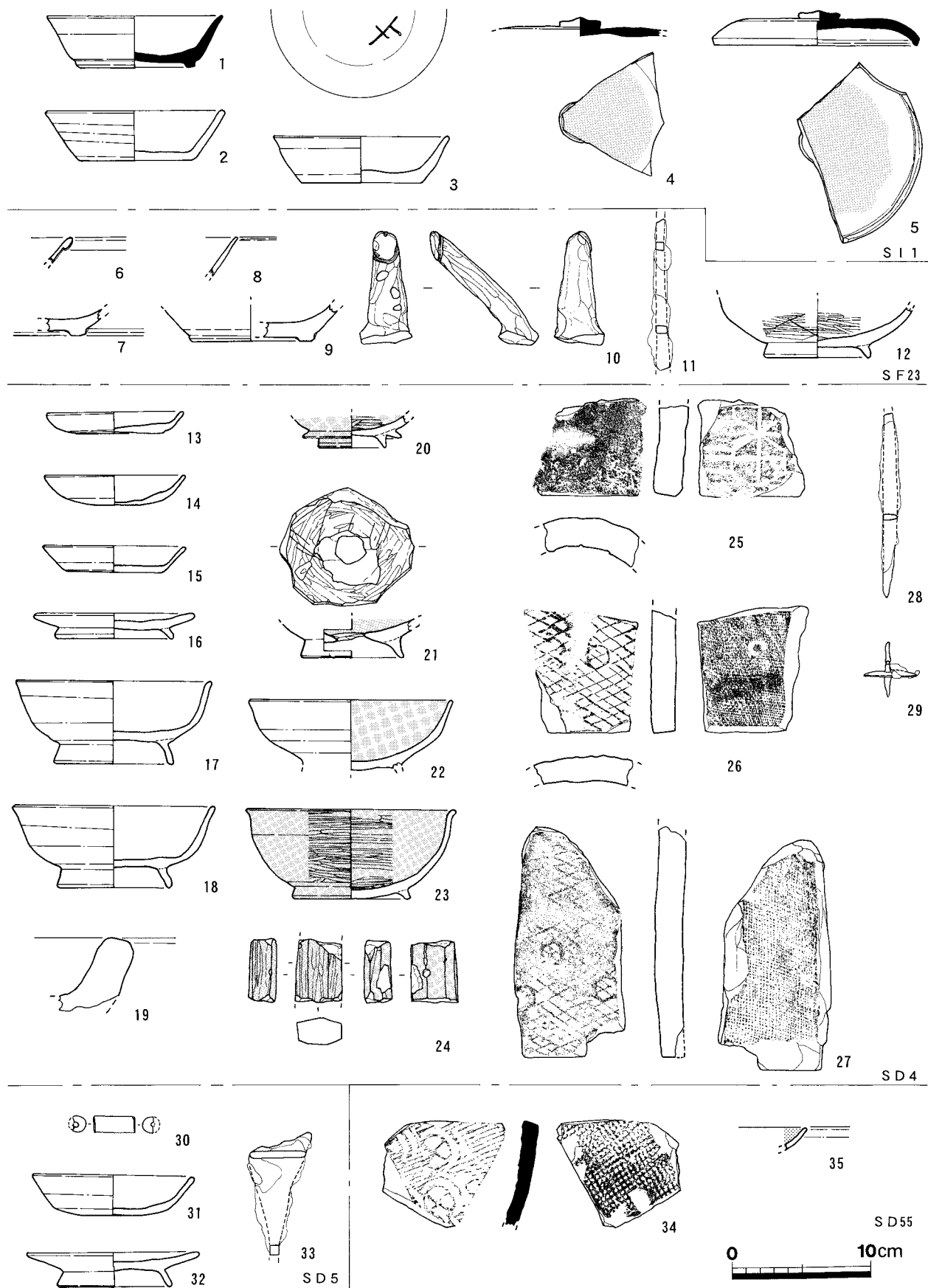
S K 30 出土遺物 (第59図47) 土師器碗片3点、同細片108点、須恵器甕片6点、黒色土器B類碗1点、同細片2点、丸瓦片2点、焼土塊2点が出土。

S K 33 出土遺物 (第59図48) 土師器碗1点、同細片25点、須恵器甕片2点、黒色土器A類碗1点、同B類碗1点、斜格子叩き文瓦細片1点が出土。

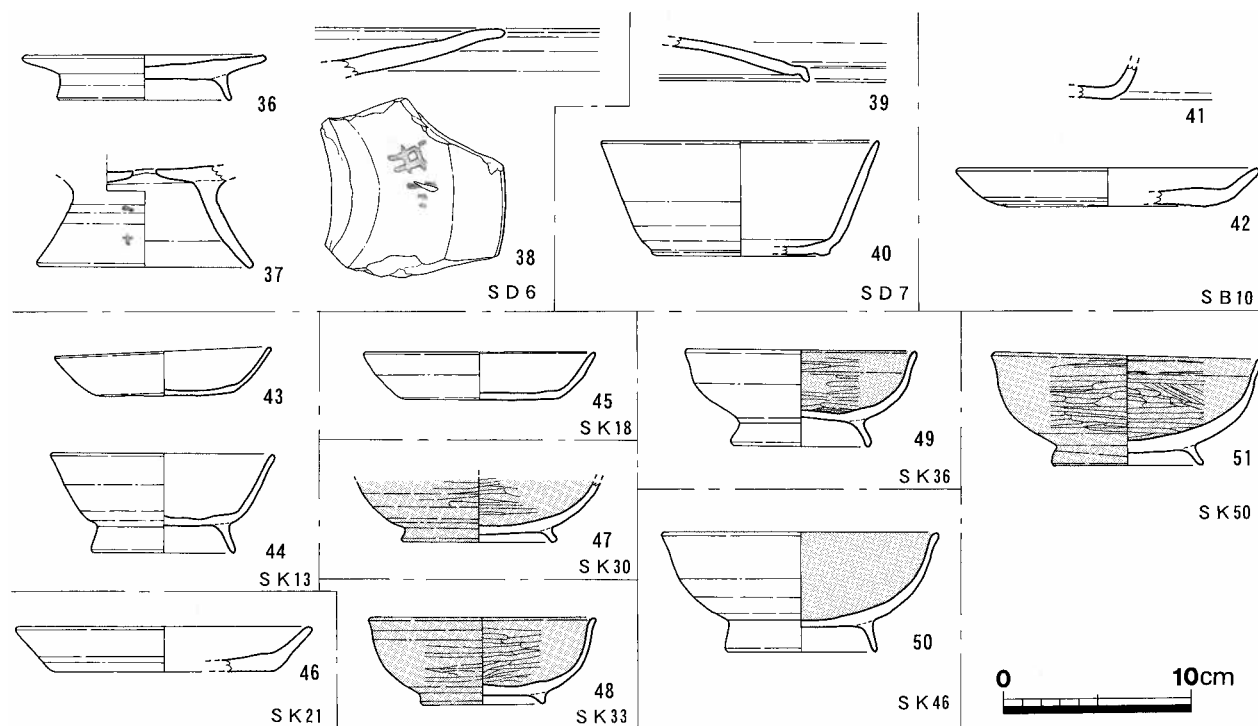
S K 36 出土遺物 (第59図49) 土師器(坏・碗) 細片45点、須恵器甕片4点、黒色土器A類碗3点、同B類碗2点が出土。

S K 46 出土土器 (第59図50) 土師器(坏・小皿・托) 細片72点、須恵器甕片7点、黒色土器A類碗片10点、同B類碗片3点、縄目文平瓦1点、焼土塊2点が出土。

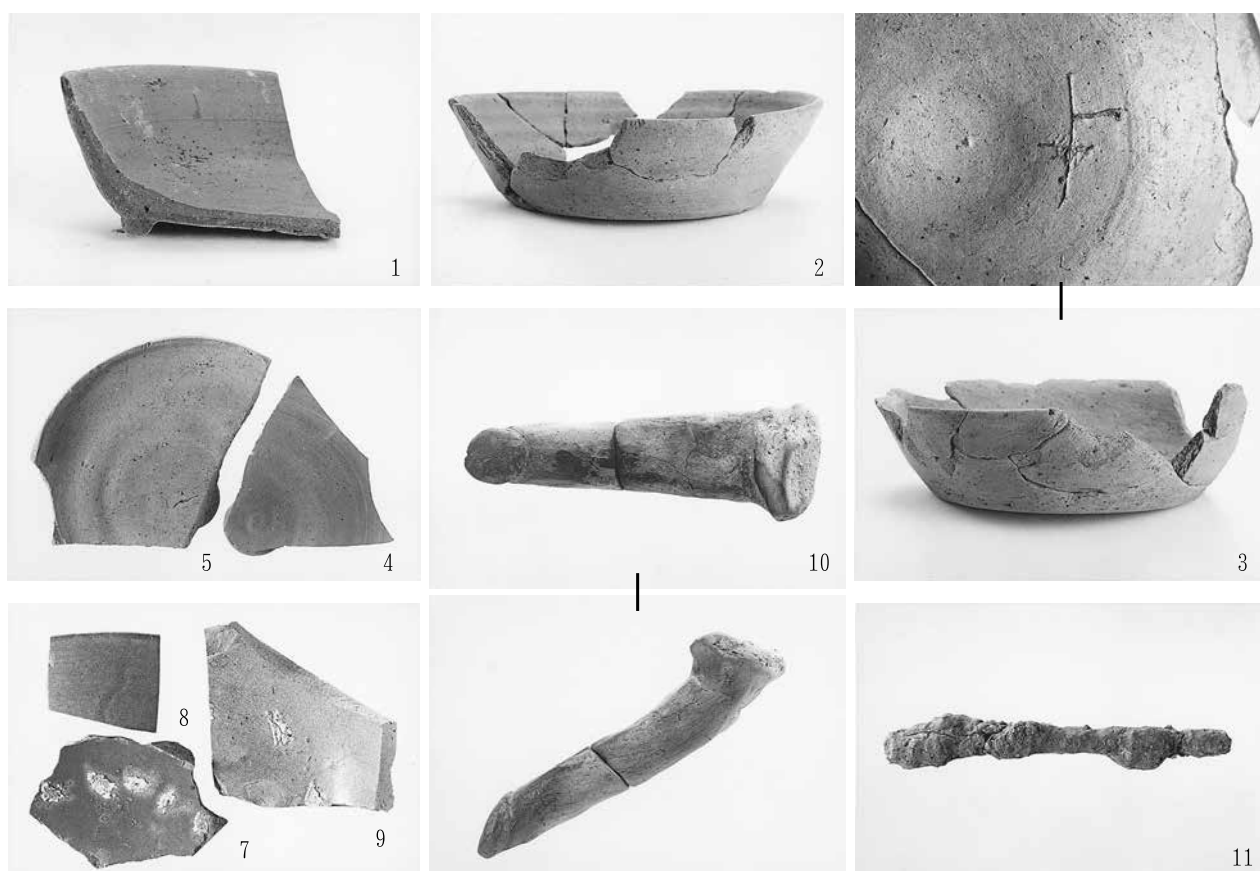
S K 50 出土土器 (第59図51) 土師器(坏・碗) 片15点、須恵器壺細片1点、黒色土器A類細片1点、同B類碗1点が出土。



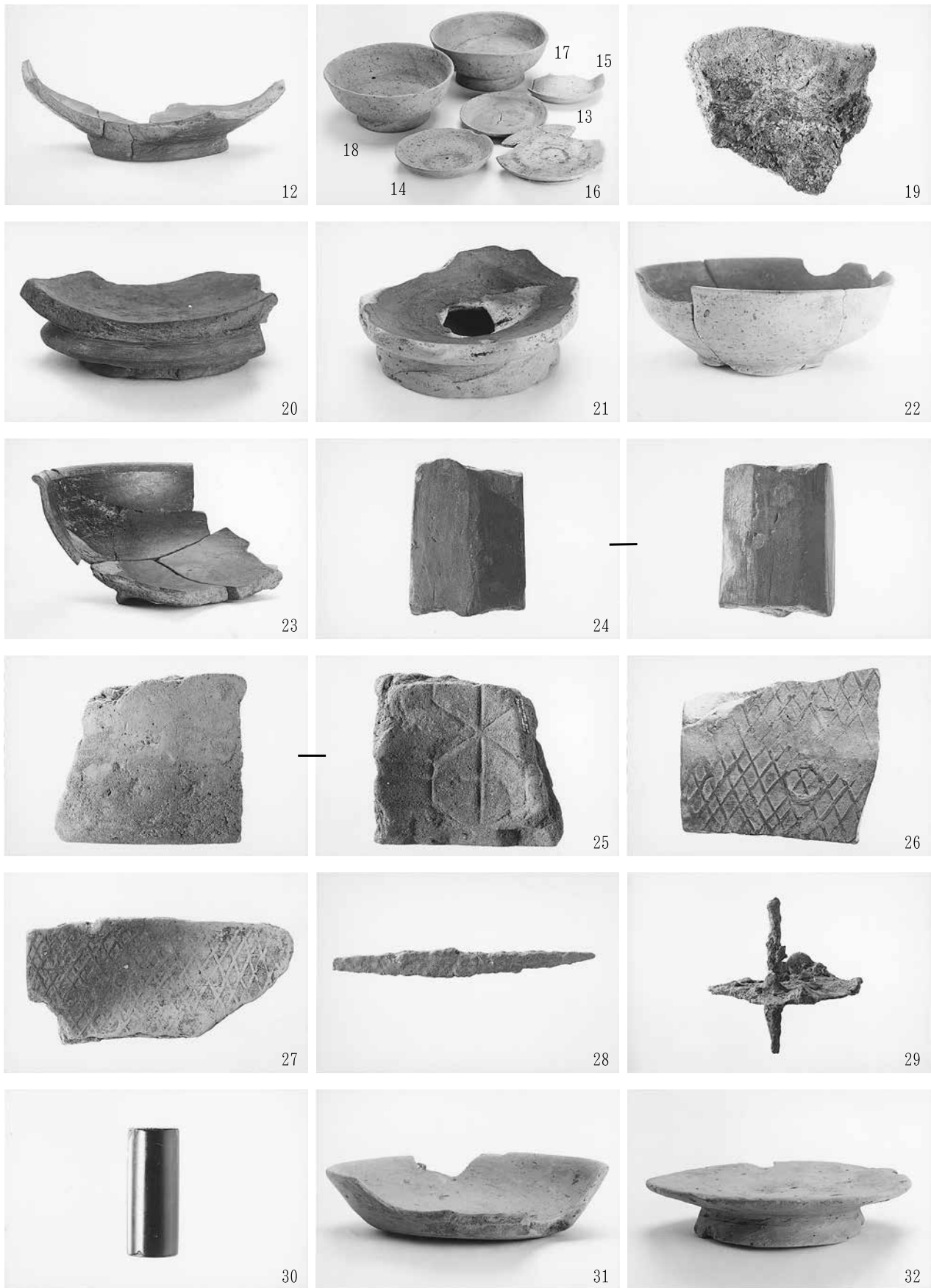
第58図 第192次調査出土遺物実測図① (1/4)



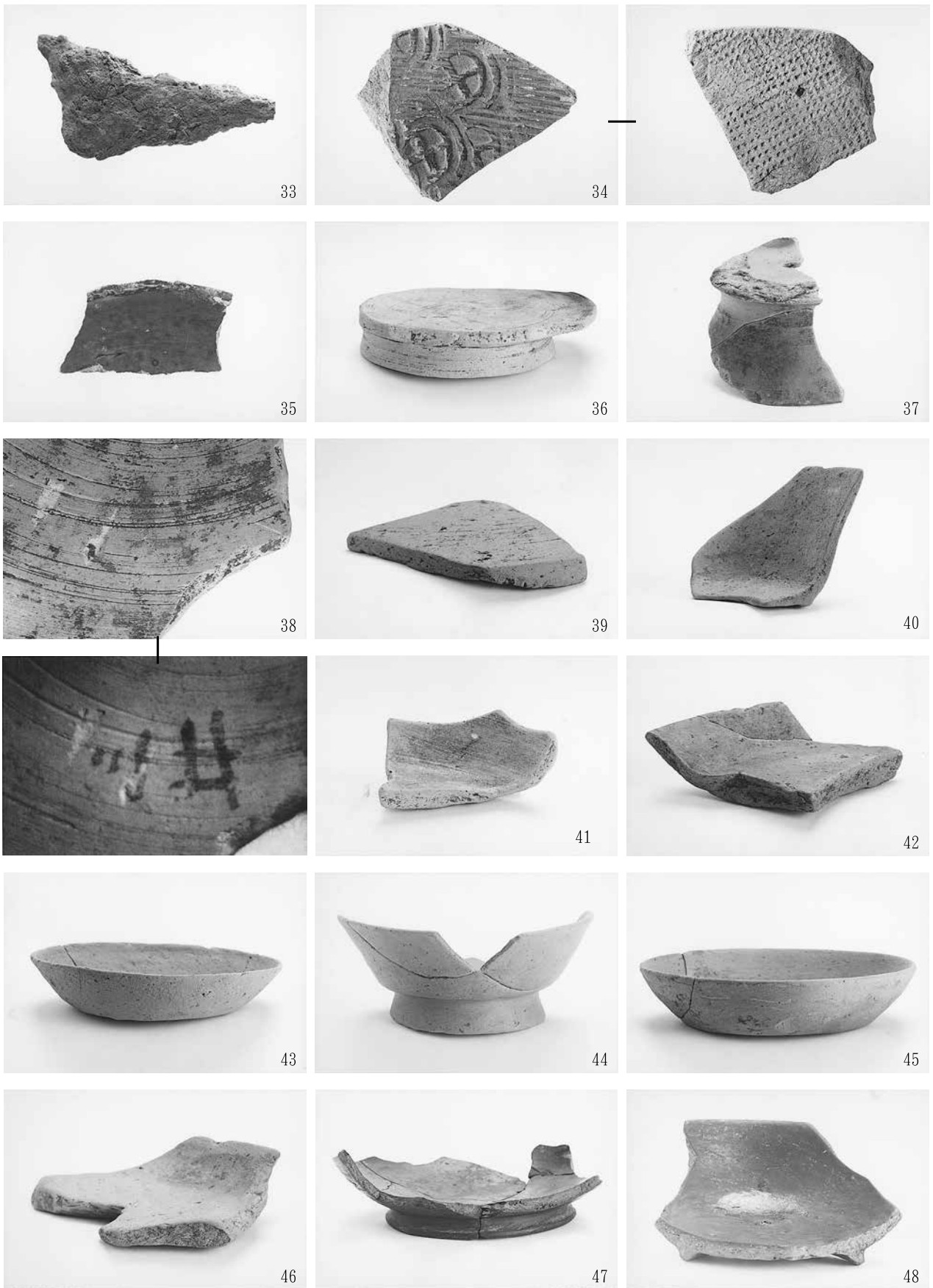
第59図 第192次調査出土遺物実測図② (1/4)



第60図 第192次調査出土遺物 (写真①)



第61図 第192次調査出土遺物（写真②）



第62図 第192次調査出土遺物（写真③）



第63図 第192次調査出土遺物（写真④）

第 6 表 第192次調査出土遺物観察表①

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整 ・ 装 飾		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面 (凸面)	内 面 (凹面)			
第58図 1	S I 1	須恵器	坏	[12.6]	[8.5]	3.7	灰	灰	ナデ	ナデ	砂粒		200316 -00005
第58図 2	S I 1	土師器	坏	(12.7)	8.1	3.5	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		200316 -00002
第58図 3	S I 1	土師器	坏	(12.6)	8.6	3.3	橙	橙	ナデ	ナデ	微砂粒 赤色粒子	内底部に ヘラ記号?	200316 -00001
第58図 4	S I 1	須恵器	坏蓋			1.5	灰	灰	ナデ ケズリ	ナデ	砂粒	転用硯	200316 -00004
第58図 5	S I 1	須恵器	坏蓋	[14.4]		2.5	灰	灰	ナデ ケズリ	ナデ	砂粒	転用硯	200316 -00003
第58図 6	S F 23	白磁	碗			(1.9)	灰白	灰白	ナデ	ナデ	精良		200316 -00010
第58図 7	S F 23	青磁	碗			(2.0)	灰白	灰オリーブ	ナデ	ナデ	微砂粒		200316 -00008
第58図 8	S F 23	青磁	碗			(2.8)	灰白	灰オリーブ	ナデ	ナデ	微砂粒		200316 -00007
第58図 9	S F 23	青磁	碗		[9.0]	(3.1)	浅黄橙	浅黄	ナデ	ナデ	細砂粒		200316 -00009
第58図 10	S F 23	黒色土器	把手	(11.9)	2.3	1.7	黒 浅黄橙		ナデ		砂粒 赤色粒子	A類把手付 碗の一部	200316 -00006
第58図 11	S F 23	鉄製品	釘カ	(10.8)	0.8	0.5							200316 -00011
第58図 12	S F 23	黒色土器	碗		7.6	(4.5)	黒	黒	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	細砂粒	B類	200316 -00012
第58図 13	S D 4	土師器	小皿	9.8	7.3	1.4	橙	橙	ナデ	ナデ	微砂粒 赤色粒子		200316 -00016
第58図 14	S D 4	土師器	小皿	10.1	7.3	2.2	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ナデ	ナデ	砂粒 赤色粒子		200316 -00015
第58図 15	S D 4	土師器	小皿	10.2	7.0	1.8	にぶい 黄橙	橙	ナデ	ナデ	微砂粒 赤色粒子		200316 -00017
第58図 16	S D 4	土師器	托	11.5	8.3	1.9	橙	橙	ナデ	ナデ	微砂粒 赤色粒子		200316 -00029
第58図 17	S D 4	土師器	碗	13.9	8.5	5.8	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		20316 -00014
第58図 18	S D 4	土師器	碗	14.3	8.2	5.8	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		200316 -00013
第58図 19	S D 4	土製品	埴塼			(4.1)	灰	浅黄	ナデ	ナデ	砂粒		200316 -00026
第58図 20	S D 4	黒色土器	碗		4.9	(1.2)	橙	にぶい 赤褐	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	微砂粒	B類	200316 -00023
第58図 21	S D 4	黒色土器	碗		7.3	(2.8)	橙	黒	ナデ	ナデ	微砂粒 赤色粒子	A類、底部 に穿孔	200316 -00022
第58図 22	S D 4	黒色土器	碗	(14.3)	(7.2)	(5.2)	橙	黒	ナデ	ナデ ミガキ	細砂粒 赤色粒子	A類	200316 -00021
第58図 23	S D 4	黒色土器	碗	15.0	8.4	6.3	黒	黒	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	微砂粒	B類	200316 -00024

第7表 第192次調査出土遺物観察表②

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整 ・ 装 飾		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面 (凸面)	内 面 (凹面)			
第58図 24	S D 4	黒色土器	不明	(4.6)	3.4	1.2	黒	黒	ケズリ ミガキ			B類	200316 -00025
第58図 25	S D 4	瓦	丸瓦	(6.9)	7.5	2.1	暗灰	暗灰	縄目文叩き スリ消し	布目スリ消し 幾何学文	細砂粒		200316 -00023
第58図 26	S D 4	瓦	丸瓦	(9.9)	(7.9)	1.8	暗灰	暗灰	斜格子文叩き	布目	砂粒	凸面に丸文	200316 -00019
第58図 27	S D 4	瓦	丸瓦	(16.5)	(7.8)	2.0	灰	灰	斜格子文叩き	布目	砂粒	凸面に丸文	200316 -00018
第58図 28	S D 4	鉄器	刀子	(13.2)	1.0	0.4							200316 -00028
第58図 29	S D 4	鉄器	不明	(3.9)									200316 -00027
第58図 30	S D 5	碧玉	管玉	3.0	1.2	1.0							200316 -00032
第58図 31	S D 5	土師器	坏	11.6	8.1	2.7	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ナデ	ナデ	細砂粒・金雲 母・赤色粒子		200316 -00030
第58図 32	S D 5	土師器	托	12.2	8.0	2.5	橙	橙	ナデ	ナデ	微砂粒 赤色粒子		200316 -00031
第58図 33	S D 5	鉄器	鏝	(8.8)		0.6						雁又形	200316 -00035
第58図 34	S D 55	須恵器	甕			(7.4)	灰	灰白	格子文叩き	直線文・ 車輪文叩き	細砂粒		200316 -00033
第58図 35	S D 55	緑釉陶器	碗			(1.7)	暗緑	暗緑	ナデ	ナデ	精良		200316 -00034
第59図 36	S D 6	土師器	托	12.8	9.2	2.3	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ナデ	ナデ	細砂粒		200316 -00036
第59図 37	S D 6	土師器	脚付皿		[11.4]	(4.6)	橙	橙	ナデ	ナデ	微砂粒	外面に墨痕 底部穿孔	200316 -00051
第59図 38	S D 6	土師器	脚付皿			(2.5)	橙	にぶい 黄橙	ナデ ケズリ	ナデ	微砂粒	外面に「三 井」墨書	200316 -00050
第59図 39	S D 7	土師器	坏蓋			(2.3)	橙	橙	ナデ ケズリ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		200316 -00038
第59図 40	S D 7	土師器	碗	[14.6]	[9.4]	6.1	橙	橙	ナデ ケズリ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		200316 -00037
第59図 41	S B 10 P 1	須恵器	坏			(2.2)	灰白	灰白	ナデ ケズリ	ナデ	微砂粒		200316 -00039
第59図 42	S B 10 P 4	土師器	皿	[16.0]	[10.4]	1.9	橙	橙	ナデ ケズリ	ナデ	微砂粒 赤色粒子		200316 -00040
第59図 43	S K 13	土師器	坏	11.5	7.4	2.4	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		200316 -00041
第59図 44	S K 13	土師器	碗	[12.2]	[7.6]	5.1	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		20316 -00042
第59図 45	S K 18	土師器	坏	11.2	8.4	2.5	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒		200316 -00043
第59図 46	S K 21	土師器	皿	[15.6]	[11.4]	2.4	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒 赤色粒子		200316 -00044
第59図 47	S K 30	黒色土器	碗		[8.2]	(3.5)	黒	黒	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	微砂粒	B類	200316 -00045
第59図 48	S K 33	黒色土器	碗	[12.0]	[6.6]	4.7	黒褐色	黒	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	微砂粒 赤色粒子	B類	200316 -00046
第59図 49	S K 36	黒色土器	碗	[12.2]	7.4	5.2	橙	黒	ナデ ケズリ	ナデ ミガキ	細砂粒 赤色粒子	A類	200316 -00047
第59図 50	S K 46	黒色土器	碗	[14.6]	8.0	6.3	黒	黒	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	細砂粒 赤色粒子	A類	200316 -00048
第59図 51	S K 50	黒色土器	碗	14.3	8.1	5.8	黒	黒	ケズリ ミガキ	ケズリ ミガキ	細砂粒	B類	200316 -00049

* 法量の単位はcm、() 内の数値は現存値、[] 内の数値は復元値を示す。

胎土は、0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒とした。

4. 小結

第192次調査では、竪穴住居 1 軒、掘立柱建物 2 棟、道路状遺構 1、溝 6 条、土坑 44 基を検出した。

これらの主要遺構中で最も先行する遺構は、竪穴住居 S I 1 で、出土遺物から時期は 8 世紀中葉に比定される。この時期に調査地周辺は竪穴住居を中心に掘立柱建物や銅工房が余り重複することなく展開し、今回検出した 1 軒の他、未調査の東側隣接地においても試掘調査の際に竪穴住居を 1 軒検出している。竪穴住居からは、日常生活に使用される土器の他、転用硯や墨書土器、鉄・銅滓、フイゴ羽口が出土するなど、通常の集落とは異なる様相が見られる。今回の S I 1 から須恵器の坏蓋転用硯 2 点が出土している。

調査地付近が画期を迎えるのは、9 世紀から 10 世紀代の頃で、その時期に属する遺構群の中では、北調査区の北西部を南北走行する溝 S D 7 が先行し、9 世紀前半代～中葉と考えられる。

調査地北側に推定国司館遺構群が展開していた 9 世紀後半代になると調査地内も遺構が増加し、今回調査の主目的であった道路状遺構 165 S F 23 と、それに伴う東側溝 S D 4 と西側溝 S D 5 は、国司館の造営に伴い造られたと考えられる遺構である。165 S F 23 はその位置関係から、北側隣接地で行った第 165 次調査 S F 23 の南側延長部と判断され、合せて約 130 m 分の存在が判明したこととなる。

この道路は第 165 次調査地よりもさらに北側へ約 130 m 延びており、第 50 次調査の際に検出された東 第 64 図 165 S F 23 と旧湧水点方面を望む(北東から)西道路(推定西海道路線)との交差点へ達している。逆に調査地から南側については、第 64 図に掲げた写真に見られるとおり、165 S F 23 延長線上の正面に 2 階建ての住宅 4 軒があるが、その付近がかつては湧水点であり、調査地からは約 50 m 南西側の湧水点へ向かう道路であることが看取される。ちなみに、写真の住宅裏にある竹藪付近が、約 7 m の比高差を持つ水縄断層の断層崖で、この断層崖下には朝妻清水など湧水点が点在している。165 S F 23 延長線上の湧水点は埋められて久しいが、写真右側の樹木が繁茂した場所には今も湧水池が残されている。

S F 23 を検出した第 165 次調査の際には側溝の存在は不明であったが、今回 S D 4・5 を検出し、その存在が判明した。但し、後出する連続土坑群や S D 55 が掘り込まれ、本来の形状は僅かしか残されていないため、その規模などについては不明な点が多い。S D 7 よりも後出する南北溝 S D 6 も 165 S F 23 と同時期と見られ、S D 6 よりも西側に何らかの施設があり、その施設と道路を隔てる溝であった可能性も考えられる。また、南北棟掘立柱建物 S B 10・11 も 165 S F 23 に沿って建てられていることから、同時存在と推定され、調査地付近の 165 S F 23 の両側に国司館に関連する施設が存在していたと想定されよう。

165 S F 23 の下限は 10 世紀中～後半代にあり、その後、165 S F 23 と S D 4・5 を掘り込んだ多数の土坑が出現。さらにその後、S D 55 が掘られているが、連続土坑群や S D 55 は 10 世紀後半代～11 世紀初頭の時期に掘られている。S D 55 が埋没した後は、江戸時代に S D 8 が掘られるまで、長期間遺構の空白期が続いている。

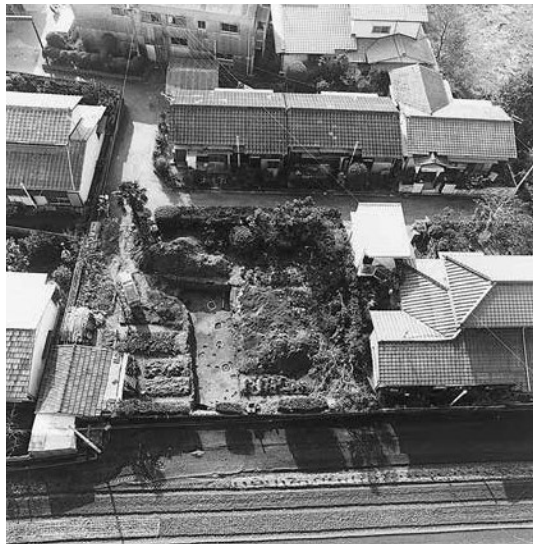
(水原)



V. 第194次調査

1. 調査に至る経過

本調査は、平成15年11月26日に、地権者の■■■■氏より、久留米市合川町天神木1340-2について、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の事前審査の依頼書が提出されたことに始まる。これを受けて、久留米市教育委員会文化財保護課では対象地北端部が筑後国府のⅠ期政庁、及びその前身官衙が存在した古宮地区との字境となる場所に所在し、隣接地を調査した第130・150・153次調査の成果から、その関連施設の存在が予想される旨を回答し、11月28日には現地で人力による試掘を行ったところ、現地表から遺構検出面までの深さは約120cmに達することが判明。共同住宅の建物基礎は土盛りの範囲内に収まり、遺構には直接影響を及ぼさないものの、筑後国府域の中でも重要な地区であることから以後は協議を進め、同年12月中旬より確認調査を実施することで協議が成立し、調査を開始する運びとなった。



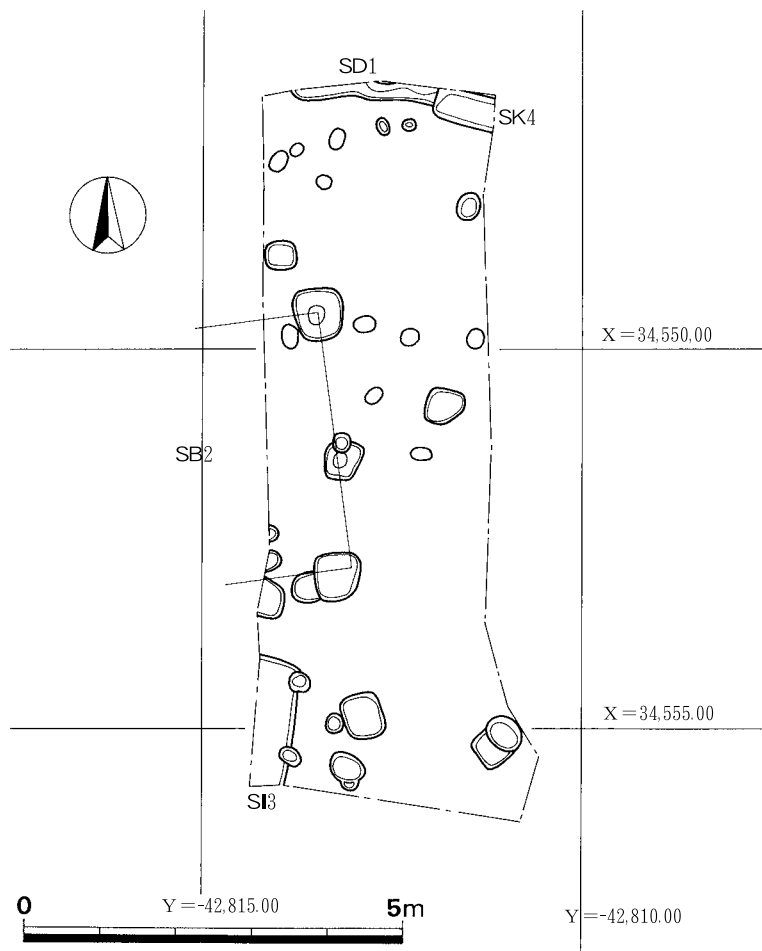
第65図 調査区設定状況（北から）



第66図 第194次調査全景（南東から）

2. 調査の方法と経過

対象地では古宮地区官衙の南限となる築地の外溝の存在が予想されたため、対象地の中央部に東西4m×南北9mの調査トレンチを設定して調査した。調査は平成15年12月16日に重機による表土剥ぎを開始。



第67図 第194次調査遺構配置図 (1/100)

当日午後より遺構検出作業を行う。途中、浦山古墳群第4次調査の補助のため中断したが、22日より調査を再開し、掘下げを開始。掘下げは当日中に終了し、実測作業も開始。24日には遺構清掃を行い気球による全景写真や個別写真の撮影、実測作業を行う。午後には機材を撤収し、翌25日には重機と人力による埋め戻し作業を行い作業を終了した。対象面積350㎡のうち、調査面積は35㎡である。なお、写真記録はカラーリバーサル・モノクロ6×7で撮影し、測量データは遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて実測し、「カタタ3DC」に記録・保存されている。

3. 検出遺構と出土遺物

a. 検出遺構

調査地は現在75cm土盛りされており、それを除去すると厚さ30cmの旧耕作土、10cmの遺物を包含する暗褐色土を経て、黄色土の遺構検出面に達する。狭いトレンチ調査であったが、竪穴住居1軒、掘立柱建物1棟、溝1条、土坑1基、ピット25基を検出した。



第68図 SI3全景 (東から)

竪穴住居

SI3 (第68図) 調査区南西隅で検出。遺構の大半は調査区外にあるが、その北東隅部分を南北1.6m分、東西60cm分検出した。北側を床面より約10cm高く掘り残し、ベッド状遺構とするが、その部分のみ床面の硬化が認められる。炭化物が多量出土したが、焼土など火災の痕跡は認められない。

掘立柱建物

SB2 調査区中央部において、一辺50～70cmの平面形が隅丸方形を呈する柱穴を2間分検出したもので、柱間寸法は北から185cm+155cmを測る。検出

状況から東西棟建物の東梁間部分の柱穴と推定されるが、遺構分布の状況からこの建物はさらに南側へ延びていることも考えられる。



第69図 SD 1、SK 4 全景（西から）

溝

SD 1（第69図） 調査区北端部で検出。遺構の大半は調査区外にあるが、幅20cm以上の東西溝を約2.6m分検出したものである。埋土は暗褐色土に細かい黄色ブロック土が多量混入した一括埋土。

土坑

SK 4（第69図） SD 1 東部を切りこみ、東側調査区外へ延びる土坑。長軸80cm分を検出。幅38cm前後、深さ25cmを測る。平面形は長方形を呈する。壁面は直に立ち上がり、底面は平坦となっている。その形状から土壇墓と考えられる遺構である。

b. 出土遺物

全部で80点の遺物が出土した。その内弥生土器が最も多い72点あり、他に土師器8点、須恵器1点があるに過ぎない。SI 3からは後期の特徴を持つ弥生土器13点が出土。SD 1からは弥生土器7点と、土師器細片1点が出土。SB 2は弥生土器16点と土師器2点が出土。SK 4は弥生土器細片2点が出土したのみ。これらの遺物はいずれも細片で、図示するには至らない。

4. 小結

今回検出した遺構のうち、まず注目されるのは、東西溝SD 1である。この溝はそのごく一部を検出したのみであるが、その位置関係からI期政庁区画の南限となる築地外溝の一部と考えられる。

東西棟建物と判断した掘立柱建物SB 2はその位置関係、柱穴の並びや大きさが不揃いである点などを考慮するとI期政庁関連遺構とするよりも前身官衙の建物群との共通点が多く、前身官衙に伴う建物である可能性が考えられる。なお、SB 2の南端柱穴の南側延長線上にも柱穴と考えられる隅丸方形のピットがあり、このピットがSB 2に伴う柱穴であるならば、SB 2は梁間3間の東西棟建物、もしくは桁行3間以上の南北棟であることも考えられるが、そのピットが3基のSB 2柱穴よりも半分の深さしかなく、埋土の色調も柱穴が褐色土中に黄色土が多量混入する土であることに對し、ピットは黄色土中に黒色土が多量混入した土と違いが見られることなどを勘案し、SB 2は梁間2間と判断した。

以上、今回の調査では狭小なトレンチによる調査であったが、調査前に予想されたI期政庁関連遺構の一部と前身官衙関連遺構と考えられる遺構を検出。北側の古宮地区と南側の葉山地区の遺構群に挟まれ、重要な遺構が存在することが考えられる地区であるにも関わらず、未だ6地点しか調査例がないため、空白が多かった天神木地区の状況について、僅かながらも伺い得る成果が得られた。（水原）

VI. 第195次調査

1. 調査に至る経過

本調査は平成16年3月26日、地権者■■■■氏より、合川町字東1090-1について、専用住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。これを受けて3月31日に対象地南部に東西トレンチを設定し、試掘調査を行ったところ、現地表から60cm掘下げた場所で溝状遺構などを検出。更に建物基礎として杭打ちがなされることから発掘調査が必要な旨を回答。以後は協議を進め、国庫補助事業として、5月に発掘調査を行うことで合意した。

これを受けて4月9日には法57条2項による届出、4月30日には調査依頼が提出され、5月11日より現地における発掘調査を開始する運びとなった。

2. 調査の方法と経過

協議の成果に基づき、対象地北半部の建物建設部分に南北9m、東西17mの東西トレンチを設定。5月11日より重機による表土剥ぎと機材搬入を行った。12日には遺構の検出作業と測量を行い、18日からは遺構の掘下げを開始。以後は掘下げとトータルステーションによる実測作業を併行して行なう。期間中は雨天の日が多く、さらに現場の排水の悪さから度々トレンチが完全に水没する状態となり、排水作業に時間を費やした。26日に遺構掘下げを終了し、27日は午前中に遺構の清掃と写真撮影、午後は実測作業を行う。28日には重機による遺構の埋め戻し作業を行ったが、庭木などがあることから重機では埋め戻せなかった部分や、激しい雨のため流出した排土によって埋まった排水溝などの復旧作業を6月1日と2日に行い、現地における作業を終了した。対象面積808㎡の内、169㎡を調査している。



第70図 調査風景（南西から）

記録は、写真をカラーリバーサル・モノクロ6×7、モノクロ35mmで撮影し、遺構実測は遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」を用いて行い、適宜個別遺構実測図（1/10・1/20）を作成した。

整理作業は、6月1日から同月30日の期間に実施した。

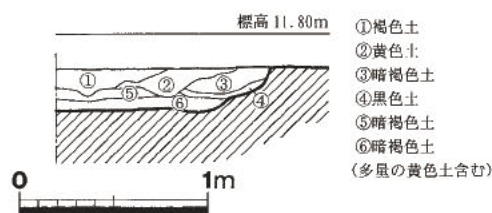
3. 検出遺構と出土遺物

対象地は削平を受けており、現地表から5～20cm前後の盛土を除去するとすぐに明褐色土の地山となるが、調査区北西部に至っては遺構検出面が露出した状態であった。遺構検出面は北西側から南東側へ向かって緩やかに傾斜し、その上面において溝1条、土坑2基、ピット28基を検出した。

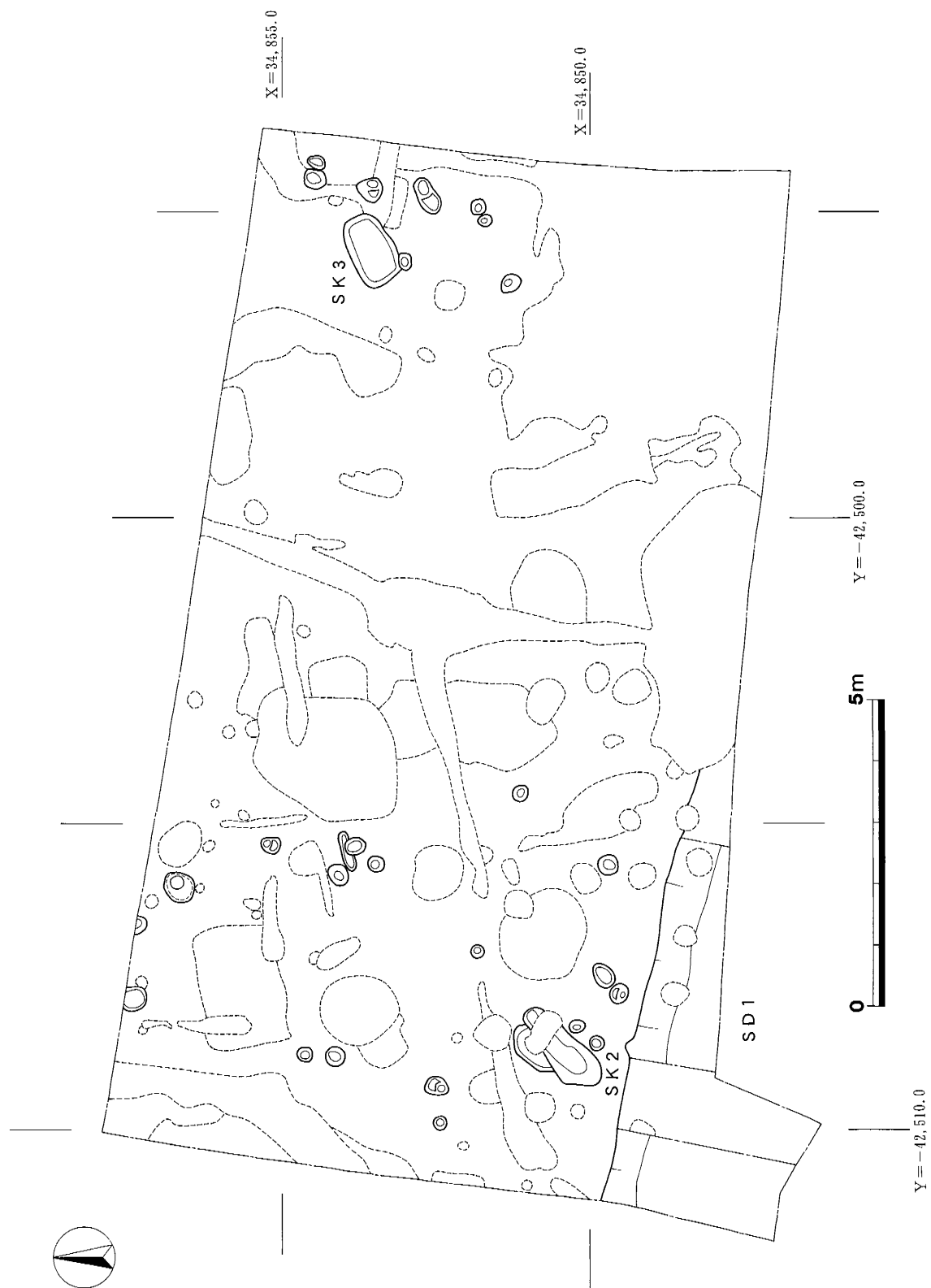
a. 検出遺構

溝

SD1（第71・75・76図） 調査区南端部を東西走行する溝。遺構の大半は調査区外にあるため、調査区を出来る限り拡張したが、南端部は検出出来ていない。上端幅が2.8m以上、底面幅2.3m以上の溝を7.5m分検出し、深さは40cm。試



第71図 SD1土層断面図（1/40）



第72図 第195次調査遺構配置図 (1/100)



第73図 第195次調査区全景（北東から）



第74図 第195次調査区全景（南西から）

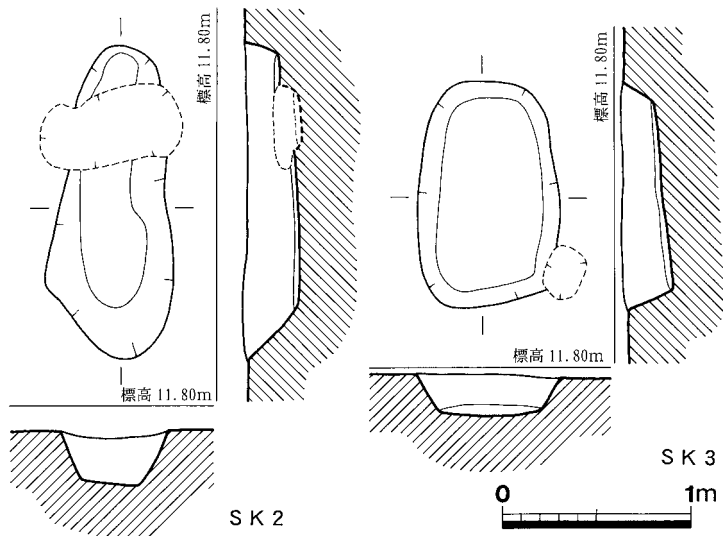


第75図 SD 1 土層断面状況（北東から）



第76図 SD 1 全景（北西から）

掘の際に溝状遺構を検出しており、この溝の東側は調査区外で南へ折れ、約5m南側に設定した試掘トレンチ検出の溝状遺構へ向かって延びていくことが考えられる。底面は平坦。土層状況から3～4回掘り直され、長期間存在したと考えられる。



第77図 SK 2・3 実測図（1/40）

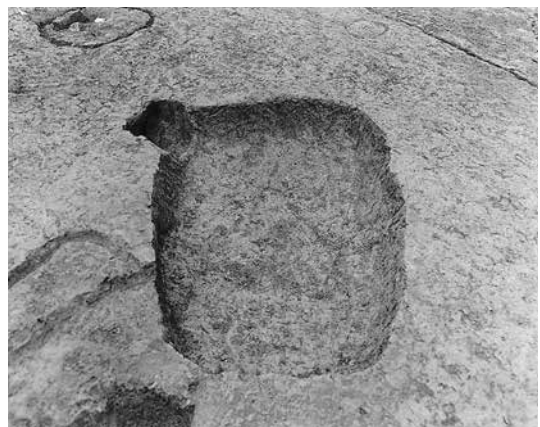
土坑

SK 2（第77・78図） 調査区南西部で検出。北側が後世の攪乱によって一部失われているが、平面形は長軸長1.65m、短軸幅40～70cmを測る楕円形を呈する。深さは17～30cmを測り、北東側から南西側へ向かって緩やかに傾斜している。

その形状から土壙墓である可能性が高いが、遺物は全く出土していない。埋土は暗褐色土に黄色ブロック土が少量混入した一括埋土である。

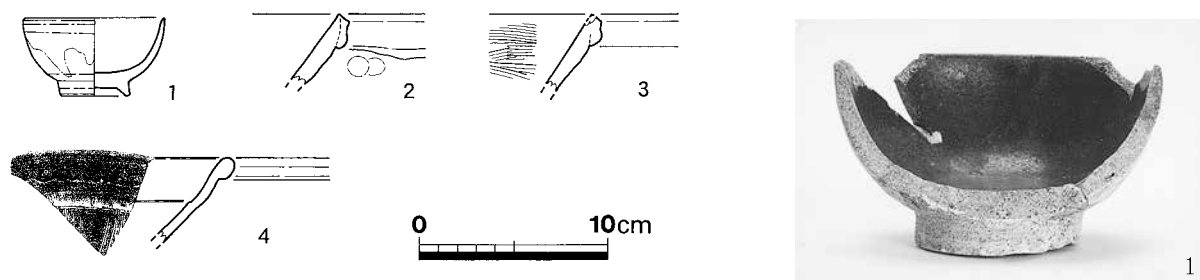


第78図 SK 2（北東から）



第79図 SK 3（北東から）

SK 3（第77・79図） 調査区東部で検出。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸75cmを測る。深さは20cm。底面は平坦。埋土は暗褐色土による一括埋土である。遺物は全く出土していない。



第80図 第195次調査SD 1 出土遺物実測図 (1/4)



第81図 第195次調査SD 1 出土遺物 (写真)

b. 出土遺物

遺物は、SD 1、SK 2 の他、9基のピットから、土師器、須恵器、黒色土器A・B類、龍泉窯系青磁、土師質土器（土鍋・すり鉢・こね鉢・羽釜）、国産陶磁器の272点が出土したが、細片が多く、図示し得たものは少ない。

SD 1 出土遺物（第80・81図） 土師器54点、須恵器3点、黒色土器A類2点、土鍋3点、こね鉢1点、羽釜1点、土鈴1点、肥前系染付磁器など国産陶磁器10点の75点が出土。1は内面全体と外面の上半分のみ飴釉を掛けた肥前系陶器の碗。2・3は共に玉縁口縁の土鍋。4は口縁部に暗褐色の釉を掛けたすり鉢片である。

SK 2 出土遺物は、回転ヘラ切り後未調整の土師器の坏、底部細片1点が出土したのみである。

4. 小結

今回の調査地は、既に遺構検出面が露出するほどの削平を受けていることもあるため攪乱が多く、検出された遺構は、溝1条、土坑2基、ピット28基に過ぎない。

東西溝SD 1は、その一部を検出したのみであるが、上端幅2.8m以上と大規模な溝である。この溝は3～4回改修されながら長期間使用されたと考えられ、遺物は平安時代の土師器の坏・碗細片各1点、黒色土器の細片2点を除けば、室町時代～江戸時代の遺物が主体であるが、最も新しい遺物は図示した陶器や、細片資料のため図示していないが染付磁器細片など18世紀前半代の肥前系陶磁器であり、下限はその頃と考えられる。SD 1は試掘トレンチの状況を見るとそのまま東へ延びるのではなく、調査区外ですぐ南へ折れて南側へ延びている可能性が高い。また、溝には水が流れた痕跡はないことから、用水路ではなく、何らかの区画施設と考えられよう。

SK 2はその形状や出土遺物から、平安時代の土墳墓と考えられる。SK 3については、出土遺物が全くないため時期は不明である。

（水原）

VII. 第196次調査

1. 調査に至る経過

本調査のきっかけは、平成16年3月19日付で、地権者の■■■■氏より合川町字田代1190-1、-3の一部について、宅地造成に伴う埋蔵文化財包蔵地の事前審査の依頼が提出されたことである。これを受けて試掘調査を実施したところ、良好な状態で遺構が残存していることが判明した。対象地を含む田代地区の北半部は、前身官衙・I期国庁が所在する古宮地区の東に隣接し、約一町方格の地割が残る。当該地区での調査例は少なく、対象地の南西隅部で第166・174次調査が実施されたのみであり、その実態が把握できていない。このため、開発に際しても可能な限り遺構を保護する観点から、遺構の広がりや深さなどの情報を得るために、同年6月中旬より確認調査を実施することで協議が成立した。調査期間は、平成16年6月17日～同年7月16日までで、調査面積は322㎡である。

2. 調査の概要

今回の調査は確認調査のため、ほとんどの遺構は平面確認に止めている。検出した遺構は、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての堅穴住居9軒・掘立柱建物1棟、土坑2基、平安時代～中世頃の溝3条などである。

うち、掘り下げを行ったのは、堅穴住居2軒と溝4条である。最も大きい堅穴住居S I 1は長方形プランで、長さ7.2m以上（推定約8～9m）、幅約5.5mの規模を測る。西辺と南辺にベッド状遺構が見られる。主柱穴は2本と考えられ、中央には炉があり、東壁面中央部に屋内土坑を有する。炉と屋内土坑はやや位置をずらして造り替えられた痕跡が認められる。主柱穴からは幾重にも折り重なった状態で土器が出土しており、住居を解体し柱を抜き取った後に、意図的にその穴へ充填されたものと思われる。また、住居跡覆土中からも土器が多量に出土した。



第82図 調査区全景（北上空から）

東西方向の溝は2条あるが、切り合いは不明である。植木の攪乱があるために西側の延長が不明である。但し、南方へL字形に屈折する溝を検出しており、いずれかの延長部になるものと考えられる。2本の溝底部からは、縄目文叩きを有する平瓦や斜格子文叩きの丸・平瓦等が出土した。

調査区西端部で検出した南北溝は、南延長部を確認するためにトレンチを設定したが、溝南端部が西に屈曲し敷地内では結局確認できなかった。覆土中から、弥生土器・黒耀石片などの他、玉縁状の口縁を呈する土鍋等が出土した。

これらは現在整理中であり、各遺構や遺物についての詳細は平成17年度に実施する予定である。



（小澤） 第83図 S I 1掘り下げ風景（南から）

VIII. 第197次調査

1. 調査に至る経過

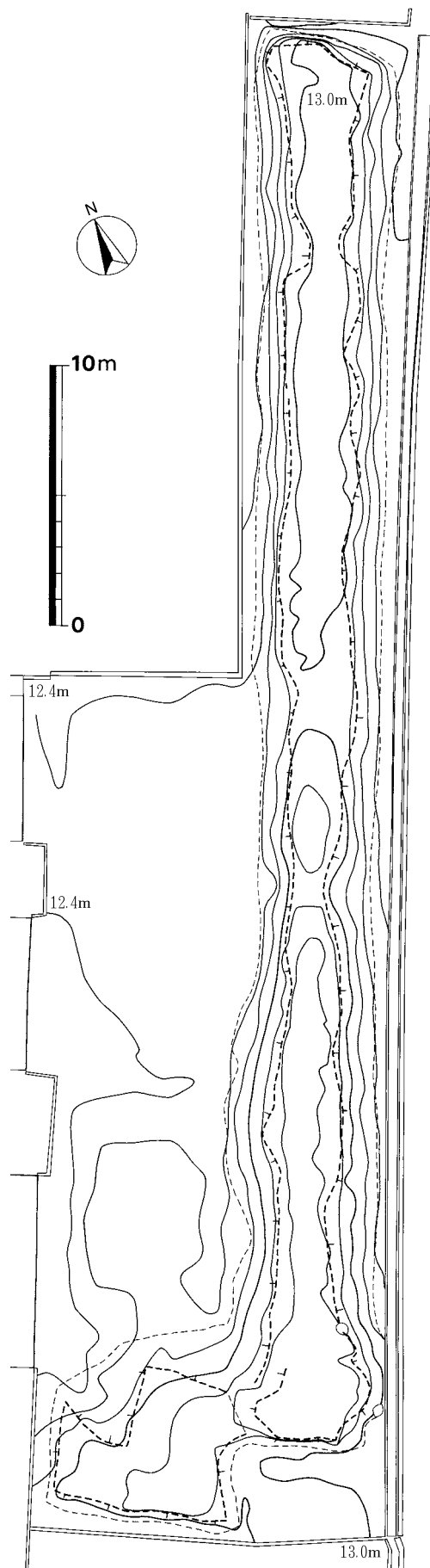
筑後国府跡が所在する合川町字立石には、俗称「長者の藪」と呼ばれる土塁の跡が残存していた。かつては、約1町程度の土塁が残存し、四方を画していたと言われるが、現在では合川町字立石386-1付近にその名残を留めるに過ぎない。周辺の調査により、この「立石土塁」は、第30・42次調査で検出された大溝を伴い、約1町四方規模を有することが確認されている。築造時期は中世後期に下ると推定されているが、第197次調査は、現代に残る貴重な文化財の記録を留める目的で、市事業として行った現況測量調査である。現地調査は地権者の高嶋次三氏の承諾を受け、平成16年7月20日から7月23日まで行った。遺構写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7により撮影した。

2. 調査の概要

測量調査は記録写真撮影後、平板を用いて行なった。測量調査の結果、土塁残存部は南北約55m、東西幅4～6m、高さ約1mであることが判明した。周辺の調査の結果、残存部は1町規模を有する区画の南東コーナー部にあたるものと考えられる。しかし、この土塁内部では、発掘調査はほとんど行われておらず、土塁内部の遺構状況は不明な点が多い。過去、土塁が取り壊される際には、その下部より古代の遺構が確認された情報もあり、今後、立石地区の調査が待たれるところである。（神保）



第84図 第197次調査区全景（南東から）



第85図 第197次調査測量図（1/250）

IX. 第199次調査

1. 調査に至る経過

第199次調査は、平成8年度に国史跡となり、平成15年度に追加指定となった国史跡筑後国府跡の「国司館地区」南限付近で行った平成16年度の重要遺跡確認調査である。本調査地点は、昭和55年度に第44次調査として、一部分の上面確認調査を行っており、「守館」墨書土器を出土した東西溝（SD1980）を検出している。従来、この東西溝を国司館南限と想定してきたが、今回は国司館南門の検出と、国司館前面付近の遺構状況の把握を目的として調査を行ったものである。現地調査は、平成16年10月12日～平成17年1月13日まで行った。



第86図 第199次調査西区全景（南上空から）

2. 調査の概要

調査は国司館中軸線と南限溝推定ラインが交差する部分が対象地の西半部にあった為、まず対象地の西約2/3に調査区を設定し、東側を廃土置き場とした。その後、西部分の調査が終了した後に反転を行い、東側約1/3の調査を行った。調査面積は400㎡である。地形は東側から南西方向へ傾斜しており、東側では現地表面直下の約-20cm、南西側では約-80cmで遺構検出面に至る。

検出遺構は、国司館南区画の南限を示す連続土坑状の溝（SD1980）、その内側の連続土坑6基、三間四面の四面底建物1棟、掘立柱建物2棟、柵列1条、竪穴建物3軒、土坑2基、ピット多数である。検出遺構の中で注目されるのは、SD1980が、中軸線上ではなく南東コーナーから2/3部分で幅約5m程度途切れ、土橋状を呈していることであった。この土橋部分は国司館南区画への出入り口として機能していたと想定されるが、更にこの出入り口前面で四面底建物が検出されている。この建物は国司館地区で検出された当該期の建物では最大規模を有し、出入り口の中軸線と建物の中軸線がほぼ一致する。この為、国司館南区画南限溝と想定していたSD1980の、更に南側にも主要な施設が広がっている可能性が高い。また、四面底建物の東側にも2×4間以上の東西棟掘立柱建物も検出されており、何らかの施設の存在が想定される。出土遺物は、SD1980やその内側の連続土坑を中心に多量に出土している。種別は土師器・須恵器・緑釉陶器・越州窯青磁などで、遺物の年代は9世紀中～末頃が考えられる。

現在、資料整理中であり、詳細は平成17年度に本報告で行う予定である。

（神保）



第87図 SB1 全景（東上空から）

X. 第200次調査

1. 調査に至る経過

第200次調査は、共同住宅建設に先立つもので、平成14年6月18日に地権者の■■■■・■■■■氏より、久留米市合川町1091-1における埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は筑後国府城の北端部、平成16年5月に調査された、筑後国府跡第195次調査地点の東隣に位置する。第195次調査によって中世を中心とする遺構の存在が推定されたため、試掘を行い、遺構の存在が確認されたため、地権者に調査要の回答を行い、調査の運びとなった。



第88図 第200次調査区全景（北西から）

2. 調査の概要

調査区の設定は、共同住宅が建設される地点に行なったが、建設予定地北西部には大規模な攪乱が確認されたため、比較的良好に遺構が遺存している南東部を調査区とした。調査面積は110㎡である。遺構面は、表土下40～60cmの地点で確認され、検出面の標高は約12mを測る。地形は、周辺の状況から北および東側に向け傾斜するものと考えられる。

検出した遺構は、落とし穴状土坑1基、方形土坑3基、ピット多数である。落とし穴状遺構は、土坑底面中央に杭を打ち込んだと考えられるピットが1基あるもので、土坑の長軸1.14m、短軸0.8m、深さ0.37mを測る。土坑内から遺物の出土は確認できなかったが、埋土が当地域の縄文時代特有の暗赤褐色土であったため縄文時代の遺構であると考えられる。長方形土坑は、3基を確認した。このうち北端に位置するSK4は、その大部分が調査区外に位置するため詳細は不明である。残る2基は、主軸を東西にとる長軸2.2m、短軸1.0m、深さ0.7mの長方形土坑（SK2）、主軸を南北にとる長軸2.7m、短軸1.0m、深さ0.7mの長方形土坑（SK3）で、それぞれ底面には直径2.5cm～10cm前後の杭列が3列に並ぶ。特に杭列が整然と並ぶSK3では、20cm～30cm間隔に杭が並んでおり、土坑底面に杭を打ち込み、上部施設を構築していたことが窺がえる。遺物は、須恵器・土師器・瓦・陶磁器・瓦器が出土しているが、いずれも小片である。土坑の時期は、出土遺物から13世紀代と考えられる。SK3・4は、南北方向に並び、SK2はその列に直交するように配置されている。

なお本報告は、現在整理作業中であり、平成17年度にて行う予定である。（熊代）



第89図 SK3全景（西から）



▲第199次調査出土の越州窯青磁皿と緑釉陶器碗

跡寺分国後筑

—第42次調査—

—第43次調査—

XI. 第42次調査

1. 調査に至る経過

本調査は平成16年4月12日に地権者■■■■氏より、国分町字政所734-4、734-5の2筆について、専用住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。これに対し、対象地は周知の遺跡である筑後国分寺跡の範囲内で、対象地南部には中門とそれに取り付く回廊の存在が推定されている場所であることから、4月16日に試掘調査を実施。その結果、密度は少ないものの土坑など遺構の存在が判明し、遺跡の発掘調査が必要な旨を回答。以後は協議を重ね、基本的に今回は中門などの存在が想定される対象地南東端部を中心に、住宅建設に影響を及ぼさない範囲で確認調査として発掘調査を実施、建物建設部分については立会を行い、将来的に全面調査を行うことで合意した。

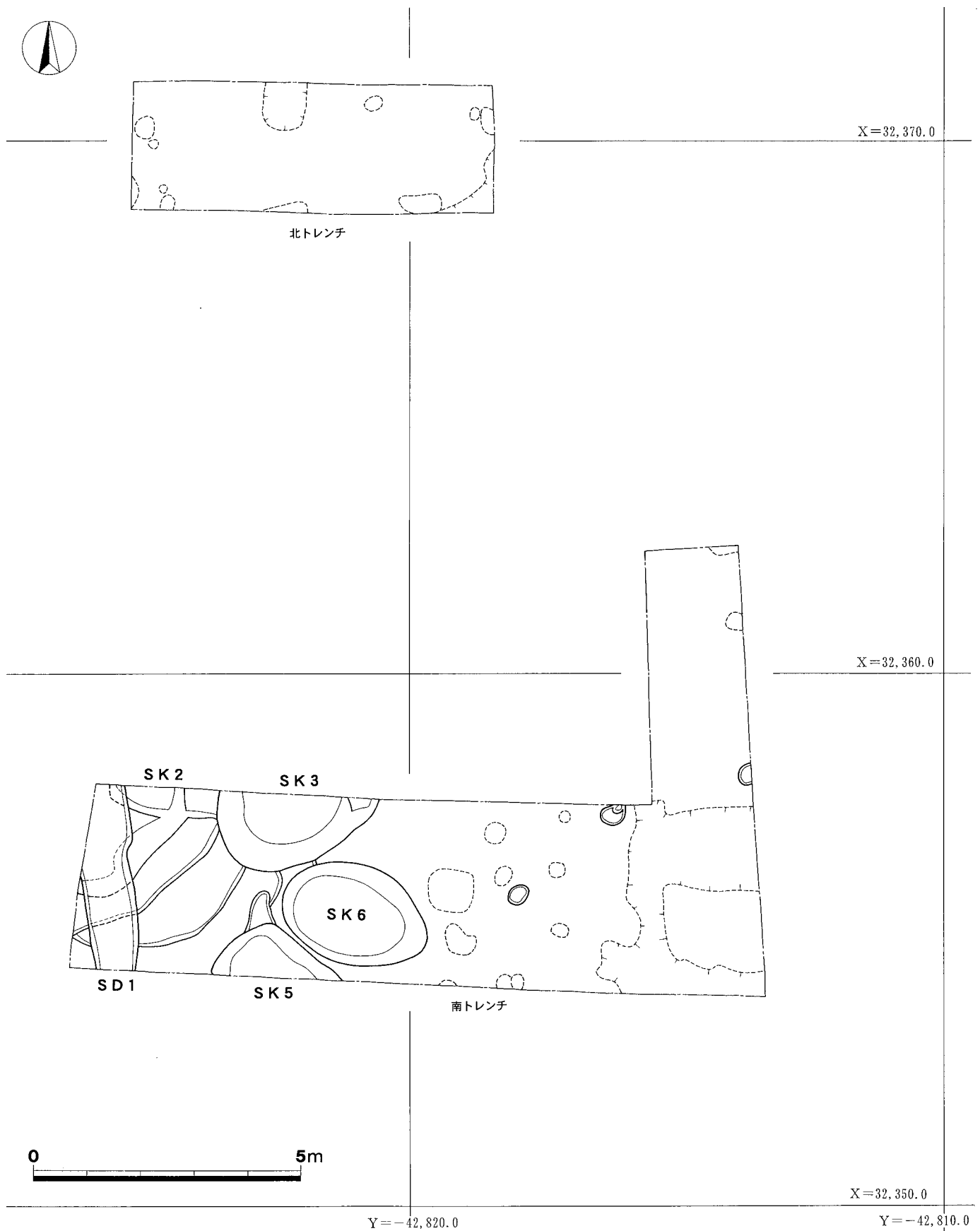
調査は平成16年4月21日から開始。対象面積298㎡の内、75㎡分について実施し、同年4月30日に終了した。

2. 調査の方法と経過

協議の成果に基き、対象地南端部～東端部にかけてL字型の調査区（南トレンチ）、北端部には長さ7m、幅2.5mの北トレンチを設定。4月21日、重機による表土剥ぎを開始した。その日午後より作業員を動員して機材を搬入し、遺構検出作業を開始したところ、北トレンチは攪乱以外全く遺構がなかったことから廃土置き場を確保するため、実測・写真撮影の後、23日に埋め戻している。



第90図 筑後国分寺跡発掘調査区位置図（1/2,500）



第91図 第42次調査遺構配置図 (1/100)



第92図 北トレンチ全景（東から）



第93図 南トレンチ全景（南西から）



第94図 調査風景（南西から）

以後は南トレンチの掘下げと実測作業を併行して進め、4月28日には遺構の清掃と写真撮影、実測作業を行い、30日に終了。同日中に機材の撤収と重機による埋め戻し作業を行い、現地作業を終了している。

記録は写真をカラーリバーサル・モノクロ6×7、モノクロ35mmで撮影し、遺構実測は主として遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」を用いて行い、他に土層図（1/10）を作成した。

3. 検出遺構と出土遺物

対象地の層序は、北トレンチでは厚さ15～20cmの盛土、10cm前後の灰色土（旧耕作土）とを除去した後、地山の明褐色砂質土に達し、南トレンチでは厚さ5cmの砂利敷きと25cmの灰色砂質土を除去した後、明褐色砂質土に達する。遺構は明褐色砂質土上面で検出したが、南トレンチも攪乱が多く、検出した遺構は溝1条、土坑5基、ピット3基である。



第95図 SD1 遺物出土状況（北から）

a. 検出遺構

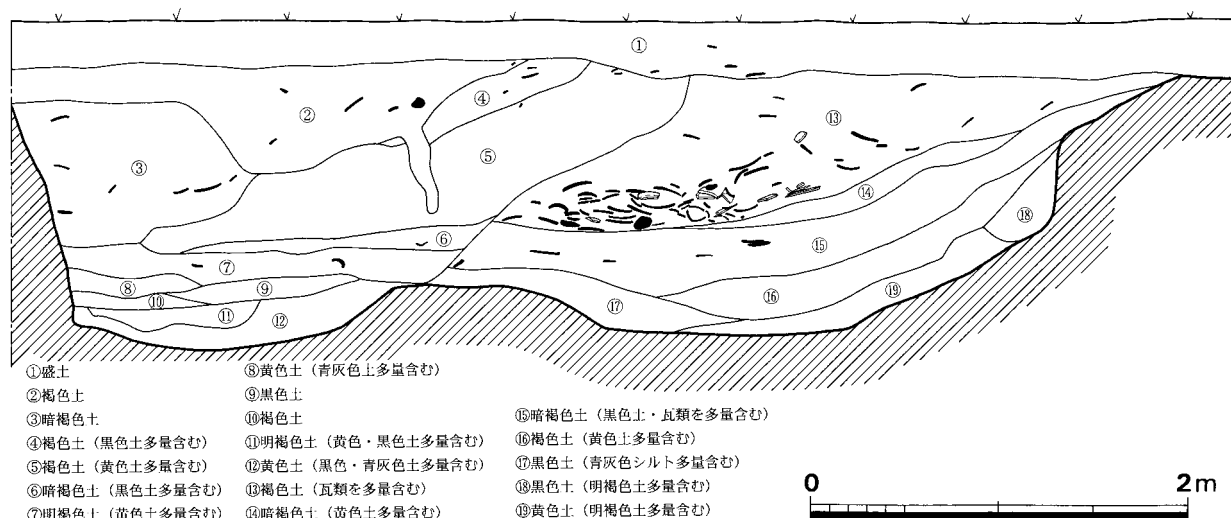
溝

SD1（第95図） 南トレンチ西端部で検出した東西溝。遺構の大半は調査区外にあるため全容は不明であるが、長さ3.5m分、幅90cm分を検出した。深さ40～50cmで、断面はU字状を呈し、溝底レベルは南側から北側へ向かって深くなっている。埋土は青灰色土・黄色土・褐色土が多量混入した埋土である程度自然埋没した後、一度に埋め戻されている。SK2よりも後出する。

土坑

SK2（第96～98図） 南トレンチ西部で検出。遺構は調査区外に延びているため全容は不明であるが、平面形が直径4m前後の円形と想定される土坑。

標高 30.00m



第96図 SK 2・3 土層堆積状況図 (1/40)



第97図 SK 2 完掘状況 (南東から)



第98図 SK 2・3 土層断面状況 (南西から)



第99図 SK 3 底面遺物出土状況 (南西から)

土中に、黒色土と黄色土が多量混入した土で東側から一度に埋め戻され、13層下部から15層にかけては大量の瓦が出土したが、16層以下では遺物の出土量は少ない。最下層から出土した土師器などから、9世紀前半代～中葉の土坑と考えられる。SK 2・3は共に礫層に達する直前まで掘られており、粘土採取等の目的で掘られた土坑と考えられる。



第100図 SK 6 完掘状況（西から）

SK 5 調査区西部で検出。遺構は南側調査区外へ延びているため全容は不明であるが、長さ1.9m、幅1.5m分を検出。深さは65cm。平面形は隅丸長方形と想定される。底面は平坦とはならず、南側へ向って緩やかに傾斜している。埋土は黒色土中に褐色土・黄色土が多量混入した土で、東側から一度に埋め戻されている。9～10世紀代の所産と考えられるが、時期を確定出来ない。

SK 6（第100図） SK 3の南側で検出。平面形は楕円形を呈し、長軸長2.8m、短軸長1.9m、深さは30cmを測る。底面は平坦。埋土は黄色土の細かいブロック土を多量

含んだ黒色土による一括埋土である。この土坑はSD 1、SK 2・3に見られる斜格子叩き文のある瓦が出土しておらず、それらの遺構より古い可能性がある。

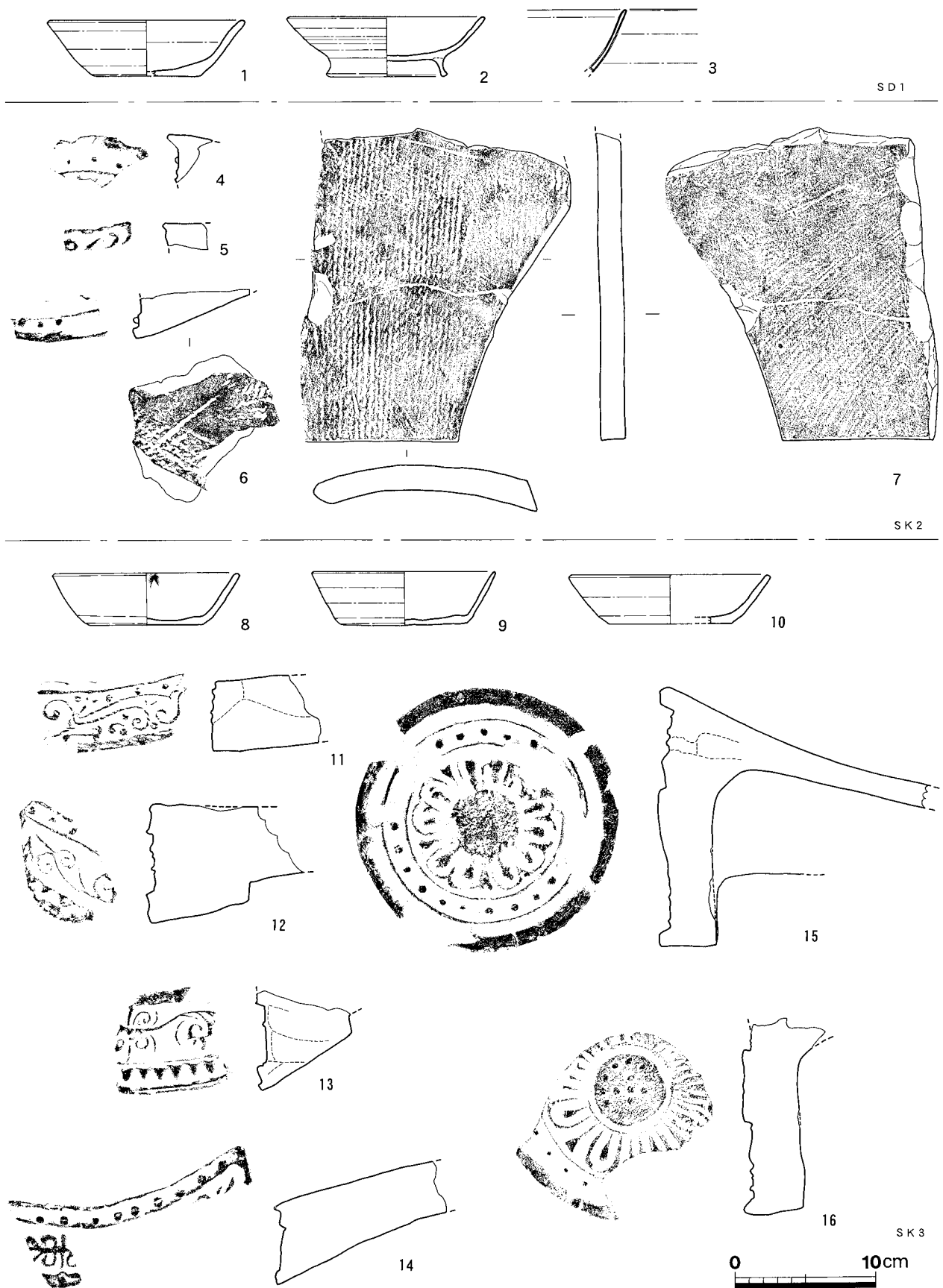
b. 出土遺物

第42次調査ではコンテナー10箱分、1,185点の遺物が出土した。遺物はSD 1、SK 2・3から出土したものが大半を占める。その内容は、土師器、須恵器、瓦類、輸入陶磁器（青磁）、陶器、縄文土器・石器であるが、瓦類が892点と最も多く、次いで土師器が237点出土しており、その他は数点ずつあるに過ぎない。瓦類を除けば細片資料が多く、図示するに至った遺物は少ない。

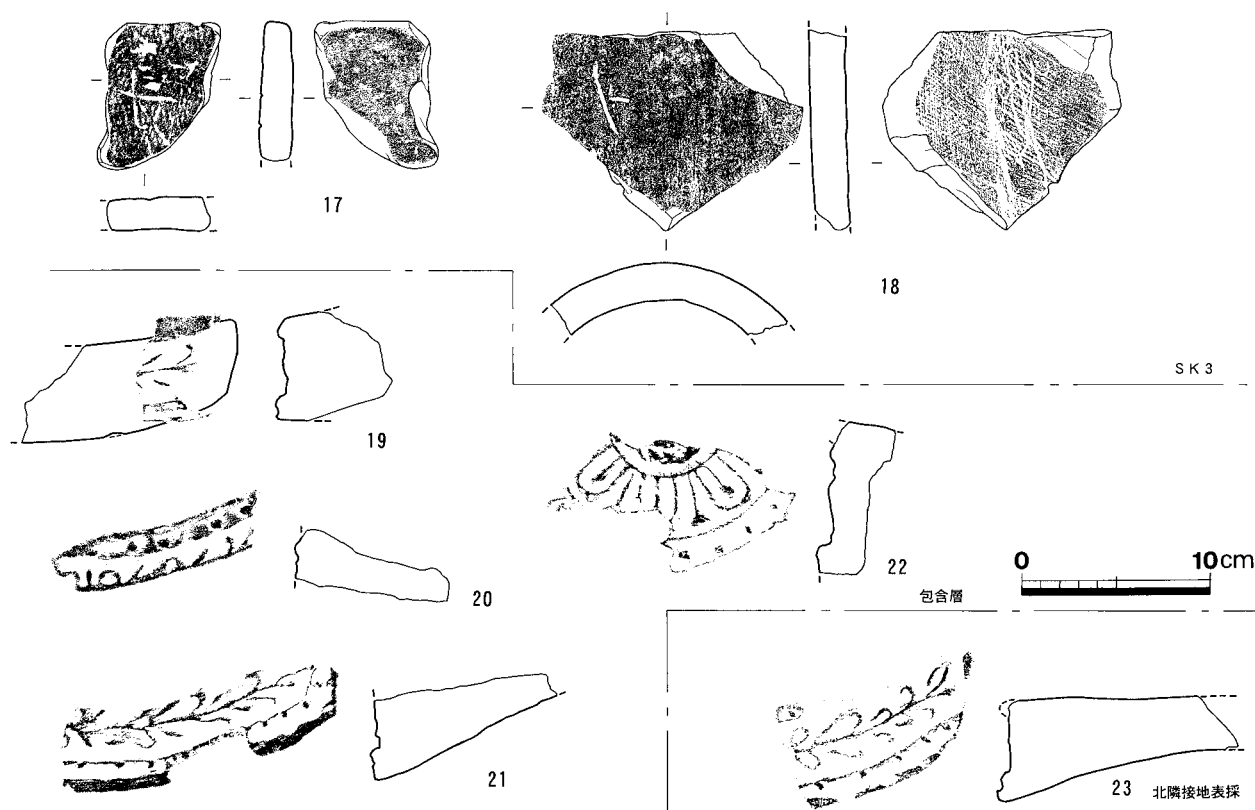
SD 1 出土遺物（第101・103図1～3） 土師器56点、須恵器2点、青磁1点、平瓦（正格子叩き文5点、斜格子叩き文6点、縄目叩き文63点、同スリ消し5点）、縄目スリ消し丸瓦26点、瓦類細片63点、黒曜石剥片4点が出土した。1・2は土師器。3は龍泉窯系青磁片。

SK 2 出土遺物（第101・103図4～7） 土師器3点の他は全て瓦類である。軒丸瓦2点、軒平瓦2点、平瓦（正格子叩き文5点、斜格子叩き文1点、縄目叩き文91点、同スリ消し13点）、縄目スリ消し丸瓦24点、瓦細片114点が出土。4は外区圏線と珠文部分が残る単弁九弁軒丸瓦片。軒丸瓦は他に1点直立無文の周縁部のみ残るものがある。5・6は共に瓦当面の中央に上下に分かれた中心飾りを持つ均整唐草文の軒平瓦片。7は縄目叩き文を有する隅切平瓦。凹面端部の一辺は焼成後に打ち欠かれている。

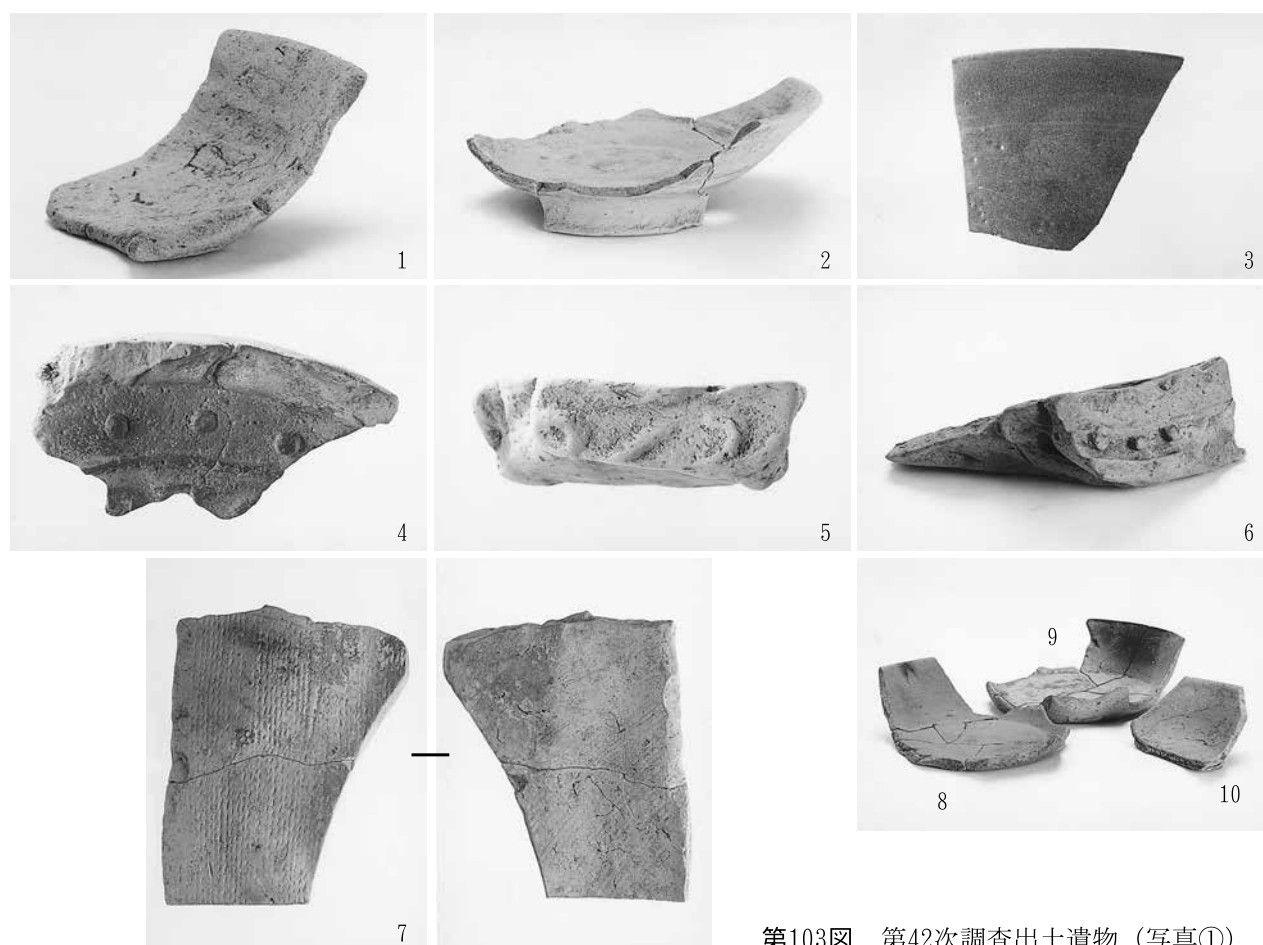
SK 3 出土遺物（第101～104図8～18） 今回の検出遺構中最も多い806点の遺物が出土した。土師器97点、須恵器6点、軒丸瓦3点、軒平瓦4点、平瓦（正格子叩き文8点、斜格子叩き文6点、縄目叩き文303点、同スリ消し70点）、丸瓦（縄目叩き文2点、同スリ消し307点）、縄文土器2点、黒曜石製石匙1点、同剥片2点、サヌカイト石鏃1点、同剥片4点、砂岩製砥石1点が出土。8～10は土師器の坏。いずれも体部と底部の境にヘラケズリ調整が施されている。11～14は有顎の軒平瓦。11は右側へ偏行する忍冬唐草文とその周囲に珠文を配し、外区は細線によって示されるだけの文様を施すもので、筑後国分寺跡では出土例が少ないタイプの軒平瓦である。12～14は均整唐草文を中心に、一段高くなった外区の上側に珠文、下側に外行陽起鋸歯文が施される。15・16は軒丸瓦。15は複弁五弁のもので、内区よりやや高くなった中房に1+4+12の蓮子を配し、内区には内側に肉太の子葉を施し、簡略化された複弁の蓮弁があるが、一部間弁の代わりに単弁が配されたことで、複弁3弁と単弁5弁の変則的な配置となっている。外区は二重圏線の中に24個の珠文を配し、さらに無文の直立周縁が付けられている。16は筑後国分寺跡で最も多い単



第101図 第42次調査出土遺物実測図① (1/4)



第102図 第42次調査出土遺物実測図② (1/4)



第103図 第42次調査出土遺物 (写真①)



第104図 第42次調査出土遺物（写真②）

弁九弁のもので、高い中房に1 + 4 + 12の蓮子を配し、中房と蓮弁帯の間には圈線があり、蓮弁は退化し子葉と間弁も細身である。内区と外区との境にも圈線があり、27個の珠文図を配置して、さらに直立無文周縁で瓦当面を囲んでいるが、周縁が中房よりも低い特徴を持つ軒丸瓦である。図示は省いたが、SK 3出土軒丸瓦は他に1点、恐らく16の単弁九弁軒丸瓦と同じタイプと考えられる外区珠文部と周縁のごく一部のみ残る細片が出土している。17は焼成が不良で軟質であるが、縄目叩き文を有する平瓦の細片である。凸面には「長」の刻書文字が焼成前に細い楊枝状の工具で記されている。18は縄目叩き文をスリ消した丸瓦の細片で、凸面には「ト」字状の刻みが焼成前に施されている。

包含層出土遺物（第102・104図19～22） 19～21は先に掲げたSK 3出土品の軒平瓦（第101図12～14）

よりもさらに簡略化された均整唐草文の有顎軒平瓦である。外区と脇区は内区よりも一段高くなり、それぞれ珠文が配されている。22はSK 3出土の16と同じく、単弁九弁の軒丸瓦下部細片である。

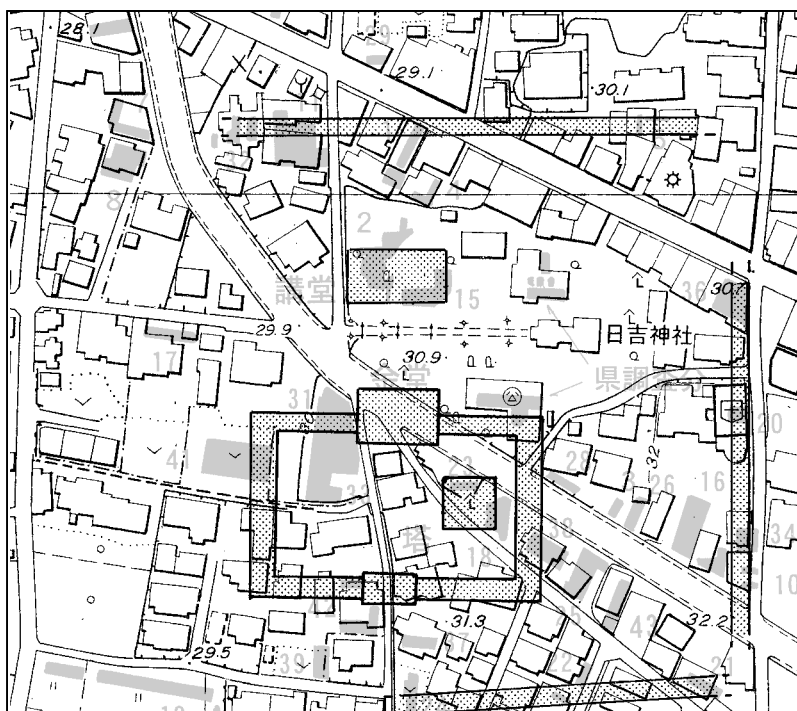
表面採集遺物（第102・104図23） 今回の調査地の北側隣接地で採集されたもので、12～14、19～21と同じく均整唐草文軒平瓦の端部片である。

この他の遺構出土品については、SK 5は土師器細片21点、縄目叩き文平瓦3点、縄目スリ消し丸瓦1点、縄文土器5点、すり石2点、磨製石斧1点が出土。SK 6からは、土師器45点、須恵器12点、陶器片1点、平瓦（正格子叩き文1点、縄目叩き文4点、縄目スリ消し1点）、縄文土器4点、黒曜石剥片2点、サヌカイト剥片1点が出土したのみ。3基検出されたピットの内2基から遺物が出土。SP 1は土師器6点、縄目文叩き平瓦1点が出土。SP 8からは縄文時代中期の阿高式系縄文土器2点が出土した。これらの遺物は何れも細片資料である。

4. 小結

今回の調査は従来からの筑後国分寺推定伽藍配置復元案において、中門と南西回廊の存在が推定される対象地について一部ながらトレンチ調査し、遺構状況を把握することを主目的とした調査であった。調査の結果、北トレンチは全く遺構が無く、南トレンチから溝1条、土坑4基、ピット3基が検出された。

中門及び南面回廊について



第105図 従来の伽藍配置復元案

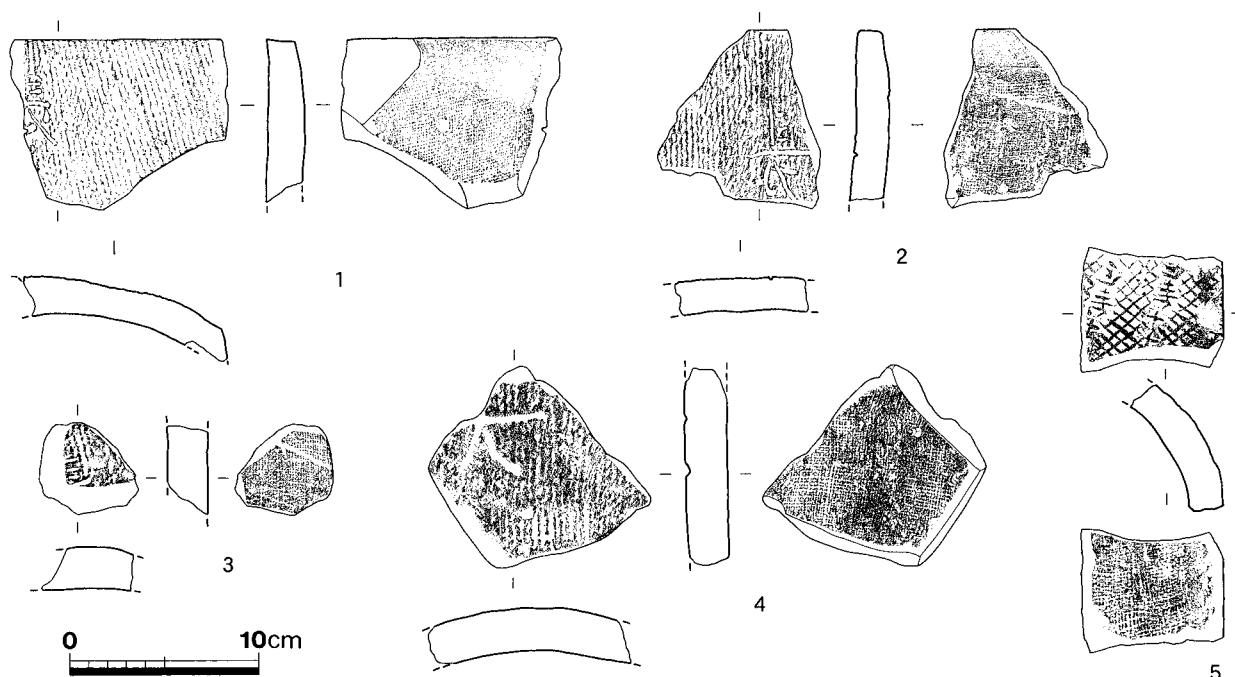
調査区北東隅に想定された中門の西側、及び回廊の存在については、今回初めて南面回廊推定線を調査したが、その想定線上に設定した北トレンチでは該当する遺構は見当たらない。近年実施された第38・41次調査などにおいても回廊と考えられる遺構は検出されず、その存在が疑問視されるに至っている。但し、南面回廊が想定線よりも若干北側に所在し、第102図23に掲げた軒平瓦が表採された北側隣接地側に存在する可能性も残されている。

筑後国分寺跡の文字瓦について

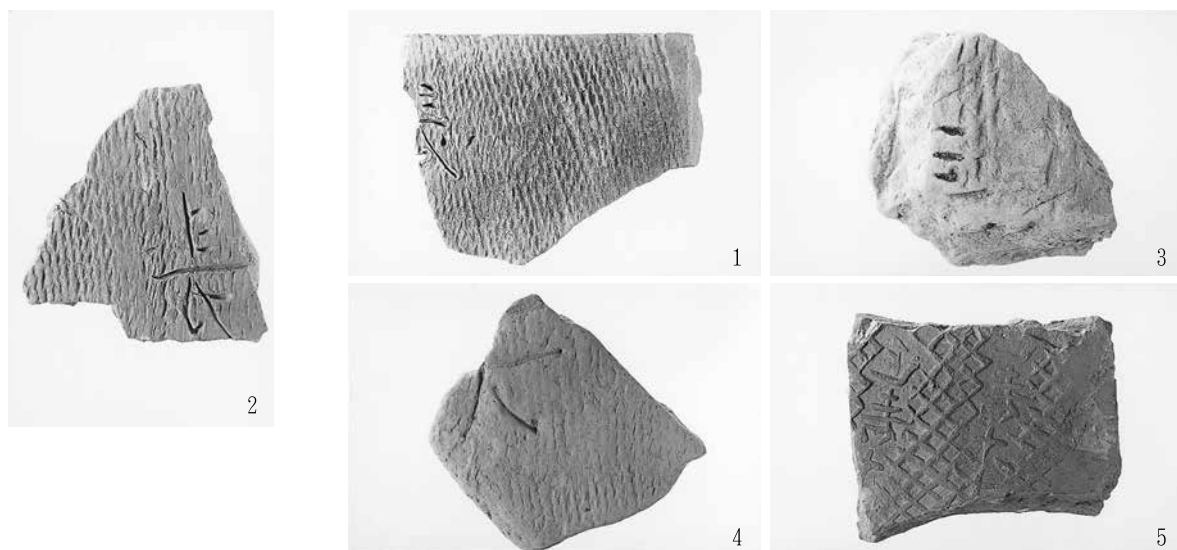
今回の調査地南西隅で検出したSK 2・3や、南西隣接地で行い南面

築地を検出した第39次調査包含層からは多量の瓦が出土。付近には南大門が想定されており、それに伴う瓦の可能性はある。

SK 3出土品の中で注目される資料として、焼成前に刻まれた「長」の文字がある縄目叩き文平瓦（第102図17）が1点ある。昭和55年度に実施した第18次調査の表土中からも「長」と焼成前に刻まれた文字瓦が3点出土し、他にも2点の文字瓦が出土しているが、第18次調査の文字瓦はこれまで『久留米市史』第12巻に拓影が紹介されていたのみであったため、この機会に改めて報告しておきたい。



第106図 第18次調査出土文字瓦実測図 (1/4)



第107図 第18次調査文字瓦 (写真)

第18次調査地点は今回の調査地の約50m北西に位置し、塔基壇跡を対象とした調査である。塔の基壇及び、心礎や四天柱の礎石抜き跡が良好に残ることが判明した大きな成果が得られているが、文字瓦はその際、基壇を覆う表土中から出土した資料で、いずれも凸面に文字がある。第106・107図1～3は「長」刻書瓦。2は「長」文字の下、瓦の割れ目部分に横方向へ運筆した痕跡があり、もう一文字あると推定される。3は文字の一部しか残されていないが、今回出土した文字瓦も含め4点の「長」の字にはそれぞれ筆跡に違いが認められ、別人の手になるものと考えられる。4は「大」と考えられる焼成前の刻書を持つ縄目叩き文平瓦。「長」や「大」の文字が意味するものは不明である。5は斜格子叩き文の中に「延喜十口」の陽刻叩き文が見られる丸瓦。この叩き文字は国分尼寺推定地を調査した第30次調査包含層出土品などから「延喜十九年」銘と判断され、この瓦は西行山瓦窯の製品と考えられている資料である。

その他の筑後国分寺跡の文字瓦としては、第30次調査包含層などに例がある、斜格子文に「開弓?」の陽刻叩き文がある資料がある。

(水原)

XII. 第43次調査

1. 調査に至る経過

本調査は平成16年7月13日、地権者■■■■氏より、国分町字宮ノ脇743-2、743-3の2筆について、事務所増築工事に先立つ埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。これに対し、対象地はその西半部において昭和59年度に筑後国分寺跡第25次調査が実施されて、掘立柱建物2棟、柵列1、ピット群などの存在が知られている場所であるため発掘調査が必要な旨を回答。以後は協議を進め、民間受託事業として、8月に発掘調査を行うことで合意した。

これを受けて7月16日には法57条2項による届出、7月20日には調査依頼が提出され、8月5日には■■■■氏と久留米市長江藤守國との間で、筑後国分寺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結。

8月17日より現地における発掘調査を開始する運びとなった。

2. 調査の方法と経過

協議の成果に基き、対象地東端部に南北15m、東西4mの南北トレンチを設定。8月17日より発掘を開始した。対象地はアスファルト舗装された駐車場であったため、まずアスファルトカッターを入れアスファルトを除去する作業を開始。翌18日には重機による表土剥ぎを行った。20日には機材を搬入して遺構の検出作業を行い、同日午後には南側から遺構の掘下げを開始し、さらに測量も行った。23日には遺構掘下げを終了。24日には午前中に遺構の清掃と写真撮影、午後は実測作業と機材の撤収を行う。26日には遺構の埋め戻し作業を行い、現地における作業を終了。対象面積200㎡の内、69㎡を調査している。



第108図 調査風景（北から）

記録は、写真をカラーリバーサル・モノクロ6×7、モノクロ35mmで撮影し、遺構実測は遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」を用いて行った。

整理作業は同年9月1日～同30日の期間で実施した。

3. 検出遺構と出土遺物

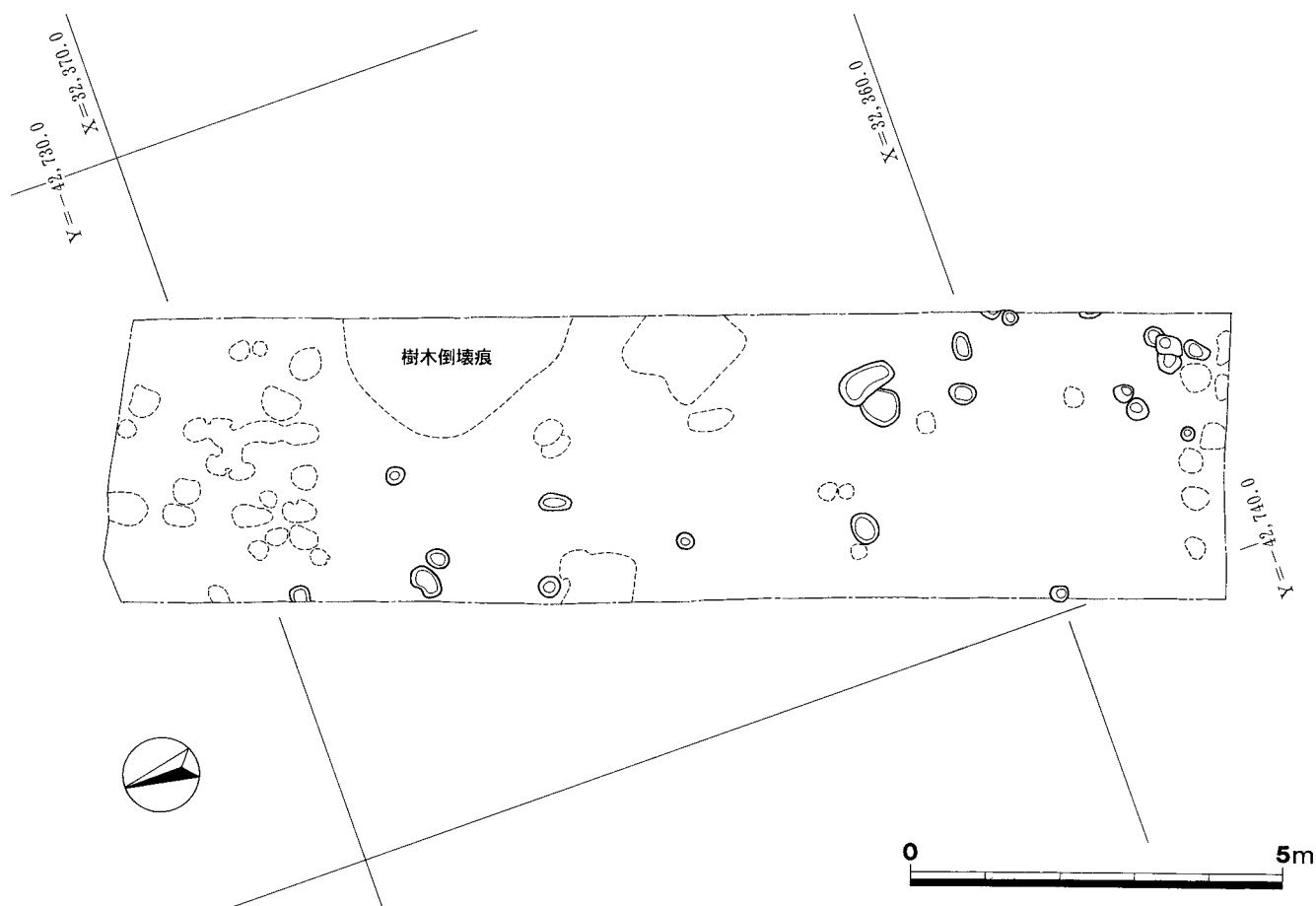
対象地南端部における層序は、現地表から30cmのアスファルト舗装とその基礎を除去した後、約10cmの厚さの暗褐色土（旧地表）、40cmの褐色土、10cmの遺物を包含する黒色土層を経て、明褐色土の地山に至る。遺構は全て地山検出面で検出されたもので、埋土の色調などから奈良～平安期と見られる直径20～25cmを測るピット群23基が検出された。その他は樹木倒壊痕1基と近世以降の攪乱である。

遺物は4基のピットから土師器細片4点、青磁細片1点、瓦細片1点が出土したのみである。

4. 小結

過去の第25・38・41次調査で東面回廊想定線上を調査したが該当する遺構が検出されず、想定よりも規模が大きく東側へ広がっていることも考えられたため第43次調査を実施したが、今回は顕著な遺構が検出されず、回廊の存在にはより疑問が呈される成果が得られた。

（水原）



第109図 第43次調査遺構配置図 (1/100)



第110図 第43次調査区全景 (北から)

報告書抄録

ふりがな	ちくごくふあと・こくぶんじあと
書名	筑後国府跡・国分寺跡 ー平成16年度発掘調査報告・概要報告ー
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第210集
編著者名	神保公久・小澤太郎・熊代昌之・水原道範
編集機関	久留米市教育委員会 教育文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9718 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2005（平成17）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 第188次調査	くろめしあさづままちあさ 久留米市朝妻町朝妻 191-1、192-2 1414-5	40203	30112	33° 18′ 48″	130° 32′ 55″	2003.04.17 ～2003.06.09	460㎡	共同住宅建設に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第188次調査	官道	奈良 平安	官道 礫敷き遺構		土師器・須恵器・古瓦 輸入陶磁器・緑釉陶器 石製品		奈良～平安時代の古代西 海道跡を調査。盛土や礫 敷きされた道路遺構が良 好に検出された。	

要約

筑後国府を東西に貫く古代西海道を発掘調査した。大宰府から南下した西海道は、筑後川をわたりヘボノ木遺跡に至る。ヘボノ木遺跡南西部で西へ方向を変えた西海道は、井田川をわたり筑後国府に至る。第188次調査地は井田川渡河地点にあたる。検出した西海道は削平を受けていたものの、盛土整地を行い、小礫や遺物細片で舗装を施していることが判明した。更に西海道の路側帯やその南に広がる礫敷き遺構を検出し、筑後国府へのエントランス部にあたる本調査地周辺では、丁寧な施工が施されていることが想定される。西海道の築造時期は確定できなかったが、西海道上面に堆積する包含層や整地層から、廃絶時期は11世紀末～12世紀初頭と考えられる。

土木工事の届出日	平成15年4月16日	遺物の発見届日	平成15年6月11日
----------	------------	---------	------------

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 第192次調査	くろめしあいかわまちあざ 久留米市合川町字 井葉206-8、207-1	40203	30112	33° 18′ 43″	130° 32′ 30″	2003.10.15 ～2003.12.08	439㎡	共同住宅建設に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第192次調査	官衙	奈良 平安	堅穴建物 1軒 掘立柱建物 2棟 道路遺構 1 土坑44基 溝 5条		土師器・須恵器 土師器・須恵器		国司館南側隣接地を調査。 国司館に沿って南へ伸び る道路遺構を検出。新た な区画溝を検出。	

要約

Ⅱ期国府に伴う国司館推定地の南側隣接地を調査。奈良時代の堅穴住居1軒、平安時代の掘立柱建物2棟、道路状遺構1、溝5条、土坑44基を検出。今回検出した遺構の中で最も注目されるのは、9世紀中頃～後半代の国司館が存在した道路状遺構165SF23とその両側溝と考えられる溝SD4・5である。この道路は第50次調査で検出された西海道と推定される東西道路との交差点から国司館の東辺に沿って南へ延びている状況が確認され、本調査地の南西に所在した湧水点へ向かっていると推定される。今回は165SF23の約6m西側を並行して走行する溝SD6も検出されたことにより、現在国司館南区画と呼称している区画のさらに南側にも、SD6を東辺とした区画が存在したことも想定される成果が得られた。

土木工事の届出日	平成15年8月18日	遺物の発見届日	平成15年12月12日
----------	------------	---------	-------------

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
			市町村	遺跡番号					
筑 後 国 府 跡 第194次調査	久留米市合川町字 天神木1340-2		40203	30112	33° 18′ 51″	130° 32′ 15″	2003.12.16 ～2003.12.25	35㎡	共同住宅建 設に伴う確 認調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑 後 国 府 跡 第194次調査	官衙	弥生 飛鳥 奈良	竪穴住居	1軒	弥生土器		前身官衙期の掘立柱建物 と、Ⅰ期国庁南限溝を確 認。		
		掘立柱建物	1棟	土師器・須恵器					
		土坑	1基	土師器・須恵器					
		溝	1条						
要 約									
Ⅰ期国庁とその前身官衙が所在した古宮地区とその南に所在する天神木地区との字境線付近を調査。狭小なトレン チによる確認調査であったが、前身官衙に伴う東西棟掘立柱建物と考えられる柱穴、及びⅠ期国庁の南辺築地 外溝と考えられる遺構を検出した。									
土木工事の届出日		平成15年11月26日			遺物の発見届日		平成15年12月26日		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
			市町村	遺跡番号					
筑 後 国 府 跡 第195次調査	久留米市合川町字 東1090-1		40203	30112	33° 19′ 0″	130° 32′ 26″	2004.05.11 ～2004.06.02	169㎡	専用住宅建 設に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑 後 国 府 跡 第195次調査	集落	平安 室町	土坑	2基	土師器・須恵器		筑後国府城の北端付近を 調査。官衙遺構は確認で きなかったが、中世～近 世の遺構を主に検出した。		
		溝	1条	土師器・陶磁器					
要 約									
筑後国府城の北部に位置する字東地区を調査。溝1条、土坑2基、ピット28基を検出。東西溝SD1はその一部 を検出したのみであるが、上端部幅2.8m以上の規模を持つ溝で、室町時代から江戸時代中期にかけて3～4回改 修を受けながら存続したと推定され、試掘調査の状況からこの溝は南へ折れている可能性が高い。また、常時水 があった痕跡はないことから用水路ではなく、何らかの区画施設と推定される。土坑2基は、その形状から土壇 墓と推定される。									
土木工事の届出日		平成16年4月13日			遺物の発見届日		平成16年6月3日		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
			市町村	遺跡番号					
筑 後 国 府 跡 第196次調査	久留米市合川町字 田代1190-1、1190-3		40203	30112	33° 18′ 57″	130° 32′ 19″	2004.06.21 ～2004.07.16	322㎡	宅地分譲に 伴う確認調 査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑 後 国 府 跡 第196次調査	集落跡	弥生	竪穴建物	9軒	弥生土器・石製品		概要報告		
		掘立柱建物	1棟						
		土坑	2基						
		溝	3条	土師器					
土木工事の届出日		平成16年6月14日			遺物の発見届日		平成16年7月21日		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
			市町村	遺跡番号					
筑 後 国 府 跡 第197次調査	久留米市合川町字 立石386-1、387 388		40203	30112	33° 18′ 52″	130° 32′ 35″	2004.07.20 ～2004.07.23	402㎡	現況測量
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑 後 国 府 跡 第197次調査	集落跡	中世	土塁		—		中世に築造された土塁痕 跡の現況調査を行った。		

要 約									
立石地区に残存する、通称「立石土塁」の現況測量調査を実施した。周辺の調査において、立石地区には1町四方の区画が存在したことが判明している。この区画は、土塁と外側に大溝を伴うことが知られており、土塁は本調査地に残存するのみである。測量の結果、土塁は基底部幅4～6m、南北約55m、高さ約1mが残存していることが判明した。									
土木工事の届出日		平成16年7月16日			遺物の発見届日		—		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
ちくごこくふあと 筑後国府跡 第199次調査	く る め し あいかわまちあざ 久留米市合川町字 井葉208-1		40203	30112	33° 18′ 44″	130° 32′ 29″	2004.10.12 ～2005.01.13	400㎡	重要遺跡確 認調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第199次調査	官衙	奈良 平安	竪穴建物 掘立柱建物・土坑 溝		土師器・須恵器・古瓦 輸入陶磁器・緑釉陶器 石製品		概要報告		
土木工事の届出日		—			遺物の発見届日		平成17年1月17日		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
ちくごこくふあと 筑後国府跡 第200次調査	く る め し あいかわまちあざ 久留米市合川町字 東		40203	30112	33° 19′ 0″	130° 32′ 28″	2005.01.18 ～2005.01.27	110㎡	共同住宅建 設に伴う確 認調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第200次調査	集落	縄文 中世	落とし穴 土坑		土師器・須恵器・瓦器 輸入陶磁器		概要報告		
土木工事の届出日		平成17年1月16日			遺物の発見届日		平成17年1月16日		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
ちくごこくぶんじあと 筑後国分寺跡 第42次調査	く る め し こく ぶ まちあざ 久留米市国分町字 政所734-4、-5		40203	30618	33° 17′ 43″	130° 32′ 15″	2004.04.21 ～2004.04.30	75㎡	専用住宅建 設に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国分寺跡 第42次調査	寺院	平安	土坑 溝	5基 1条	土師器・須恵器・古瓦 輸入陶磁器		中門・回廊推定地を調査。 該当遺構は検出されていない が、大量の古瓦が出土した。		
要 約									
筑後国分寺復元案において、中門とそれに取りつく南西回廊の存在が想定されている場で、トレンチによる確認調査を実施。中門や回廊と考えられる遺構は検出されなかったが、対象地南西隅部で土坑4基を検出。9世紀代の土坑SK2・3からは大量の瓦が出土しており、調査地の南西隣接地に想定されている南大門に伴う瓦である可能性が考えられる。									
土木工事の届出日		平成16年4月30日			遺物の発見届日		平成16年5月6日		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
ちくごこくぶんじあと 筑後国分寺跡 第43次調査	く る め し こく ぶ まちあざ 久留米市国分町字 宮ノ脇743-2 743-3		40203	30618	33° 17′ 40″	130° 32′ 19″	2004.08.17 ～2004.08.26	69㎡	事務所増築 に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国分寺跡 第43次調査	寺院	平安	ピット		土師器・青磁・古瓦		筑後国分寺域の東端部付 近を調査。主要遺構は検 出されていない。		
要 約									
第25次調査地の未調査部分を調査。埋土の色調などから奈良～平安期と推定されるピット群23基と樹木倒壊痕1基が検出されたのみである。									
土木工事の届出日		平成16年7月16日			遺物の発見届日		平成16年8月30日		

筑後国府跡 国分寺跡

—平成16年度発掘調査報告・概要報告—
久留米市文化財調査報告書 第210集

平成17年3月31日

発行 久留米市教育委員会
編集 教育文化部 文化財保護課
印刷 香和印刷株式会社

